

# 千年ロッドに選ばれた 無個性少年

遊人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは悪夢の記憶、断ち切った筈の呪縛、しかしそれは交わり、時を、輪廻を経て再び牙を向く

運命は何処へ向かうのか、少年少女は戦いの果てに何を見るのか？何を掴むのか？

2018年12月9日

あらすじ変更しました

# 目次

ブレイク・オブ・ザ・ワールド	1	帝王の深怨	72
闇の誘惑	6	ヒーロー・ヘイロー	81
悪魔の憑代	10	醒めない悪夢	96
光と闇の洗礼	17	死神の巡遊	101
御前試合	24	無力の証明	109
混沌の種	32	決戦の火蓋	118
終わりの始まり	38	命の綱	125
Vainー裏切りの嘲笑	43	王者の看破	133
真実の名	49	グランドクロス	146
ヒーローブラスト	55	閃刀空域ーエリアゼロ	156
魔界台本「オープニング・セレモニー」	66	ヒーローアライブ	167
		連成する振動	178
		急転直下	186

悪夢再び	195
勇気の旗印	204
戦乙女の契約書	221
チキンレース	232
ヒーロー・シグナル	244
我が身を盾に	256
H―ヒートハート	275
E―エマージエンシークール	286
R―ライトジャステイス	302
O―オーバーソウル	327
反撃準備	345
現世と冥界の逆転	356

# ブレイク・オブ・ザ・ワールド

それは王と少年の遊園により地中深くに眠っていた

しかし、それは突如、再び表舞台に現れることになる。

王との因縁に取り憑れた男が決着の物語を紡ぐ為に己の積み上げてきたありとあらゆる力を注ぎ込み堀りあげたのだ。

かくして幾多の困難を乗り越きつた男は決着をつけに向かった。

時を、次元を、肉体を、この世の果てへ執念でたどり着かせたのだ。

その戦いの結末は何処にも描かれていない。

それは戦いを通して高めあつたものにはしか許されぬ記憶、立ち入ることすらできぬ聖域

再びの役割を果たしたそれはその男の弟によつて嚴重に保管されることになった。

そして時は巡り、王の戦いの後も終わることのない時の流れは新たな決闘の歴史を描いていく

ある時は人類の未来を、ある時は世界の命運を、ある時は大切な思いをかけた激闘は止まる事を知らず

光と闇は交互にその勢力図を塗り替え数多の決闘者達が目覚め、幾千を越える戦いが繰り返された

その積み重なる時代の中で

一滴の悪意が

零れ落ちた

「ココハ、ドコダ？」

それは戦いに負け封印されていた思念

「ワレハ・・・マケタ・・・ハズダ・・・。」

しかし、世界に絶対はなく、幾多の光と闇の激突により生じたエネルギー達は那由多の彼方にある一つの悪を呼び覚ましてしまった。

「・・・ハハハハハハッ！」

己の中にある最期の記憶、

それは敗北、そして封印されて道半ばで閉ざされたという無念の記憶

しかし、思い出しても尚笑うことをやめられなかった。

「ワレノフクシユウノミチハ・・・、フタタビヒラカレタ！モウイチド！モウイチド、ミガツテナニンゲンドモニフクシユウヲ・・・、」

ズキッ！

「グッ！サスガニ失ナワレタチカラハイマダモドツテハイナイカ

イマイマシイ、

シカシアセルヒツヨウハナイ。

コンドコソ、セカイニゼツボウヲアタエテミセル。

ソノタメニモ、ドコカデミヲヤスマセネバ・・・ムツ!？」

そして、思念は導かれる。

遙かなる時を経て交わることはない二つは今、始まりの邂逅を果たす

「ホウツ？ワレライザナオウト？オモシロイ！ナニヲミセテクレル？」

かくして思念は器に注がれた。

そしてそこで知る

原初の戦いを、神を

途方もない闇を！



「フハハハツ！スバラシイ！ソウダ、コノチカラガアレバワレハフタタビ神ニナレル。」  
そうして思念は器の中で時を待つ

来るべき主を待ち深い地中で永い眠りについた

—————

こうして悪は人知れず世に放たれた

そして、人類はそれに気付くことなく歴史は続く

そして、決闘者の歴史は終焉を迎え、幾多の輪廻の経て世は世界の人口の八割が何かしらの特殊能力を持つ超常社会へと姿を変える

## 闇の誘惑

一一一一一 緑谷 出久 4才

今日僕は運命を告げられた。

総人口の八割が『個性』を持ち新たな社会を進めていく現代社会

その発現した個性は必ずしも人類の前進に使われるわけではなく己の私利私欲を満たす為に振るう敵《ヴィラン》が生まれるきっかけにもなっていた

そんな敵《ヴィラン》達から平和の為に戦う者を人は英雄《ヒーロー》と呼んだ

ヒーローは市民達の平和の使者として讃えられ、また子供達の憧れにもなっていた

少年・緑谷 出久も漏れなくそんな一人であり、幼心に母にせがんでタブレットでヒーロー達の活躍を追い、市民を守り尊敬の念を集める姿に自らの未来を重ねていた。

その中でも一際輝くヒーロー、平和の象徴・オールマイトに緑谷少年を始め多くの人々が心を動かした

幼なじみの爆豪 勝己 《かつちゃん》と共に語った夢、それは憧れのオールマイトの  
ようなヒーローになり、自分たちも平和の象徴として肩を並べてそのさらに先へ進もう  
という壮大な地図

でもそれが可能だと信じて疑っていなかった

しかし医師から告げられた僕の運命、それは『無個性』であるということ  
それからというもの僕の周りを取り巻く環境は一変した。

周りは自分の未来を夢に見て個性を伸ばす訓練を始める中、無個性な僕は自身の生ま  
れ持った力を伸ばす努力をするしかなかった。

周りからどれだけ馬鹿にされても一番近くにいた筈の幼なじみに馬鹿にされ、傷つけ  
られて僕も夢を捨てきれなかった。

そんな僕の夢を周りは絵空事として吐き捨て、やがて僕は孤立していった。

そんな一人悩み、苦しむ僕に母は泣きながら謝り、

父は何も言わず唇を噛み締めていた。

そんな二人の優しさに僕は胸が苦しくなるのを感じた、

何が僕のなかで初めて嘔いたような気がした。

こうして僕は心に傷を負いながら、蜘蛛の糸よりも細く脆い希望を頼りに僕は年を重

ねた

しかし、それもやがて限界を迎えようとしていた。

小学校に上がってもまだヒーローになるという夢を追いかけていた僕だったが年を重ねるごとに覚えてくるのは残酷な現実だけだった。

どれだけ努力しても埋まらない差、個性を持たないという圧倒的少数派に組み込まれ、蔑まれ、奇異なものとしての扱いを受ける日々

しかしそんな日々はある日唐突に終わりを迎える、それは10才の誕生日

仕事で海外を飛び回っている父が珍しく休みとなり家族で迎える事が出来た、この日はやはり心が軽くなるのを僕は感じた。

父が誕生日のプレゼントとして海外のお土産を僕にくれた。

それは目の模様の入った金色の杖だった、袋を開けそれを見た時、その目は妖しい光を放った

—————

閑静な住宅街で火災事故が起きた。

中には大人二人の遺体がのこっており、この家の者と判明、近所の詳言ではケーキを買って帰る姿が目撃されておりこの二人の息子が本日誕生日だった為ローソクの火が起こした痛ましい事故として処理された。

警察は息子の安否を確認するも見当たらず事故はまた時の中に埋もれていった

## 悪魔の憑代

杖に残る負の思念は確信した。

この者にもあの男と同じ可能性を秘めていると、

背景や事情は違えどこの男も憎悪を抱き、傷つけられる運命を乗り越えようとする姿  
が

自由を渴望する心の飢えが

同じだあの男と

だからこそ託した

彼らなら今度こそやり遂げてくれる

この世界の王となり新たな運命を作り出すと

—————緑谷 出久 10才

俺は今新たな力を手にいれた

そうだ、何も恐れることはない、なぜなら俺は間違つてなどいなかったからだ、

運命に殺されるなら俺が運命を壊してしまおう、間違つた世を正しに行こう

ご主人様、何も不安に思うことはないあなたの心の闇は間違つていない、それを生む物を壊しに行こう

その為に枷を外し、牢を壊そう、

今日はご主人と俺の本当の誕生日だ

そして次に僕が目覚めたときには辺りは火の海になりそのなかで物言わぬ骸と化した両親の姿だった

僕は後悔と罪悪感に襲われ涙が溢れだしていた

なぜ？ どうして？

答え無き問いの反芻が頭を支配したとき、どこからか声が聞こえた

「お前の両親を死に追いやったのはこの世の歪み、貴様の未来すら閉ざそうとするこの世界の歪みそのものだ」

なあ、わかつたら、ご主人様あなたは何も間違っていないと

—————爆豪 勝己 16才

自慢じゃあないが俺は幼い頃から何でも出来たスポーツも勉強も周りをすぐにおいてけぼりにしてきた、

だからこそ許せなかった、未練がましく夢にすぎるあいつの姿が、俺と肩を並べて道を語ろうとするあいつが、

だからこそ叩きのめした、俺の道に入り込んで来るな、

無個性の木偶の坊《テク》の癖に

幼い故の、無邪気さが残る故の残酷さ

それを気に止める間もなくあいつは死んだ

いくら毛嫌いしていたとて幼なじみの死は俺の心に幾ばくかの影を落とした  
しかしそれは時の流れという魔術師によって次第に薄れていつてしまった



そして月日が経ち俺はかねてより夢だったヒーローになるために最短ルートである  
雄英高校のヒーロー科に入学した

ここで俺は更なる高みへと向かう、教室で決意新たに  
クラス的面子を見渡していた。

途中なんか眼鏡かけた野郎が突っ掛かって来たので口論になっているところに

一人の男がやって来た

「ふーっ、ギリギリセーフかな」

たなびく金髪と浅黒く焼けた肌の男

外見は似ても似つかぬこの男に何か懐かしい物を感じた

「おいっ君、聞いているのかね」

そんな思いも目の前の眼鏡男によつて光の速さで忘却の彼方へと吹き飛んでいった  
「ああん、うるせえな、ぶっ潰すぞ」

俺の怒りが沸点へと到達したその時

「うるさいぞ、喧嘩するなら余所でやれ、ここはヒーロー科だぞ」

—————

「はい、静かになるまで8秒かかりました。君たちは合理性に欠けるね」

さつきまで寝袋に入っていた男は、くたびれた感じを隠すことなく話続ける

「1年A組担任の相澤消太だ。早速だかこの服に着替えてグラウンドに集合ね」

—————

急な出来事に状況を整理できぬままグラウンドに来たA組一同そこに追い打ちの如

く

「これより、個性把握テストを行う」

と担任を名乗る男は宣言した。

「入学式は？ ガイダンスは？」

クラスの数少ない女子の一人麗日 お茶子（うららか おちやこ）が質問するも

「ヒーローになるならそんな悠長な行事、出る時間ないよ」とバツサリ

相澤先生の説明が始まり個性使用可の体力測定であることが告げられ、最初に種目の一つソフトボール投げをデモとして入試トップの爆豪が行い個性を使用し705.2mという記録を叩き出した。

「すげー」「楽しそう」

それを見て年相応に興奮するA組メンバー、しかしそんな空気は次の発現で消し去る事になる

「楽しそう、ね。じゃあ記録総合最下位の者は除籍処分な」

凍りつく空気

「理不尽とか言うなよ、敵はいつ、どこで、どんな作戦で来るかなんて教えちゃくれないぞ。それにここの校風は自由が売りだ、そしてそれは生徒のみならず教師にも適応される、ようこそ雄英高校ヒーロー科へ」

除籍処分をかけた遊戯（ゲーム）の始まりが高らかに宣言された

# 光と闇の洗礼

こうして除籍処分をかけた測定が始まった

50m走

握力

立ち幅跳び

反復横飛び

ボール投げ

持久走

上体起こし

長座対前屈

以上8種目だ

各々が個性をフルに使い、考え工夫して記録を打ち立てる

相澤「次、墓守と爆豪」

呼ばれた二人はスタート位置に着く

切島「なあ、あいつ、入試の時いたか？」

瀬呂「覚えてないなあ、どんな能力だっけ？」

そんな墓守に対する疑問の声が聞こえてくる、爆豪もまた同じ疑問を持っていたが、爆豪（関係えねえ、どんな個性だろうと俺が一番になる）

そんな周囲の疑問と爆豪の思いは、スタートの合図と共に吹き飛ば事になる

ピッ！

合図と共に個性で前に出る爆豪

その時墓守はカードをかざしていた

墓守「《音速ダック》、召喚」

「クエエー」

緑の怪鳥が目の前に現れた、

《音速ダック》 星3 風属性 鳥獣族

攻 1700

守 700

通常モンスター

音速で歩く事ができるダック。そのすさまじいスピードに対応出来ず、コントロールを失うことが多い

「！！！！！！！！」

先ほどまで噂していた声が、驚愕に変わる

そんな周囲をよそに墓守は怪鳥に飛び乗った

墓守「行けっ！」

次の瞬間怪鳥は爆豪を追い抜きゴールテープを切って駆け抜けていた。

ゴール間近だった爆豪は一瞬で追い抜かれた事に驚くと同時に風圧によりバランスを崩し転けてしまった

墓守 真理久（はかもり まりく） 個性〈カード〉 カードのモンスターを使役したり、事象を起こす事ができる。強力なものほど発動するのに時間や条件が厳しくなる。

記録4. 00秒

墓守「お疲れ、ありがと」

そう言ううと怪鳥はまた墓守の手にあるカードに吸い込まれるように消えていった  
爆豪「おいっ!! てめえなんだありや、あんなのなしだろ!」

墓守「?」

振り替えるとそこには憤怒の表情を浮かべた爆豪が迫っていた

爆豪「んなのお前の力じゃなくてあの変な鳥の力じゃねえか、反則だろ!!」

墓守「別にぼくの個性で発動した力なんだからズルくはないと思うけど・・・」  
そのあつさりとした対応がさらに爆豪の逆鱗に触れてしまった

爆豪「舐めてんじやねえぞ、この浅黒!!」

爆豪が拳を振りかざし個性を使おうとしたとき、墓守が再びカードをかざした

墓守「《闇の呪縛》発動」

カードから鎖が伸びて爆豪を拘束していった

### 《闇の呪縛》

永続罫

相手フィールドの表側表示のモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を700ダウンし、そのモンスターは攻撃できず、表示形式も変更できない。



そのモンスターがフィールドから離れたときこのカードも破壊される

爆豪「がつ、．．．くっ、この」

それでも爆豪が無理矢理にでも動こうとしたとき、

相澤「そこまでだ。」

その一言と共に鎖は消え、爆豪の個性もかき消された。

相澤「教室でも言ったが喧嘩はほかでやれ、時間の無駄だ」

髪を逆立て睨み、相澤が咎めた。

爆豪「なんだあ、個性が使えねえぞ」

墓守「さすがですね、『抹消ヒーロー』、イレイザーヘッド」

「イレイザーヘッド?」「聞いたことねえな?」「メディア嫌いのヒーローか?」

相澤「物好きもいるものだな。その通り俺がプロヒーローのイレイザーヘッドだ。個性は抹消、目で見たやつ個性を消すことができる。けど俺あまり戦わないけどね、ドライアイだし」

全員の心の声が「もったいない」の一言で一致していた

相澤「おら、時間は有限と云ったろ、どんどんやっていくぞ」

その後測定は再開し

ソフトボール投げ

墓守 『カタパルトタワー』 召喚

「.....」

『カタパルトタワー』 星5 水属性 水族

攻1000

守2000

効果モンスター

1ターンに1度自分フィールドのモンスター1体をリリースし発動できる。

リリースしたモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える

墓守 「ボールを置いてと、発射」

ドーン

相澤 「墓守記録21km」

尾白 「また別の怪物をだした・・・」

葉隠 「なんか不思議な個性だね」

こうして滞りなく進み順位発表となり、最下位は峰田となるが、相澤の合理的虚偽と

いうことで除籍者なしでテストは終了した。

爆豪と墓守の間に因縁という種を植えて・・・

## 御前試合

オールマイト

人々は彼を“希望の象徴”と讃えた。

事実彼の成して来た功績はそう呼ぶにふさわしく正にN.O. 1ヒーローと言って差し支えなかった

そんな彼はこの春、雄英高校の教師に赴任したのだ。

除籍（合理的虚偽）をかけた測定から数日後

今日はそのオールマイトの初授業、受講する1年A組も全体的に落ち着きがない様子だった。もし、くたびれ姿の担任が見ていたら一喝されても仕方なく思える。

いまかまだかと待ち焦がれる一同の前に

「わたしが、普通にドアから来たヒーローっ！」

平和の象徴はやって来た

「本物だ……」 「本当に先生やってんだ……」

オールマイトの登場にクラスがざわつき出す。

オールマイト「本日の授業は戦闘訓練だ、皆には前もって送られてきた個性届と資料を元にした戦闘服が出来たから、それに着替えて演習室・βに集合だ。待つてるぜ、金の卵達、H a H a H a H a !」

そう言い残してオールマイトは風のように去っていった

着替えが終わり演習室に集まるA組

墓守「……………おや？」

常闇「ん？」

上鳴「なんか似た戦闘服の奴がいるな。」

常闇は黒のマント、墓守は黒いフード付のローブだった

墓守「ごめんね、なんか似た様な服で、あつ自己紹介まだだったね僕は墓守 真理久  
よろしくね」

常闇「別に構わない……俺は常闇踏影だ、よろしく」

麗日「でも墓守君はなんか模様が入ってるね？それは……眼？」

墓守「えっと、君は……」

麗日「私、麗日 お茶子、よろしくねマリク君」

オールマイト「H a H a H a ! 集まったな、有精卵達、かつこいいぜみんな」

飯田「それで先生、今回はどのような訓練を行うのでしょうか？」

オールマイト「よし、説明しよう」

その後オールマイトのカンペ丸読みの説明が始まり、敵（ヴィラン）とヒーローに別れての2vs2の屋内戦を行うことになった。

オールマイト「さて、肝心の組分けだが、くじだ！」

飯田「適当なのですか!？」

八百万「プロヒーローになれば他事務所のヒーローと急造チームで作戦を行うこともありますわ。」

飯田「なるほど、先を見据えた計らい・・・失礼しました。」

オールマイト「よしっ、始めるぞ」

そして組分けの結果

A組 墓守・麗日ペア

B組 轟・障子ペア

C組 八百万・峰田ペア

D組 爆豪・飯田ペア

E組 芦戸・青山ペア

F組 砂糖・口田ペア

G組 上鳴・耳郎ペア

H組 常闇・蛙吹ペア

I組 尾白・葉隠ペア

J組 切島・瀬呂ペア

となった。

オールマイト「そして最初の対戦カードはヒーローA、敵D」

墓守「へえ・・・おもしろいじゃん」

麗日「墓守君? どうしたん?」

墓守「なんでもないよ、それよりよろしくね、麗日さん」

麗日「こちらこそよろしくね」

飯田「爆豪君、いろいろ言いたいことはあるが今回はよろしく頼むよ」

爆豪「ああ・・・」

飯田の呼びかけに話し半分返事をする爆豪、その眼は墓守を捕らえていた。

爆豪（測定のときは邪魔が入ったが、こんなに早く奴をぶちのめす機会が来るとわなあ、容赦しねえぞ浅黒やろう!!）

オールマイト「それではルール説明だ。

設定は敵はアジトに核兵器を隠している、ヒーローは制限時間ないにその核を回収、もしくは敵を捕まえれば勝ち、敵は核を守るかヒーローを捕らえたら勝ちだ。

互いの持ち物は個性の道具と無線機、見取り図、そして捕獲テープだ、このテープを巻き付けた時点でその者は捕まったと判断する。

それじゃ先に敵組が入り5分後にヒーロー達はスタートだ。

君たちの健闘を祈るぜ!! H a H a H a!!」

こうして屋内訓練が始まった

——モニタールーム

オールマイト「他の者はここで見学だ、他の人の取り組む姿をみて学ぶのも大事な訓練だぞ」

一端の教師みたいなことを言ったオールマイトは改めて画面を見た

オールマイト（さて、気になるのはあの墓守少年だ、あの個性はあまりにも特殊すぎる、教師として今後のアドバイスの為にもしっかり見極めないとな!）



——屋内演習場

墓守「時間だし行こうか、麗日さん」

麗日「そうだね、墓守君」

アジトに慎重に足を踏み入れる二人、

墓守「麗日さん、軽く作戦を伝えとくよ。 . . . . .」

その頃爆豪は飯田の静止を振り切り独断で行動していた。すべては気に食わない奴を叩きのめすと言う一心で、

そして爆豪は二人の気配を捕らえた。

曲がり角の向こうにいる、

チャンスとばかりに個性を使い急接近してそのまま攻撃に移った。

しかし攻撃した瞬間二人は消え、代わりに猿のような紫の小さい怪物が紙を持って現れた。

その紙にはこう書かれていた

『スカ』

爆豪「~~~~っ!!!」

爆豪の怒りのゲージはMaxとなり感情のままに紫の怪物に個性を叩き込んだ

ドツペルゲンガー 星3 闇属性戦士族 効果モンスター  
リバース フィールド上にセットされた魔法トラップカードを2枚選択して破壊する

偽者のわな 罨カード

自分フィールドの罨カードを破壊する魔法、罨、モンスター効果を相手が発動した場合発動できるこのカードをかわりに破壊し罨カードは破壊されない

墓守「君は分かりやすい人間だね」

紫の怪物の奥に二人はいた、

墓守「麗日さん作戦開始だよ。」

墓守がカードをかざしたと同時に麗日の手が墓守に触れた。

組分けが決まり互いの個性を確認した時に真っ先に浮かんだコンボが炸裂する

墓守「グラヴィティ・バインドー超重力の網ー発動」

爆豪は見えない何かに押さえつけられる様に床にひれ伏せられた

グラヴィティ・バインドー超重力の網ー

永続罨

フィールド上のレベル4以上のモンスターは攻撃できない

爆豪「がっ……!?!、くそつたれこんなの……っ!」

這いつくばりもがく爆豪、一方二人は麗日の個性『無重カーゼログラビティー』によってなにも影響がなかった

墓守「よし、今の内に先に進もう」

麗日「わかった」

こうして二人は奥に進んでいった

二人が見えなくなりカードの力が消えたとき、立ち上がった爆豪の顔は本物の敵顔負けだったと言う

## 混沌の種

刑事である塚内は疑問に思っていた。

ここ最近、町の犯罪率が減っていることにだ、警察なのだからそこは素直に喜ぶべきところだが超常社会に置いては個性を悪用して世間を危険に晒す敵（ヴィラン）を隠れ蓑にした、軽犯罪もまた一つの問題になっていた。

しかしそんな犯罪率が減っている、敵の出現率はあまり下がってないののだ。

塚内は嵐の前の静けさのような不安を感じていた

—————

雄英高校 演習場

時刻は演習開始前の会話にさかのぼる

墓守「見取り図は大体頭に入ったし、演習前に互いの個性を確認しようか」

麗日「そうだね、あたしの個性は簡単に言う touches したものを無重力にできるんだ、ただ限界があつて特に自分に使うとすぐキャパオーバーするのが弱点やね」

墓守「僕の個性は……」

麗日「知ってる！カードからいろいろポンポン出すんやろ、なんか魔法みたいやね、あ

れ・・・そういえばカードはどこにあるの？」

墓守「普段は専用ケースをベルトにかけてるけど戦闘服のときはここ」

墓守がロープの左手側を捲ると見慣れない機械が装着されていた

墓守「この真ん中にカードの束が置いて外側はずつかざるのが難しいから効果が長かったりモンスターを出すのに便利なんだ、この穴はタイミングがシビアだったりざつて時のカードを仕込めるんだ」

麗日「えっ、めっちゃやすごいやん、どこのサポート会社製？いくら？重さは？」

墓守「あー、知り合いにこういうのを研究してる人がいてね、その人からテスターとして借りてるんだよね」

麗日「へーっ、その人すごいね、今度紹介してよ。」

墓守「えっと・・・今度ね、それよりも作戦だけど、このカードを使うから」

墓守は麗日に一枚のカードを見せた

墓守「これと、麗日さんの個性で突っ込んで来た爆豪君を捕らえる」

麗日「それはええねんけど、なんで爆豪君が突っ込んで来るとわかるの？」

墓守「・・・まあ測定の際にやたら絡んで来てたし、なんかプライド高そうな感じがするからね、来ないなら来ないでまた別の作戦を考えるさ」

—————

こうして爆豪を出し抜いた二人は、核を守る飯田と2対1の状況を作り出したが、

飯田「ふははは、ヒーローどもこの核は渡さんぞ!!」

しっかりと敵役に徹する飯田に対し二人は攻めあぐねていた、

飯田は見通しのよい部屋の奥に陣取り、回りの廃材等を片していた、もとより奇襲向  
けの個性の二人正面から待ち構えられてる所での攻防は不向きだろうと飯田は読んで  
いた、更に後ろからは

爆豪「俺をコケにして、ただですむと思うなあああああ!!!」

鬼の形相で爆豪が迫っていた。

瀬呂「なんか、役とか関係なくあいつ敵に見えてくるわ」

切島「てか諦めが悪すぎるな、男らしくねえ」

オールマイト「まあ、最後まで望みを捨てない姿勢も大事だよ」

オールマイトの精一杯のフォローだった

残り時間もあとわずか、そんな中先に仕掛けたのは爆豪だった

爆豪「くたばれ!!」

ヒーロー志望とは思えない言葉で飛びかかる爆豪、その時、墓守は麗日の肩に手をおき自分の近くに引寄せた

麗日「ふえ!?!」

墓守「少し我慢してね、死のマジックボックス 発動!」

死のマジックボックス 魔法カード

自分及び相手のモンスターを1体ずつ選択して発動できる。選択した相手モンスターを破壊し、選択した自分モンスターのコントロールを相手に与える

「「「「?!」」」」

次の瞬間二人と飯田の下から箱が現れた、そして箱が割れると、両者の位置が逆になっていた。

飯田「なにつ!?!いつの間に・・・ってまじい!」

目線を前に戻すと爆豪がすでに攻撃体勢で突っ込んできていた

「うわああああああ!!?」

急な状況変化に対応できず哀れ二人は正面衝突する羽目になってしまい、その間に二人は核を回収していた

オールマイト「ヒーローチーム Wiinner!!」

こうして最初の組が終了した

—————

こうして墓守・麗日組の華麗なショータイムは終わり

その次の組では

特待生の一人、轟が建物全体を一瞬で氷らせるといふ荒業で勝利を手にしていた。

その後も各々個性を利用し訓練は終了となった

—————

訓練終了後 モニタールーム

オールマイト「みんな、訓練お疲れ様、それでは今日の総評といこうか、今日のベストは誰だと思う?」

八百万「はいっ、A組の二人と飯田さんだと思います」

オールマイト「ほお、なぜだね?八百万少女」

八百万「A組の二人は互いの個性を利用し最大限の効果を産み出しました、また敵役の飯田さんも二人の個性のわかる範囲で最善手を打つ努力をしていました、B組も素晴らしい結果だと思いますが訓練で言えばあらゆる状況変化に対応しようとした三人がベストではと思います。」



既に主張している胸を更に張り八百万は答えた

オールマイト（思っていたよりも言われてしまった・・・）

オールマイト「まあ、概ね正解だ、しかし訓練はまだ始まったばかりだ、今回の結果に囚われず糧としてこれからも頑張っていこう」

こうしてオールマイトの初授業は終了した

—————

とあるバー

「なあ、黒霧あいつちゃんと仕事してるのかよ」

「していますよ、さつき作戦に必要な資料が彼から届きました。これを元に作戦をたてればそう遠くない内に実行できますよ」

「そうかあ楽しみだな、平和の象徴が倒れたら世界はどんな反応を示すのだろうか？」  
くつくつと笑う声が聞こえてくる

決闘の時はもうそこまで伸びていた

## 終わりの始まり

### 室内演習の放課後

帰り道で爆豪は今日の演習を思い返していた

相手の個性に手も足も出さず、挙げ句いよいよに掌で転がされ敗北、そして次の組の瞬殺劇、自分が劣っているのでは、と一瞬でも心に浮かんだことが激しく自尊心を傷つけていた。

しかし、

爆豪（ぶさけん！俺はここからだ、もう誰にも負けねえ）

その高すぎる自尊心は、一時の敗北により砕けることなく更に火を着けて燃え上がっていた。

それはここまで常に先頭に立ち、強者として立ち回ってきた中で育まれた意地であった。

—————

その頃、教室では何人かのメンバーが今日の反省会をおこなっていた、

切島「墓守と麗日の訓練見てて思ったけど、あのコンボヤベーな、ほぼ初見殺しじゃ

ね？」

飯田「うむ、ぼ……俺らも最終的には出し抜かれてしまったからな」

芦戸「あと、あの最後のマジックみたいなの！めっちゃカッコよかったー！」

葉隠「そうそう、絶体絶命のピンチをヒロインの肩を抱いて脱出とかロマンの塊だよ」

麗日「ちやうからー！、ヒロインとかやないし、状況を打開するためにしかたないこと  
だったただだからー！」

といつても話題の中心は最初の組に絞られていたが……

砂糖「しつかし、墓守の個性は見れば見るほど不思議な個性だな」

常闇「物の怪を使役したかと思えば、魔法の様な常識破りな事象を起こす、それもかなり柔軟性に富んだものだ」

皆も流石に疑問に思っていた時、

「ケロケロ、墓守ちゃん」

墓守「えつと……君は、蛙水さん？」

蛙水「梅雨ちゃんと呼んで、あたし思ったことをすぐ口にしてしまうの。あなたの使うカード、見せてもらうことって出来るかしら？」

尾白「それは俺も興味あるな」

障子「ああ、出会ってまだ日が浅いがそれでもその個性は興味深いと思える」

回りも興味を持ちその視線を向ける、一人を除いて

飯田「君たち、興味を持つのはわかるがやはり墓守君の気持ちが一番優先だ、墓守君、君が不快に思わなければ皆にそのカードを見せていただけないだろうか？」

墓守「一部でいいのならかまわないけど」

蛙水「墓守ちゃんの許してれる範囲でかまわないわ、ありがとう墓守ちゃん」

墓守はベルトに通してあるカードケースからカードを取り出し蛙水に手渡した

蛙水「いろいろあるのね、バリアみたいのや、壺が書いてあるのや・・・あらこれは？」

麗日「なにも書いてないカードがあるね」

墓守「それはまだ僕も使えないカードなんだ、まだ使える条件を満たしてないって言うか・・・」

墓守はぼつの悪そうに話した

蛙水「どうすれば使える用になるのかしら？」

麗日「なんか協力できそうなら私も力貸すよ今日のお礼ってわけでもないけど」

墓守「ごめん、そこまでは流石に企業秘密というか・・・」

飯田「無理に聞きはしないさ、それよりもうそろそろ日が暮れるから皆帰ろう」

蛙水「そうね、そうしましょ。墓守ちゃんありがとね」

そういつて蛙水はカードを墓守に返した

その一言を契機に皆、帰宅していった

切島も荷物をまとめていると

カランカラン

何かが落ち、そして転がってきた

それは金の杖

切島はそれを拾い上げると

墓守「ごめん、切島君、それ僕のなんだ」

切島「おう、別にいいぜ。けど飯田じゃないけど学校にあまり関係ないの持ってくる

とばれたときめんどいぞ」

切島が笑顔で尋ねると、墓守は

墓守「これは、僕のお父さんがくれたお守りみたいなやつなんだ、これを持つてると

不思議と力が湧いた気がするんだよね」

と切なげな笑みを浮かべた、その背景を察した切島はそれ以上掘り下げず二人は教室

を出た

—————

次の日

雄英高校の周りはマスコミで溢れかえっていた

理由はただひとつ今年から教師として赴任したオールマイトへのインタービューをしたと言ったのだ

しかし、流石はヒーロー育成機関としては最高峰を謳う雄英高校だけありセキュリティの頑丈さから敷地内すら取材が困難な状態であった。

??? 「……………」

—————

この日雄英高校は創立初の学園内侵入を許すこととなる

強固なセキュリティを跡形もなく粉碎しそこからマスコミがチャンスとばかりに押し掛けたのだ、

最終的には警察を呼び騒ぎは収束したが、

ただのマスコミにはできない芸当に雄英教師陣は感じ取った

それは明確な悪意、『宣戦布告』を

運命のダイスが示すのは希望か、絶望か

## V a i n ー裏切りの嘲笑

雄英高校にマスコミが侵入するすこし前

1ーA教室にて

相澤「今日は学級委員長を決めてもらう」

「「学校ぼいのキター」」

教室が歓声に包まれた

ヒーローとしての訓練や授業とおおよその学園生活とはかけ離れた日々を過ごすなかではじめてと思われる通常の学生と同じ行事

通常はめんどくさいイメージのつきまとう委員長だがヒーローを目指す彼らにとつては人を引つ張るといふ意味では経験して損はない

全員が希望者ということでヤイヤイと収拾がつかなくなってきたとき、飯田の発案により投票となった。

結果

八百万 2票

飯田 2票

墓守

2票

と同率になつたが

墓守「僕はいいよ、あまり人を引つ張るとか向いてないし」

ということ二人による公平なじやんけんにより

委員長は飯田、副委員長は八百万となつた。

飯田「不肖、飯田天哉、委員長の職務を全うしていく所存であります。」

八百万「悔しいですが、公平な勝負のもとに決まったことなので致し方ありませんわ、ですが私も与えられた役割は全うさせていただきませすわ。」

こうしてクラス委員長決めは終了した。

飯田（しかし誰が僕に投票してくれたんだらう？僕は墓守君に入れたんだか・・・？）

—————

数日後

オールマイトは通勤途中にヴィランに遭遇していた  
既に現場に着いているヒーローは攻めあぐねている  
オールマイト「ミズーリー・スマッシュユ!!」



そこに颯爽と現れ事件解決、平和の象徴の突然の登場に野次馬たちも歓声で応えた。警察からのお礼を受けながらも、学校を目指し出発するオールマイト

オールマイト（衰えている、あの戦い以降活動時間に制限が出来、それすらもどんどん短くなってきている）

オールマイトは自らの掌をみた

平和の象徴として幾多の危機を救ってきた手を、そして拳を作り力を込めた

オールマイト（だからこそ、急がなければならん。新たなる平和の象徴に成りうる者を！それが私の最期の仕事だ）

敵は待つてくれない、しかし平和は維持していかねばならない。

今の平和を次世代に継承する事、それはオールマイトが命をかけるに値する大仕事だった

「キヤー！轢き逃げ！」

オールマイト「!!」

平和の象徴はその悲鳴を聞くや、暗い心を奥底に押し込め走り出した

オールマイト「もう大丈夫だ！

なぜって？私が来た！」

場所は変わって雄英高校

相澤「本日のヒーロー基礎学は俺とオールマイトともう一人の3人体制でやることになった。学ぶのは人命救助《レスキュー》訓練だ」

その後相澤担任の説明によると戦闘服の装着は自由、今回の訓練をする演習場は少し離れているためバスで移動となりバスに乗り込む1—A組

その車中

墓守「……………」

蛙水「墓守ちゃんどうしたの？ポーツとしちゃって？」

墓守「ああ、蛙水さん、今日は初めて使うカードを何枚か持ってきてるから上手く使えるかちよつと考えちゃってね」

切島「墓守の個性はバリエーションが豊富で絵になるよな、俺なんて硬化だから地味だし」

超常社会においてのヒーローは実力も去ることながら見た目の派手さも支持を得るためには必要なフアクターなのだ

切島「派手さで言ったらあとは爆豪と轟かな？」

青山「僕のネビルレーザーも強さ、派手さ共にプロ並みさ」

芦戸「でもお腹壊しちゃうのはよくないね」

そんな会話をしているとバスは演習場に到着した、そこではプロヒーロー、13号、  
が出迎えてくれた

13号「ここはー嘘の災害や事故ルーム通称USJです。」

その後13号より今回の訓練の意義や力の使い方を改めて考えるきっかけを話し、さ  
あ訓練を始めようという時にそれは起こった

ーーズズズ

???'「・・・あれ?オールマイトどこだよ?」

相澤「っ!」

すぐさま臨戦態勢になる相澤、

切島「なんだあ?入試の時みたいにもう始まっているパターンか?」

相澤「動くな!あれは・・・ヴィランだ!」

「「「「?!?」」」」

生徒の間に緊張がはしる

相澤「13号生徒を守れ」

13号「はいっ!皆さんこちらへ」

相澤の指示に従い生徒の避難誘導を行う13号であったが、

??? 「させませんよ」

黒い煙の様な姿のヴィランが立ち塞がった。

??? 「始めまして、我々は敵連合、僭越ながらこの度雄英高校に入らしていただくのは：  
平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです」

13号 「皆さん、迂闊に動かないようっ・・・！」

瞬間周りの空気が止まった

13号は背中に鋭い痛みが走り振り返ると妖しく光るウジヤトの目が見つめていた

墓守 「・・・」

??? 「ああそれと、私達の大切な仲間を迎えにありがとうございました」

## 眞実の名

ヒーロー育成機関の授業中にヴィラン襲撃

前代未聞の事態を目の前にしながらも、流石はプロヒーロー、すぐに生徒に警戒心を促し臨戦態勢になる。

生徒も生徒もで気の遠くなるような倍率を勝ち抜いてきた猛者ばかり、すぐに気を確かにし余計なパニックなく事態の把握に努めた。

しかし、次の展開はあまりにも衝撃的過ぎた

13号「……………!?!」

麗日「墓守君……………」

クラスメイトの裏切り

今回の演習で講師を担当していた担任ともう一人のプロヒーロー13号、いつの間にか墓守はその背後に回り込み金の杖を突き刺していた

相澤「13号!!」

目の前から襲撃してきた有象無象と相對しながら、後ろの異変に気付く  
しかし……………

チンピラー「へっへっへっ、よそ見とは余裕だな」

チンピラー2「なめてんじゃねえぞ！」

相澤「くっ!？」

流石に戦いが始まると幾ら圧倒出来るとはいえ数の暴力はいかんしがたく、相澤も助けに回れないでいた。

爆豪「てめえっ!!」

いち早く事態を飲み込んだ爆豪が墓守に攻撃を仕掛ける

しかし墓守は杖を抜くやいなや突如現れた黒い穴に吸い込まれ次の瞬間、先ほど敵を名乗った者の隣にいた

墓守「黒霧さん、ありがとうございます。」

黒霧「いえいえ、あなたもお疲れ様です。」

まるで知人同士の会話のよう

上鳴「墓守！こりやあいつたいたいどうゆうことだよ？

なんでお前、そいつの隣にいんだよ!？」

墓守「見ればわかるだろ？僕も敵（こっち）側だからだよ、厳密にいうとちよつと違うけど」

墓守はさも当然と言つてのけた

峰田「なあ墓守、タチの悪い冗談はやめてくれよ・・・」

墓守「・・・ちようどいいや。この辺でもう一回自己紹介させてもらおうよ。」

墓守は被っていた戦闘服のフードをとり、眼をつむり指を鳴らした。

すると・・・

—————

パチンツ

あいつが指を鳴らした瞬間、あいつの見た目に変化が現れた

癖のある緑の髪の毛、

———嘘だ、

忘れようもないマヌケずらとそばかす

———嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ

臉が上がる、深い緑の瞳におれらが写る

???"初めまして、そして久しぶり。

敵連合傘下組織【グルズ】リーダー





また黒い穴がいくつか現れ、1-Aの生徒達は飲み込まれていった。

黒霧「おや、何人か逃れたものがあるみたいですね。」

緑谷「黒霧さん、手筈通りここは任せます。」

僕も作戦通りに、

黒霧「ええ、わかりました。あなたもお気をつけて。」

そう言うや緑谷の下に黒い穴が現れそこに入っていた

麗日「墓守君！」

なんとかこの場に留まれた麗日呼び止めようと出てきた、しかし

黒霧「数人生徒を残してしまいましたでしたが問題ないでしょう。ではさっそく……。」

麗日「!!」

これを好機と悪牙が迫る。

13号「危ない！」

なんとか個性により13号に引つ張られ難を逃れた。

黒霧「おや、まだ動けますか」

13号「なめないでよね、僕だってプロヒーローだ！」

先ほど刺された所から血を流しながらも戦う意思を向ける13号

13号「皆さん、しっかりしてください！」

13号の呼びかけに我に帰る生徒達に13号は更に続けて話す

13号「皆さん混乱してるのはよくわかります。しかし今は全員が生きてこの窮地を抜け出すことに全力をかけてください」

その言葉に、落ち着きを取り戻し臨戦態勢を整えていく生徒達

瀬呂「やってやるぜ！」

尾白「どうせいつか通る道だ、全力でいく！」

飯田「皆は無事か!?確認出きるか!?!」

障子「散り散りになってるがこの施設内に全員いる」

常闇「これが俺に与えられたし、試練か：：乗り越えて見せよう。いくぞ黒影《ダー

クシヤドウ》」

黒霧「これは・・・いささか面倒なことになりましたね」

戦いの火蓋は切られた、これから先は深い混沌。

そこから生まれる物語はハッピーエンドの英雄譚か、はたまたバットエンドの悲劇か

## ヒーローブラスト

中央の噴水近くで戦い続けるイレイザーヘッド

彼の”抹消”の個性と見事な体術によりたくさんいたチンピラヴィラン達は戦闘不能になっていた

??? 「流石プロヒーロー、有象無象じゃ話しにならないな」

ヴィラン 「グハッ」

??? 「でも・・・」

ヴィラン 「ウゲッ」

チンピラヴィラン達が全滅した頃全身に手を貼り付けたヴィランが動いた

相澤 「!？」

迎撃にと繰り出した肘鉄をガードされ掴まれた瞬間、肘の皮膚が崩れ始めた

相澤 「ぐあっ!？」

なんとか蹴りをいれ距離を取る

??? 「その個性は本来、長期戦向けじゃないな。生徒の手前安心させるために不利を承知で突っ込んで来てこの戦果、カッコいいね」

相澤「っ」

敵の本命と見える相手にこれ以上行動される前にと攻撃を仕掛ける相澤

???「ひとつ言っておく・・・」

ガシッ

相澤「!？」

???「本命は俺じゃない・・・殺れ脳無」

脳無「・・・」

貼り付いた手の奥には眼が妖しく光っていた

—————

山岳エリア

耳郎「いきなりこんなことになるなんてね。」

黒霧の個性によりバラバラに飛ばされた生徒を待ち受けていたのはチンピラヴィラン達であった

上鳴「なに呑気なこといつてんだよ。クラスメイトが実は敵で、そんでもっていま囲まれて絶体絶命のピンチだぜ!？」

八百万「言いたいことやわからないことは山ほどあるとは思いますがここを切り抜け

ることが先決ですわ」

耳郎「そういうこと、あんたも男なら覚悟を決めな」

上鳴「マジか!？」

—————

土砂エリア

ヴィラン1「へへっ、来やがったな」

ヴィラン2「おめえらに恨みはないが自由に暴れさせてくれるらしいからな、生け贄になつてくれよ」

峰田「ギャー、ヤバイヤバイ!おいら達もうおしまいだー!」

口田「……………」

ガタカダ震え、抱き合い涙を流す二人

蛙水「二人ともしっかりしてちようだい。」

砂糖「しかし数が多いぜ、こりゃ」

轟「おい、お前らじつとしてろ。」

俺が一瞬で終わらせる」

倒壊ゾーン

爆豪「おらっ!!」

BOOM

切島「これで最後か？」

一足先に飛ばされ交戦していた爆豪のお陰もあり切島が飛ばされて来た頃にはほぼ戦況は決まっていた。

切島「大丈夫か？バクゴ―？」

爆豪「つたりめえだ！こんな雑魚どもにやられてたまるか、てか仮にもプロヒーロー目指してんならこれ位の相手に躓いてられつかよ、それよりも・・・」

爆豪の視線は中央の噴水側に向いていた

爆豪「俺はデクを潰しに行く、てめえはそこで待ってろ。」

切島「デクって・・・墓守のことか？いやそれよりもまずは他の皆を助けにいかなくちやだろ!!」

切島は爆豪を制すが

爆豪「なに寝ぼけたこといってんだ、クソ髪！ここに受かるような奴等がこの程度の

奴に殺られるわけねえだろ、心配なんざ無用だろ。」

そこで切島は気がついた、この男は悪態をつけど冷静に周りを評価してある種の信頼を置いていることを

切島「バクゴ、お前実はすげえ冷静に判断できるやつだったんだな。俺もお前に乗るよ。男切島燃えてきたぜ！」

爆豪「勝手にしやがれ、あと俺はいつでも冷静だゴラァ！」  
パチパチパチッ

「ツッ!？」

どこからともなく拍手の音が聞こえてきた。

??? 「流石だよ。やつぱりNo. 1ヒーローを指す優等生君は言うことが違うね。」

爆豪「やつぱりてめえか、今まで何してやがった!？」

どうしててめえが敵(そっち)にいるんだ。

答えろ!!デク!!」

緑谷「デク・・・ね。それはもう僕には当てはまらない、何故なら僕には立派な”個性”があるから、

ね、もう一人の僕？」

『ああ、そうだな。オレ』達はもう弱者じゃない、なにも恐れることはないさ』

その声と共に見た目にはなんの変化もないのに纏う雰囲気が変わる。

幼馴染として過ごしていた爆豪にはハッキリと見てとれた。

だから聞いた。

爆豪「だれだ？てめえは！」

闇出久『オレは出久の個性により生れたてもう一人の緑谷出久、お前らヒーローという人柱の上に立つ平和に断罪を下す者だ』

処刑人ーマキュラ「……」

闇出久『我が個性こそ「カード」！』

処刑人ーマキュラ 星4 闇属性 戦士族

攻 1600

守 1200

効果

このカードが墓地に送られたターン、このカードの持ち主は手札から罠カードを発動できる



かざしたカードから現れる異形の処刑人、両手の鍵爪が無慈悲さと明確な殺意を向け  
てくる

爆豪「チツ、訳がわからねえ、おいクソ髪、こいつをぶつ潰すぞ」

闇出久『殺れ、魔界の処刑人よ、その愚か者に慈悲なき死という救済を与えろ』

爆豪「愚か者はどっちか教えてやるぜ、クソナードが!!」

切島「クソ、話についていけないがやるしかねえ」

—————

土砂エリア

砂糖「すげえ・・・」

轟の個性により取り囲んでいた敵達は全員凍らされ無力化されていた

峰田「やったー、おいお前らおいら達を子供だと思つて油断したな!」

蛙水「峰田ちゃんなにもしていませんよ!」

バシッ

舌でツツコミをいれられる峰田

轟「待て、なにかいる・・・」

ギル・ガース「・・・・・・」

現れたのは悪魔の加護を受けた殺戮マシン

携えた刀は嫌がおうにも警戒心を最大限に増幅させる。

ギル・ガース 星4 閻属性 悪魔族

攻 1800

守 1200

通常

鋼鉄の鎧を身に纏った殺戮マシン。巨大な刀で容赦なく攻撃する。

—————

山岳エリア

上鳴「おりゃー!!」

バリバリバリバリ!!

ヴィランズ「ギャアアアアアアアア・・・」

上鳴のマックスの放電により山岳エリア全体のヴィラン達は気絶させられていた



攻 2000

守 1200

効果

???

歌の間こえる方へ視線を向けると、

そこにいたのは目も鼻もない十字架を背負った魔界の吟遊詩人

ふりかざした鋭い爪がアホになった上鳴を襲う

八百万「危ない！」

ザシユ

咄嗟に上鳴にタツクルし避けようとした八百万だったがカスってしまふ

八百万「あぐっ！」

個性の都合で露出が多い戦闘服が仇となり肩から出血してしまふ八百万

耳郎「!・・・このっ!食らえ!!」

耳郎の個性とそれを補助する戦闘服により増大された心音の衝撃波を見舞う

ヘルポエマー「!?!」

あまりの威力に距離を取るヘルポエマー

耳郎「ヤオモモ、大丈夫!？」

八百万「カスっただけです。問題ありませんわ」

上鳴「ウエーイ」（すまねえ二人とも）

—————

雄英高校保健室

枯木の用にヒョロヒョロな弱々しい男性が電話をかけていた

オールマイト「おかしいな・・・相澤君も13号君も連絡がつかない。」

平和の象徴・オールマイト

完全無欠のヒーローとして崇められる彼だが、彼には世間に知られてはいけない秘密があった。

5年前のある戦いで彼は生命の危機に瀕しそれ以降筋骨隆々の体でいられなくなり、通常時は今のような骸骨のような姿で生活することを余儀なくされていた。

オールマイト（なにか嫌な予感がする・・・すぐにいかなくては!!）

今日の活動時間はあと1時間、しかしそれは理由にならない

平和の象徴は激闘続くコロシウムへと向かっていった

## 魔界台本「オープニング・セレモニー」

倒壊エリア

爆豪「クソ、どきやがれ一つ目」

爆豪は歯噛みしていた。

今すぐにも突如敵として現れた幼馴染に飛びかかり問いただしたところであつたが

切島「ぐあつ！」ガキンッ

目の前に立ち塞がるモンスターの前に苦戦を強いられていた。

切島「クソ、あいつの鉤爪めちやくちや鋭いぞ、俺の硬化でもギリギリだ、気を付けろバクゴー！」

爆豪「見りやわかるわ、そんなもん！」

見るからに殺傷能力の高い武器を目の前に近接攻撃を主とする二人は攻め手を欠いていた

少しでも踏み込みを誤れば致命傷は免れない、しかしこのまま消耗戦に持ち込んだところでモンスターにスタミナと言う概念があるかどうかは不明である以上得策とは言

えない。

緑谷「フッフ、さあいつまでもつかない？」

切島「クソツこのままじゃジリ貧だ！」

爆豪「クソが！舐めんじゃねえ!!」

爆豪は個性で一気に距離を詰める

緑谷「相変わらず短気で、無計画に突っ込んできて・・・っ！」

マキユラは距離を詰めて来た爆豪に対し鉤爪で捕らえようと繰り出すが、

爆豪「おらっ！」BOOM!

爆豪はさらに爆破を行い勢いで急速に方向転換し、鉤爪を避けカウンターの蹴りを見

舞う

マキユラ「!？」

蹴りを食らいぐらつくマキユラ、爆豪はそれを見ながら着地と同時に戦闘服の手に付いているピンに手をかけた

爆豪「人じゃねえし死んでも大丈夫だよなあ！」

ドオオオオオオン

爆豪の現段階の最高火力による爆破攻撃

グオオオオオオオオオオ

断末魔を上げ朽ちていくマキユラ

すると崩れたマキユラの体から黒い球が現れた、それは即座に緑谷の中に吸い込まれていった、そして

緑谷「ウグツ・・・流石だね、かっちゃん。」

胸を抑え苦痛を漏らす。

切島「なんだ？急に苦しみだしたぞ？」

爆豪「どうやらあの化け物たちとあいつは完全に別れている訳ではなくやられればダ

メージが帰ってくるようだな」

緑谷「相変わらず、ただ暴れまわるだけじゃなく勘も鋭いから嫌になっちゃうよ。」

再び向かい合い二人、しかし

ヒュンーーーー

緑谷「ガハッ！」

どこからか先ほどと同じ黒い球が緑谷の中に吸い込まれた

爆・切「!?!」

パキッパキッパキッ

緑谷「ッ!?!」

そして瞬く間に緑谷の下半身が凍りつき身動きが出来なくなる



切島「これは……」

轟「悪く思うなよ墓守、いや緑谷？だっけか、」

そこには轟達、土砂エリアのメンバー達が集まってきた。

砂糖「やっぱり轟の言う通り、墓守のところに通じていたな。」

峰田「よし、あの化け物達もいない！轟やっちまえ！」

蛙水「まずは話を聞き出すのが先よ、峰田ちゃん。」

口田「……」

切島「お前ら、無事だったか！」

仲間の無事を喜ぶ切島、状況は完全に雄英生組に傾いたが

緑谷「あらら、ギル・ガースやられちゃったか、強いね轟君」

緑谷はなお余裕な表情をしていた

轟「そんな話はどうでもいい、聞きたいことは山ほどあるがまず優先するのはオール

マイトを倒す算段とやらを聞かせてもらおうか」

爆豪「待てや半分野郎、俺の質問が先だ！おいクソデク！お前、なんで生きてる？そ

んでなんで敵側にいんだよ！しかも個性まで持ちやがって、てめえは無個性だろ!?俺を

騙してたってのか!？」

闇緑谷『ギヤハハハハ、かつちゃんは昔から強引だね、いいよ幼馴染のよしみでおま

えの質問から答えてやるよ。』

「「「「「!!」」」」」

爆豪と切島以外のメンバーも明らかな雰囲気の変わりように驚愕する、

爆豪「てめえか、てめえがデクをたぶらかしたのか!？」

闇緑谷『たぶらかすなんて人聞きの悪いこと言わないでくれよ。君が俺のある意味産みの親みたいなんだから。』

雰囲気の変わった緑谷は尚も嬉々として語る

闇緑谷『一つ昔話をしてやるよ』

昔々、あるところに一人の少年がいました

少年はとても心優しく、誰かの苦しみや悲しみをまるで自分のことのように共感し手助けせずにはいられない性格をしていました。

そして少年はとても仲の良い幼馴染と共にある夢を抱きました。

”ヒーローになりたい”

しかし現実は残酷でした。

彼は4歳の時に無個性と診断されてしまいました。

それから彼を待ち受けていたのは地獄のような日々でした

あんなに仲の良かったはずの幼馴染は邪魔者とばかりに少年を貶し、辱しめ、いたぶ

り弱者の象徴として扱いました。

そして少年の両親は罪悪感でいっぱいになった心を隠して出来る限りの愛情を少年に注ぎました。

少年は両親の心づかいに気づきながらも持ち前の優しさでそれを感じつつも見てみぬ振りを続けました

しかし、日増しに減ることのない暴力と憐れみの気遣いに心はやがて限界を迎えたと  
き彼の個性が生まれたのです。

それが「二重人格」

彼の優しさを汚さぬよう彼の中に産み出されたもう一人の自分

そして10歳の誕生日、少年は誕生日に金の杖を授かりました。

その杖は人の心を正直にする力がありその力により、彼の隠していた思いが受け持つてくれていた人格が表に出てきてしまいました。

そして彼は気付きました、何故この気持ち隠さなければならないのか、何故自分だけこんな思いをしなければならないのか！

気づいた少年は枷を壊し、檻を焼き捨て闇に消えていきました。

その後闇のなかで少年は自分の信念、目標の為には他の犠牲は厭わず、他人の死を、不幸を糧としていきる食人鬼《グール》として名を上げていくのでした。

## 帝王の深怨

同世代の敵が語った物語に気付けば全員呼吸が浅くなるのを感じた。そしてさすがのように一人の人間に視線が集中した。

爆豪「……………」

爆豪がなにも言えず立ちすくむのを一瞥し更に話は続いていく。

「こうして少年は闇の世界で力をつけていき、それに目をつけたあるお方が少年をスカウトしにやって来ました」

そのお方の力と崇高な野望に魅せられた少年はそのお方についていくことを決め、その野望のもとで活躍をし、最終的にはこの世のありとあらゆるヒーローと呼ばれる偽善者を排した世界で幸せに暮らしましたとき

めでたし、めでたし。

闇緑谷『おいおい、せっかく話してやったんだから拍手の一つもほしいもんだぜ』

爆豪「……………あの手まみれ野郎が”あのお方”って奴か？」

闇緑谷『ああ、弔くんかい？彼もまたあのお方に魅せられた一人さ』

現状でもかなりの手練れと思われる目の前の脅威たちだが、それらをもまとめ上げる巨悪の存在

誰もが足がすくむ中、

轟「終わったか？じやあ次は俺の質問に答えてもらおうか。」

峰田「おい、轟それどころじやないだろ。早くこいつ取っ捕まえて先生に引き渡した方がいいって！こいつはやばすぎるって！」

もはや戦意喪失が明らかかな峰田が言うも、

轟「いや、だからこそ聞く必要がある。・・・おまえらの言うオールマイトを倒す算段、教えてもらおうか。」

「「「「「!?!」」」」」

全員の目が見開かれる。

轟「オールマイトを倒すのがお前ら目的だろ？まさかあそこまで用意周到な奇襲なのに、この程度の戦力しかないってのは不釣り合いだ。まだ何を隠してる？」

闇緑谷『ギャハハ、すげえな、では・・・』

緑谷「そんな君に敬意を表しここからは僕が答えてあげるよ・・・、”最高傑作”くん」

ガシッ

その一言を聞いた途端、クールなイメージの強い轟が怒りを露にし胸ぐらにつかみかかった

緑谷「痛いな、これじゃしゃべれないよ、」

緑谷は不適な笑みを浮かべ辺りには一触即発の緊張感が流れた。

—————

山岳エリア

耳郎「マジ不快なんだけど、その歌止めてくんない!？」

八百万の個性で手にした刀で攻撃する耳郎だが爪で弾かれてしまう。

ヘルポエマー「♪♪♪♪♪♪」

弾かれて生まれた間合いを詰めてヘルポエマーの爪が迫るも

上鳴「あぶねえ・・・いだっ!」

アホから帰還した上鳴が間合いに割り込み底い背中を斬りつけられる

耳郎「っ上鳴!!」

八百万「出来ましたわ!!」

八百万が個性で作成したのは小型のマシンガン

八百万「人でないのなら容赦しません!」

ドガガガガガガガッ

ヘルポエマー「オオオオオオオオオオオオオオオオオ  
フルオートで射出された弾丸の前にヘルポエマーの体が砂のように崩れて消えて  
いった

八百万「・・・ふう、とりあえずどうにかなりましたね、お二人は大丈夫ですか？」

耳郎「ウチは大丈夫だけど上鳴が・・・」

上鳴「大丈夫だよ、動けないほどじゃねえし、いてて・・・」

戦闘服の背中には赤い線が刻まれていた。

八百万「お待ちください、すぐ応急道具を出しますので」

耳郎「・・・てか、その前に服、服をどうにかして！」

上鳴「服？」

八百万の服は最初のヴィラン達との戦闘でパンクなことになってしまっていたが、そのまま立て続けに戦闘していた為失念していた。

耳郎「見るな、バカッ!!」

ブスッ

同性として八百万の名誉を守るために上鳴の目にイヤホンジャックをぶっさす

上鳴「ヒデエエエエエエ！」

噴水広場

死柄木「まったくよ、今回は完全に無駄骨だったな。」

相澤「ぐっ………がっ………」

脳無により取り押しさえられ満身創痕の状態の相澤の頭を踏みながら死柄木はぼやくそこに、

黒霧「死柄木弔、申し訳ありません。生徒を一人逃してしまいました。」

黒い煙が話かける

死柄木「おいおい、マジかよ。プロヒーローたくさん来たらゲームオーバーだぞ。

あーあ、結局オールマイトも来ねえな、結構こっちはカードを切ったんだけどな……もつたないなあ……

腹いせに………

そのこのプロヒーローでも殺しとくか、殺れ脳無。」

相澤「くっ!?!」



脳無が拳を振り上げたその時、

バゴンツ

「みんな、もう大丈夫だっ！なぜって？

・・・わたしが、来た!!!」

憤怒の表情をした筋骨隆々のヒーロー、  
オールマイトが扉をぶち壊し入ってきた

—————

倒壊エリア

蛙水「落ち着いて轟ちゃん、相手のペースにのまれるのは危険よ。」

緑谷の話に半ば放心状態だったメンバーだったが轟の行動の前に驚くと同時にこの  
ままではいけないと

轟をなだめに入った

砂糖「落ち着けて轟！」

切島「なに言われたかわかんないけどお前らしくねえよ」

砂糖と切島により引き離されてもなお轟の目は怒りに満ち緑谷を捉えていた

ーズズズ

黒い煙がどこからともなく現れる

黒霧「だいぶピンチのようですね、緑谷出久。」

緑谷「黒霧さん、ちようどよかつたんですけどどうしました？少し焦ってるようですが。」

黒霧「すみません、ちよつと状況がなので後で話しますが端的に言うとおールマイトが現れましたのでこちらの援護に来てください。」

「「「!!」」」

緑谷「なるほど・・・それは大変だ、急ぎましょう」

爆豪「いかせるか！てめえもその黒いやつもここで終わりだ!!」

爆豪がいち早く阻止しにうごくが

ゾクツ

蛙水「ツ!!・・・爆豪ちゃんダメ!!」

罨よ!!なにかいるわ!!」

個性により鍛えられた本能が警鐘をならす。

爆豪「!？」

ボコッ

地面から這い出て来たそれを見て蛙水は動けなくなっていました。

それは蛙の天敵、蛇をモチーフとした悪の化身

アポピスの化神

永続罨

自分・相手のメインフェイズに発動できる。このカードは発動後、通常モンスター（爬虫類族 地 星4 攻1600/守1800）となり、メインモンスターゾーンに特殊召喚する（このカードは罨カードとしても扱う）

登場の衝撃により氷が崩れ、とりあえず身動きができるようになる。

緑谷「よし、では行きましょう。黒霧さん。」

爆豪「くっそ、待てやデク！」

アポピスの化神により阻まれてしまった爆豪が悪態をつくも

緑谷「かつちゃん、みんな、中央の噴水広場で待ってるよ」

緑谷は笑顔で返してきた。

爆豪「くそがあああアアア!!」

腹いせとばかりにアポピスの化神に爆破を行い、瞬殺する。

爆豪「てめえら、なに腑抜けてやがる、中央向かうぞ!」

戦いは最終局面へとむかう、このコロシウムから出れるのは光か・  
・  
闇か・  
・  
・

## ヒーロー・ヒーロー

オールマイト「相澤君から離れてもらおうか、ヴィラン共！」

壊した扉からジャンプで噴水広場へ降り立つ平和の象徴

死柄木「やつと来たよ・・・お前さえ倒せば俺らはゲームクリアだ、脳無そいつを返してやれ」

脳無は死柄木の指示を受けるとボロボロになった相澤を無造作に投げつけた  
ガシツ

オールマイト「すまない、相澤君。私が不甲斐ないばかりに・・・！」

相澤を抱え入り口の方に飛び相澤を下ろす

芦戸「先生！しつかりして！大丈夫!？」

相澤「騒がなくても聞こえている。大丈夫だ。・・・オールマイト気をつけてください、奴は貴方専用には造られたと言っていました、その力はデタラメではありません、それと・・・」

オールマイト「相澤君もう大丈夫だ。粗方のことは飯田君に聞いている・・・もちろん墓守少年のことも・・・」

麗日「っ!!・・・オールマイト先生、お願いします。墓守君のことも・・・」

麗日は堪えきれず涙をこぼしてしまう

オールマイト「麗日少女、任せておきなさい!何故ならば私は・・・平和の象徴なのだから!!」

すべて救って見せる!

再びジャンプで敵の前に降り立ち対峙する。

死柄木「ラスボス戦だ、殺れ脳無!」

オールマイト「カロライナ・・・スマツシユ!」

オールマイトが渾身のクロスチョップを見舞うも・・・

オールマイト「全然効いてないだど!?!」

死柄木「そいつの個性は「シヨック吸収」、ダメージを与えたいならゆっくり肉を切り刻むとかが効果的だね出来るかは別として」

ゴツ!

オールマイト「ぐっ・・・なかなか重いパンチを打つじやないか、面白くなってきた!」

ーズズズ

「死柄木 弔、連れて来ましたよ」

死柄木の横に黒い煙が現れると同時に中から緑の癖つ毛が特徴的な少年が出てきた

死柄木「おい、黒霧。脳無だけで十分だろ。こいつの手なんか必要ねえよ」

黒霧「申し訳ありません、ですが万が一を考えて可能性は少しでも高い方がよろしいかと」

緑谷「別に必要ないなら手は出しませんよ。今回僕は雇われの身ですから……、まあ特等席で平和の象徴が崩れる様を見させてもらいますよ。」

オールマイト「墓守少年……いや本当は緑谷少年かな。」

緑谷の姿になって初めて向き合う。

緑谷「はじめまして、オールマイト。細かい自己紹介は必要なさそうですね。」

オールマイト「ああ、こいつを倒して君を必ず取り戻す！君も私の大切な教え子の一人だからな！」

そう言うとおールマイトは脳無に飛びかかり、素早く後ろに回り込むと

オールマイト「これならどうかな！」

ぐあっ！

バックドロップを敢行、しかし……

オールマイト「ぐううう!？」

叩きつける筈の地面は黒い煙に覆われそこに吸い込まれた脳無の頭は綺麗なブリッジの下に現れ脇腹を爪で攻撃していた。

緑谷「おや、だいぶ痛がってますけど古傷にでもあたりました？」

ヘラヘラと尋ねる緑谷

オールマイト「!?なぜ傷のことを・・・いやそれよりもこの状況は不味い！」

黒霧「脳無が動きを止めて私の個性で切断する。完璧な作戦ですね・・・なにつ!?」

死柄木「ツ!!」

緑谷「来たね。」

パキパキパキツ

BOOM!!

脳無の体が凍りつき、黒霧達は飛び込んできた爆豪の爆破により吹き飛ばされる  
黒霧「ぐあつ！」

爆豪「やつと追い付いたぞ、覚悟はできてんだろうな雑魚ども」

切島「ヒーローらしからぬ言動・・・」



轟「平和の象徴をてめえらなんぞにやらせるか！」

死柄木「くっ……なんだよ……今いいところなのに邪魔すんなよ」

緑谷「いてて……楽しくなってきたね。」

爆豪組は遂に決戦の噴水広場に到着した。これでヒーロー達は数の上では一応有利にはなった。

—————

少し前

切島「もう少しで噴水広場だ！」

砂糖「おい、あれっ！」

峰田「オールマイトがピンチじゃねえか!？」

脳無と黒霧のコンビネーションにより追い詰められるオールマイトを見たとき轟は

駆け出し、爆豪は

爆豪「蛙女！俺を舌で投げ飛ばせ!!」

蛙水「！わかつたわ……いくわよ！」

爆豪の体に舌を巻きつけ遠心力で思い切り放り投げた

爆豪はさらに手の爆破で加速をつけ

爆豪（余裕そうな面しやがって、なめんじゃねえ！これでも喰らいやがれ!!）」

爆豪はまだ使っていない方のピンに手をかけ三人に向け放った

—————

オールマイト（轟少年の氷結で力が緩んだ・・・！）

ここぞとばかりに脳無の爪から逃れるオールマイト

切島「よし、ここから反撃だ！」

砂糖「熱くなってきたぜ！」

オールマイト「いや、君たちは逃げなさい。」

闘志を見せる二人の生徒を冷静に諭すオールマイト

オールマイト「君たちはまだまだ未熟だ、相手は強い、ここからは私に任しておきな

さい」

轟「・・・さつき俺のサポートがなければ危なかったでしょう。」

オールマイト「それはそれさ、ここからはプロの世界だ」

脳無は轟の氷結により体の動きが鈍くなっていたが

死柄木「おい、まだできるだろ脳無。」

脳無「があ」

ポロツバキヤ

轟「なに!？」

脳無は氷結により脆くなった体が崩れるのを意にも介さず無理矢理体を動かす。  
すると

爆豪「なんだと!？」

切島「さ……再生しやがった!」

崩れた筈の脳無の体は元通りになってしまった。

オールマイト「バカなっ!?!個性はシヨック吸収じやないのか!?!」

死柄木「別にシヨック吸収だけとはいってないだろ……。今のは再生能力だな、お前の攻撃に耐えられる最強サンドバッグだよ……。しかしあのガキ共もム力つくな。」

しばし考え込む死柄木そして、

死柄木「よし、今日はオールマイトだけでいいと思つてたけどガキも全員殺してから帰ろう……。だから緑谷、なんか良いカード使え。」

緑谷「そこで僕かい!?!つてか僕の手を借りないんじや……」

死柄木「気が変わったんだよ。作戦変更だ、オーバークイルして気分よく帰る。」

黒霧「すいません、緑谷さん死柄木はこうなると聞かないので……」

緑谷は溜め息と共にカードをかざす

ジユラゲド 星4 闇属性 悪魔族

攻1700

守1300

ジユラゲドの①の効果は1ターンに1度しか使用できない

①自分または相手のバトルフェイズ中に発動できる。このカードを特殊召喚し、自分は1000LP回復する。

②このカードをリリースし、自分フィールドの表側攻撃表示モンスター1体を対象に発動できる。その表側攻撃表示モンスターの攻撃力を次のターン終了まで1000アップする。この効果は相手ターンでも使用できる

爪の鋭い奇妙な怪物が出現すると

脳無「・・・」 グパッ

ガブッ

即座に脳無がそれに食らいついた。

「「「「「ツ!?!」」」」」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

脳無がすべて飲み込むやすぐにその意味がわかることとなる

巨大だった脳無の体が更に張りを増し見るからにパワーアップしている

死柄木「はっはッは！対オールマイト用個性プラス筋力増強かよ、最高だな。」

脳無「ヴオオオオ！」

バツ

オールマイト（疾い!!）

爆豪「あっ？」

その拳は呆気にとられていた卵達に向けられた

ドバンツ！

死柄木「ヒュー、まずはガキ共の始末完り「それはどうかな！」はあ!？」

見るとオールマイトが拳を受け止めていた

爆豪「オール・・・マイト・・・」

死柄木「流石だな、平和の象徴、だがさつきですら精一杯だったお前が更に強化された脳無に勝てるかな？しかもガキ共の御守りをしながら。」

オールマイト「愚問だな！対私専用？強化？ならばその更に上から押し潰すのみ。有精卵諸君、見てたまえこれがプロの世界だ！」

ゴウツ

脳無の拳を払い除けるとオールマイトはそこからノーガードの殴り合いを展開して  
いく

ドゴンツ!

ガスツ!

メリツ!

バガンツ!

ズガツ!

バキヤ!

緑谷「なんてデタラメなパワーなんだ!」

黒霧「くつ、迂闊に近寄ることすらできない!」

オールマイト「ヴィラン共よ、こんな言葉を知っているかい? かつての英雄ナポレオンが放った言葉を、

ゴツ!

更に向こうヘーPlus Ultra!!」

バゴオオオオオオン!

渾身の力で繰り出された一発は脳無を吹き飛ばしUSJの屋根を突き破り外へと出

ていつてしまった

死柄木「……チートかよ、ここまでして殺れないか。どこが衰えたんだよ、ガセネタだったのか……ブツブツ」

オールマイトは息をきらしながら残った敵と向かい合う

オールマイト「さて、君たちの切り札はご覧の通りだ……どうだい平和の象徴の力は？」

死柄木「あーつくそつ！マジかよ！あと一歩なのに！」

黒霧「落ち着いてください。死柄木 甲、よく見れば脳無と戦った時のダメージが残ってます。」

苛立ちを露にする死柄木を黒霧が諭す。

死柄木「ああ、そうだな。まだゲームは終わってない、脳無の仇討ちだ！」

オールマイト（くっ、実は結構ギリギリなんだけど……）

闇緑谷『ギャハハ、いいねえ、オールマイトもう1ゲーム楽しもうぜ』

爆豪「てめえの相手は俺だ！」

BOOM!!

まだ13号の血が乾いてない金の杖をかざし飛びかかろうとした緑谷にカウンター

とばかりに爆豪が立ち塞がる。

オールマイト「爆豪少年!？」

闇緑谷『ぐあつ! かっちゃん。いい加減に……!』

バンツ! バンツ!

死柄木「つ!？」

飯田「クラス委員長飯田 天哉、ただいま戻りました!!」

出入口を見ると飯田を筆頭に雄英高校のプロヒーロー教師陣が臨戦態勢で入ってきた

死柄木「あーいってえ、時間切れゲームオーバーだ。」

黒霧「死柄木 弔! 撤退しましょう、まだ機会はあります。ここは退きましょう!」  
ーズズズ

黒霧は個性を展開するも

ゴオオオ

黒霧「なに!?! 引き寄せられる!?! この個性はまさか……!」

13号「僕だ!」

なんと、緑谷、黒霧により傷を負わされていた13号が個性で懸命に敵の撤退を妨害していた。



黒霧 「くっ、このままでは・・・」

闇緑谷 『くっ、しようがない、余り手の内は見せたくないけど・・・』

緑谷はカードケースから無地のカードを取り出し金の杖に付着した血を着けた  
すると

パアアアアア

カードに絵が映し出される。

ブラックホール           魔法カード

ワールドのモンスター全てを破壊する

ゴウツ

13号 「なに!？」

かざしたカードから放たれた力により13号の個性が相殺される。

緑谷 「二人共、今のうちに『デエエエエエエウウウウ!』なに!？」

見ると爆豪が緑谷が放ったブラックホールの引き込む力を利用して迫ってきた  
完全に虚を突かれた緑谷に爆豪は右手で個性を叩きつける

BOOOOOOOOOOM!!

「ぐっ・・・それが・・・!」

緑谷「惜しかったね・・・かつちやん。」  
爆豪の体にカードが一枚突き刺さっていた。  
ドサツ

切島「バクゴーーーーー!!」

オールマイト「爆豪少年!」

緑谷「大丈夫、死んではいけませんから・・・では、」

死柄木「ヒーロー共、覚えておけよ。次こそは必ず平和の象徴を潰してやる。」

こうして脅威達は去っていった

ヒーローの卵達に大いなる経験と、巨悪の影を残して・ ・ ・

## 醒めない悪夢

ーズズズ

死柄木「ああ、いつてえ。先生、オールマイトの奴めちやくちや強かつたぞ、ほんとに衰えてるのかよ……」

黒霧の個性でなんとか本拠地のバーに帰ってきた死柄木はなにも映ってない画面に向けて話しかけた

「本当さ、ただ今回は見通しが甘かつたな、守るべきものがあることで逆に奮起させてしまったな。」

黒霧「あとは、その生徒達ですかね。流石は最高峰なだけはあり卵とはいえ手強かつたですね」

「ふむ、だからこそ一からまた精銳を集めなおし作り上げていこう。近い未来にこの敵連合は新たな秩序の先頭に立つ。その象徴となるのが君だ……死柄木 弔！」

声の主は慰めと共に新たな未来の展望を語る。

「それと、今回はご苦労だったね。緑谷君」

緑谷「いえいえ、お気になさらず。僕も懐かしい顔に会えて改めて自分の気持ちに気

づけましたし、それになかなか面白そうな玩具（おもちゃ）達が揃ってましたし。」

緑谷は満悦の表情を浮かべた

「おやおや、困ったものだ。まあ、かねてからの約束通り自由に遊んで構わないが遊びすぎて壊さなように頼むよ。」

闇緑谷『わかってますよ、先生。俺らの最終目標は平和の象徴の抹殺、これからの動きはその余興みたいなものですから・・・』

そう言い残し緑谷はバーの扉から出ていった。

「さて、面白くなりそうだね。」

オールマイト、君に彼の心が救えるかね？」

誰よりも淀みなく負の感情に従順な心を・・・

—————

ヴィランによる雄英高校襲撃

あまりに荒唐無稽な出来事だったがオールマイトの活躍と生徒、プロヒーローの奮闘により警察がつく時にはチンピラヴィラン達は全員無力化されていた。

生徒達も概ね目立った外傷はなし、爆豪も心配されたがすぐに意識を取り戻し無事が確認された。

オールマイトがぶっ飛ばした脳無も発見、特に抵抗することなく無事確保。雄英高校襲撃事件はここに一応終結した。

1—A組の生徒達はまずこの困難を乗り越えたことに安堵した。

しかし次に心に現れたのはクラスメイトの裏切りと言う衝撃だった。

クラスメイトであり誰もがその個性に驚きを隠せなかった。

しかしそれ以外はなんら平凡で自分達とは特に変わらない同世代が先生に攻撃、しかも容姿まで偽物ときた、この事実をどう受け止めたらいいか彼等はわからなかった。

爆豪とあのときそばにいたメンバーもまた事態の収集ができてなかった。

結局この日は授業は終了、明日は臨時の休校になるとだけ告げられその日はそれぞれ心残りがあがりながらも帰宅していった。

—その日の夜 爆豪家

爆豪は家族に心配されたが、そんなことを歯牙にもかけずただ苛立っていた。

クラスの俺をコケにした奴が裏切り者で、しかもその正体は幼き頃無個性だと馬鹿にしていた幼なじみ。

それはつまりあいつの手のひらの上で踊らされていたということ・・・  
そして最後の攻撃をかわされ反撃をもらい気絶、彼のプライドをズタズタにするには十分すぎる

爆豪はその苛立ちを少しでも紛らわそうと風呂に入ろうとした、服を脱いだその時それに気付く。

爆豪「なんだあ・・・？」

最後のカードを刺された位置にそれはあった、そこにはしっかりと刻印が  
”XX”と刻まれていた。

—————

ーとある廃ビル

???「お帰りなさいませ、マリク様・・・いやもう緑谷様でよろしいですか。どうでしたか首尾の方は？」

緑谷「ああ今回は失敗だったよ、でも暫く自由に遊んでいい許可はもらったよ。」

???「おお、それはそれは・・・では我々にも出番が回ってきますかな？」

緑谷「ああ、これから忙しくなるよ。楽しい楽しいゲームの準備をはじめようか。」

緑谷の顔が歪んだ笑顔を作る。

「了解いたしました、この、パンドラ、全てを賭して緑谷様の悲願達成に尽力いたしましょう。」

奇妙なかめんで顔を隠したスーツの男も恭しく宣言を告げる。

緑谷「かつちゃん、轟君、A組の皆、君たちは強いよ、だからこそ面白くなりそうだ。この面白い《ゲーム》楽しんでくれるかな。」

そう呟く緑谷の左手の機械には一枚のカードが入っていた

終焉のカウントダウン  
通常魔法

ライフを2000払う。発動ターンより20ターン後、自分はデュエルに勝利する。

悪夢はまだ序章に過ぎない、苛烈なる戦いのあとには新たなる闇が手招きして英雄の卵達を待ち構えていた。



## 死神の巡遊

休校を挟んでの登校日、爆豪の苛立ちはピークに達していた。

襲撃事件での屈辱、その後警察の調査で緑谷出久という人物について再度調査が入り、休校中の学校に自分が呼ばれ根掘り葉掘り聴取を受けることになってしまった。

そして教室に入れば・・・

ピタッ

さつきまで騒がしかった筈が静まり返り視線が爆豪に集中する。

爆豪はそれに臆することもなく自分の席に着く。

すると、

爆豪「・・・んだよ、丸顔、半分野郎。」

爆豪の近寄るなどという雰囲気により重苦しくなった空気を切り裂くように二人が爆豪の席に詰め寄った。

麗日「墓守君について・・・緑谷君について知ってること教えてくれへん？」

轟「わりいな、あのとときの様子、全員に話させてもらった。」

爆豪「はあ？ふざけんな！勝手なことしてんじやねえ！

あいつは俺が決着をつける！てめえ等雑魚には関係ねえ！」

轟「関係ないことはない、短い時間とはいえ奴の個性の強さを皆知っている。それが敵として襲ってくるんだ、次に備えて情報は少しでも多い方がいい。」

すると教室の扉が開き

???「その話はこちらから話さしてもらおうよ。」

相澤「ホームルーム始めんど、席に着け。」

ミイラの用に包帯だらけの担任が肩に珍妙な生き物を乗せて現れた。

瀬呂「先生、もう動いて大丈夫なんすか!？」

相澤「当たり前だ、プロヒーローをなめるんじゃない。」

それよりも、墓守・・・いやこれからは緑谷と統一した方が合理的だな、その事について話すことがある。」

「「「っ!!」」」

全員の顔が強張る

相澤は一人少なくなったクラスが静まったのを確認して話始めた。

相澤「では、根津校長よろしくお願いします。」

根津「ありがとう、相澤君……まず始めに君達には謝らなくてはならない。敵連合の侵入を許し、更には生徒にその息のかかった者がいたのを見抜けなかった。これは学校側の失態さ。」

教壇の上に立った根津校長は頭を下げた。

飯田「そんな、校長先生自ら謝罪など……」

誰もが驚きを隠せないなか

相澤「大事なものはここからだ、これから先また敵連合がいつ襲ってくるかわからん、そこで可能な限りの情報をお前らに教えておく。構わないな……爆豪？」

爆豪の返答は舌打ちだった。

—————

相澤から開示された情報に対する反応は様々だった。

緑谷出久の正体、生い立ちそれはあのとときの緑谷から直接話を聞いた者にとっては裏打ちなり、又聞きで伝えられた者にとっては確かな事実として確立される情報だった。

相澤「これから先お前らには例年よりも速く成長してもらわねばならない。同年のヴィランが現れたのと言うことは最悪お前らがプロなるまで、もしくははなつてからも敵対していく可能性があると言うことだからな。」

爆豪「ハッ、そこまでかからねえよ。次に会ったときがあいつの最期だ。俺が決着をつけてやるよ。」

根津「その意気は良いよ。そこで次の戦いについて話をしておくよ。」

次の戦い・・・

その言葉に全員が身構える

相澤「二週間後に雄英体育祭が迫っている。」

—————

とある廃ビル

パンドラ「雄英体育祭、かつてのオリンピッククに代わる一大祭典、のみならず将来有望なヒーロー科の生徒をプロヒーローが品定めする大事な日・・・これを逃さぬ手はありませんね。」

「た・・・楽しみだかな。」

「そういうえば緑谷様はどうしておられる?」



体育祭まで一週間を切った雄英高校の職員室

そこに気になる一報が届く

パワーローダー「ああ、扉の外を写すカメラの位置にかれこれ一時間位立ち止まっている。」

ミッドナイト「立ち止まっている？なにか怪しい行動とかは？」

パワーローダー「まったく、マイクでのこちらからの呼び掛けにも応答なし、まるでマネキンのように動かない。」

プレゼントマイク「Why? 口も聞かねえってか。」

パワーローダーは端末にカメラの映像を映す。

そこにはスキンヘッドで目の下に黒いペイントを入れ口周りにピアスを開けた男がパントマイムのような姿勢で映し出されていた。

パワーローダー「しやべらないどころか、瞬きすら一度もしていない、明らかになかおかしい。」

ミッドナイト「近くに行って直接問い詰めて危険があるようなら拘束した方がいいわね。今フリーなのは私達だけだし、行くわよ山田！」

プレゼントマイク「OK!あと山田はやめてください!」

## 校門前

プレゼントマイク「Hey! そのリスナー、雄英高校になんか用かい？」

まだ十分な距離を確保した上で謎の男に話しかけるも、

謎の男「……………」

プレゼントマイク「つたく、しけたリスナーだぜ。」

ミッドナイト「確実に誘ってるわね、まさか敵の本拠地の前で下手なことをしてこないとは思うけど……私が近づいてみるわ。もしもの時は後ろから援護頼むわ、山田。」

プレゼントマイク「だから本名はNo!」

プレゼントマイクの訴えも流し鞭を取り出し謎の男に近くミッドナイト

ミッドナイト「さあ、誘いに乗ってあげたわよ。雄英高校になにかご用かしら？」

謎の男はミッドナイトが近くになると

謎の男「!!」バツ

ミ／プ「!!?」

謎の男は急に動きだし提げていた肩掛けのバックからノートパソコンを開いてミッドナイトに差し出す。

その画面には・・・

「やつと繋がった、えーとどちら様が対応されたのかな？」

ミッドナイト「あなたは・・・緑谷 出久!？」

巨星の突然の訪問（？）は何を意味するのか？

新たな風か新たな雷雲を連れてくる。



## 無力の証明

ヒーロー科の生徒といっても一介の高校生である彼らにとって放課後というのは普通の高校生達とやら変わりなく待ち遠しいものだ。

厳しい倍率を勝ち抜き、ヒーローになるために訓練に明け暮れ、それでいて国立教育機関の受難に晒される（主に数名）そんな時間から解放され、各々が自由に青春を謳歌できる時間は貴重なものだ。

そんな放課後に雄英高校1-Aの生徒達は視聴覚室に集められていた。

ざわざわ

「なんだあ？」 「あんたがあまりにもバカだから公開説教じゃない？」 「ウェイ!?」  
「ケツ、かつたりいな・・・」

ガラッ

相澤「すまないな、お前らの貴重な時間を取らして」

視聴覚室に入ってきたのは担任の相澤とミッドナイト、プレゼントマイクの三人だった。

相澤「お前らには今からある映像を見てもらう……。  
だが一つ約束しろ、

決して取り乱すな。」

「「「!?」」」

そういうとスクリーンが下がってきて映像が映し出されるそこには

「やあ、みんな、僕が来た。」

全員に緊張が走る。

爆豪「くそが……。」

元クラスメイトが悠然と話す姿があった。

—————

ミッドナイト「っ!?……あらあら、マークされている

敵連合あなた達の方からコンタクトしてくれるのね。また襲撃かしら?それとも復学の手続き

にでも?」

ミッドナイトは動揺を即座に抑えプレゼントマイクにサインを送りつつ挑発的に話し始める。

緑谷「すぐに感情に流されず冷静に次の手を打ちつつ挑発でこちらの出方を探る、さすがプロヒーローですね。ですが残念、今回は僕がリーダーのグループとして元クラスメイト達に僕らが開催するゲームの招待にお伺いしました。」

ミッドナイト「ゲームの招待ですって？」

「認められないな、」

緑谷「おや、相澤先生。」

相澤「なんで罫とわかるものに参加させる？こちらにメリットがない、あいつらは年に一回のチャンスに向けて頑張ってたんだ、今日の所は見逃してやるから帰れ、それが合理的だ。」

いまだミイラ男の姿の相澤が毅然とした態度で言い放つ、

緑谷「雄英体育祭ですよ、もちろんそれも考慮していません、というよりI-Aのみなんだけに特別賞品を用意しただけですから。」

相澤「・・・特別賞品？」

闇緑谷『ああ、ある一人の生徒の命、呪いを解く方法とかでどうよ？まさか呪いに心当たりがないとか言わないよな？ミッドナイト!』

突然の指名に驚くミッドナイトだったが・・・

ミッドナイト「まさか、爆豪君!？」

敵連合の去り際に起きた攻防を思い出した。

闇緑谷『ご名答。俺は無駄なカードは使わない主義なんだよ!』

さあどうする! かつちゃんも見殺しにして俺と同じで事実を隠すかい? ヒーローさんよお!』

相澤は歯噛みした。

緑谷の言う通り、現在雄英高校から敵に裏切りが出たとは公表はなく休学と報道されている。

それは決して雄英高校単独の判断ではないにしても事実後ろめたい尾を引く形になっってしまった。

相澤(まったく、だからあの判断は合理的じゃないと言ったのに・・・)「わかった、話をつけてくる。ミッドナイト、奴を引き続き見張っててくれ。」

緑谷「聡明な判断、ありがとうございます。」

緑谷は満面の笑みを浮かべた

緑谷「この間は楽しんでくれましたか？さすがプロヒーローを目指すだけあってみんな強いね、そんな君達に僕から特別賞品を用意しました。」

ジツ

爆豪「っ!？」

画面越しに目があう

緑谷「かつちゃん、さすがだね。薄々気付いているはずなのに表情に出さない、ましてや誰にも教えてないなんて呆れる位意地っ張りだよ。」

切島「バクゴー!?! どういうこった?」

飯田「何があつたんだ!?! 爆豪君!?!」

爆豪「うるせえ! 騒ぐな雑魚が! . . . ケツ、クソデク、教えてやるよ。このアザがあるってこたあまたてめえの方から殺られに来てくれるって確信があつたからだよ。雑魚らしい回りくどいやり口だな。」

周囲の心配を払いのけ緑谷にガンを飛ばし言い放つ。

闇緑谷『ギヤハハ、それでこそかつちゃんだ!』

峰田「ま・・・またあいつだ・・・」

蛙水「ケロオ・・・」

愉悦の表情に顔を歪ませる緑谷、元クラスメイトはその姿に恐ろしいなにかを感じ取っていた

闇緑谷『じゃあ改めて賞品の説明だあ！俺は今、爆豪勝己にある呪いをかけている、それを解かなければ体育祭後にあの世行き！かつちゃん優勝したらそれを解いてあげるよ。』

爆豪「はっ、何かと思えば優勝すればいいだあ？

なに当たり前のこといつてんだ！俺が優勝するに決まってるんだろ、そんなもん!!」

クラス全員の前で堂々と優勝宣言、しかし爆豪勝己という男の実力を考えればあなたが無謀な宣言とも言えない。

闇緑谷『そうだろうねえ、これじゃあ余りにも面白くない。けどそこを面白くするのがもう一つの賞品だ。』

そういうと緑谷はカメラの撮影している位置から外れた、次の瞬間カメラが動く、そこに映されていたのは・・・

ガタツ

「ね．．．姉さん．．．!？」

後ろ手で縛られ椅子に眠らされた女性

闇緑谷『見てる？最高傑作君。

君の大切なお姉さん轟冬美さんだよ。』

轟「てめえ．．．姉さんに何しやがった!!」

相澤「落ち着け!轟、言ったはずだ決して取り乱すなど、この手のタイプに怒りや焦りを見せるのは愚行だ。」

ツウー．．．ポタ．．．

八百万「轟さん．．．血が、」

相澤に諭されなんとか理性を取り戻した轟だったが行き場をなくした怒りによつて嘔み締めた唇から出血していた。

闇緑谷『慌てんなよ、眠ってもらつてるだけだ。轟君、お姉さんを助けたいなら条件がある、

君が優勝することだ。』

上鳴「なっ……!」

常闇「ムッ……!」

葉隠「それって……だつて爆豪君の助かる条件も優勝なのに……」

全員がその発言の真意を理解する。だがだからといって容易に受け止めきれるものではなかった。

闇緑谷『そう、未来のヒーロー候補最有力二人で好きなだけ殺り合ってもらおうゲーム、どうだい面白そうだろう?』

八百万「なんて非道な……」

青山「趣味悪すぎ☆」

闇緑谷『安心しな、二人以外が優勝したらどっちがほしいか選ばせてやるよ、大丈夫だと思うが万が一他のクラスの奴が優勝したらどっちもなしだ!』

あとそこで聞いているプロヒーロー共、余計な手を加えるなよ。わかった瞬間ゲーム終了だ!』

プレゼントマイク「SHIT!」



ミッドナイト「くっ……！」

敵からの先手を受け悔しさを滲ませる教師陣

闇緑谷『じゃあこれで話は終わりだ、当日、皆の頑張り楽しみにしてるよ。じゃーねー』

プツンツ

悪意のメッセージは終わりを告げスクリーンにはなにも映されなくなった。

視聴覚室には淀んだ空気と凄惨な戦いの始まりを告げられ動けない生徒達が残されていた



??? 「き・・・綺麗な人なんだな。肌も真っ白で・・・」

??? 「光の仮面、手を出すなよ。」

光の仮面「わ・・・わかってるんだな。冗談だからそんなに怒らないでほしいんだな、闇の仮面。」

闇の仮面「時が来れば好きだけ手を降せば良い、緑谷様の合図が来るまでおとなしくしておけ。おそらくそろそろ最終種目の時間だろう。」

—————

プレゼントマイク「Yeahエーーーーーイ盛り上がってるかいリスナー共!!」

最終種目の一対一ガチンコバトルを前に会場のボルテージは最高潮に達そうとしていた。

プレゼントマイク（ちっ、まったく無様なもんだぜ。あいつらと変わらない歳の敵にいいように弄ばれ不安を広がらせないように道化を演じるとわなあ・・・）

相澤「そんな顔をするな山田。感情的になっただけに事を大きくしてもしようがない。」

今はあいつらを、あの人達を信じるしかない。」

雄英高校体育祭

最終種目は一対一のガチンコバトル

トーナメントのくじ引きは目下優勝候補に上がる爆豪と轟が当たるのは決勝戦と言  
う結果となった。

爆豪（どこで当たろうと関係ねえ！優勝するのは俺だ！）

轟（……………）

轟は難なく初戦突破

爆豪の一回戦の相手は……

??? 「爆豪君……………」

爆豪「……………なんだよ。丸顔、次の対戦相手に話しかけてくるなや、なめてんのか！」

麗日「そんなんやない！……………なあ爆豪君、墓守君の事なんやけど……………」

爆豪「はあ？敵に寝返ったクソナードがなんだってんだ！」

麗日「確かに敵だったよ？大好きな13号に攻撃したのも驚いた。でも……………少しの  
時間だけ彼の優しさに私は触れたような気がするの。」

戦闘訓練での事を思い返して語る麗日、

あのとき此方の個性を汲み取った上での作戦立案、最後まで私を守り勝利へと導いてくれたこと。

その姿にヒーローらしさを見た麗日

「大丈夫、かつちゃん？」

爆豪「ッ!？」

フラッシュバックする記憶

差し伸べられた手

己の力の有無に関わらず、

これまでの行いに囚われることもなくただ一つの思いの元に行動する

その精神はまさに……。

爆豪「……だからどうした。今のあいつは敵で俺はそいつに命盗られかれてる。」  
麗日「うん、わかってる、だから私ももつと強くならなあかん、彼の事をもつと知ってその上で乗り越えたい。そのためにも追い付かないけん。」

だから……

麗日「私は手加減も、同情も哀れみもせん。全力で倒しに行くから。」  
爆豪「チツ、勝手にしろ。」

「さすが、エンデヴァーの息子だな、すごい個性だ！」

「目付きの悪いあの子の個性も素晴らしい、即戦力級だぞ。」

「その子と戦った女の子もなかなかにおもしろい個性だ。あれは育て方次第では化けるかもな。」

あの個性はすごい、あの個性は、個性がく

この世界はいつから個性Ⅱ人物像になったのだろうか？

どんなに頑張っても個性一つであつと言う間に白は黒に、黒は白に成り変わる。

(他人を個性でしか判別できなくなつた奴等に、数年前に死んだ筈の人間が生きているなんて気付く筈もないか……)

ましてやその少年が悪の組織のリーダーで雄英襲撃に荷担していたなど……。

緑谷「闇の仮面、テレビでわかる通り決勝戦は案の定かつちやんと轟君だ。決着次第すぐ行動を開始するように。」

闇の仮面(大丈夫です。緑谷様、全て手はず通りに……。)

しもべの言葉に納得し電話を切る緑谷、

緑谷「さあ、そろそろクライマックスだね。」

上鳴「結局こうなっちまったか……。」

決勝戦

爆豪勝己 対 轟焦凍

観戦席にいる――Aは苦い顔をしていた。

切島「ちくしょう、なんかあいつの手のひらの上で弄ばれてるみたいだ。」

八百万「結局私たちの力量は敵の予想の範疇と言うことなのでしょう……。」

常闇「勝てばそれで重い責任がのし掛かる。だがそれに恐れては英雄にあらず……。」

蛙水「そうね……それを言い訳にしてはいけないわ。」

瀬呂「負け犬は吠える権利すらないってか……。」

尾白「だからこそ、目を逸らさず見届けなくちやいけない。それが僕たち負け犬に課された責任だ。」

この戦いで確実に片方の大切ななにかは失われる。

それでも後戻りは許されない。

世界は全ての夢を叶えきれるほどの容量は有していないのだから・・・。



## 命の綱

プレゼントマイク「Yeah! いよいよ決勝戦だ。熱いバトル期待してるぜ!」  
プレゼントマイクの言葉に呼応する観客の熱気でスタジアムは溢れかえっていた  
ミッドナイト「二人とも準備はいい? ……では始め!」

そんな熱気を引き連れて開始された決勝戦は激闘となった

巨大な氷塊をくり出し接近を阻む轟

その氷塊を爆破で破壊し持ち前の戦闘センスで接近を試みる

一進一退の攻防、しかし突如盤面は動き出す。

轟「くっ!」

爆豪「! ……おらあ!」

BOOM!

一瞬轟が産み出した隙を逃さず急接近して爆破を繰り返す爆豪。  
轟も必死に避けるがその動きは鈍い。

芦戸「なんか轟の動き遅くなってない?」

上鳴「へばってきたのか？」

八百万「いいえ、違いますわ。おそらく個性の影響です。」

轟は個性で氷を作っているがその影響で自身も常にその冷気に晒される。乱発すれば体温の低下、それに伴う弊害が生まれてしまう。

対して爆豪の個性は汗を起点とするため、ある程度トップギアに上がるのに時間がかかる

瀬呂「じゃあ、轟の方が不利じゃねえか？」

青山「決勝戦まで全部一撃だったからね☆」

障子「ここに来ての長期戦は爆豪にとってはアドバンテージだな。」

BOOM! BOOM!

徐々に爆豪の有効打の回数が増えていく。

轟（負けるか！俺の一番の理解者である姉さんを殺してたまるか！あいつの個性を使わずに優勝して姉さんを助け出す！）

爆豪「てめえ、なめてんじゃねえぞ！半分野郎！」

急に爆豪が個性での攻撃ではなく普通に殴りかかる

バキッ

爆豪「どう言ったつもりかは知らねえが、俺様相手に舐めプで勝とうなんざ思っ  
てんじやねえ！全力できやがれ！」

轟「うるせえ！俺は全力だ、すぐにでもお前を倒して姉さんを助け出す！」

爆豪「だったら左側の能力も使えや、この野郎！」

「お前は最高傑作だ

ズキツ

轟「黙れ！俺はあいつの力なんざ使わなくても優勝できる！姉さんを助けることが  
できる！ヒーローになれる！」

再び氷で攻撃を行う轟

爆豪「効くか！んなもん！」

BOOM！

爆豪「ハッ、だとしたら俺の勝ちだ、こちとら命かかってんだ！変なプライドに負け  
て全力もかける価値ねえってかその姉貴は！」

轟「ふざせるな！姉さんは俺の事を守ってくれた人だ、母さんが倒れてから俺を必死  
に支えてくれた大事な人だ！」「だったら！」

爆豪「ウジウジ悩んでねえで守るべきものの為に力使えや舐めプ野郎！てめえもヒ-

ローになりてえんだろ！」

轟「!!」

「いいのよ、なりたい自分になって・・・」

ゴウツ

轟「お前、いかれてるよ。自分の命が危ないつてのに他人に全力を出させるなんて・・・」

爆豪「全力を越えなきやおもしろくねえだろ！これでこれで互いに恨みつこなしだ」

轟「知らねえぞ、左側<sup>こっち</sup>使うの久しぶりだから加減きかねえ・・・」

爆豪「上等だ！」

—————

緑谷「なんだ、つまらないな。君はそんな奴じやなかったはずだ。他人のことなどにも考えず己の本能のままに生きていたはずだ。」

そろそろ決着という場面で観客が食い入るように見つめるなか緑谷は席を立ち出口に向かっていた

闇緑谷（見てかなくていいのか？）

緑谷「あんな急に使いだした個性なんかじゃあかつちやんは倒せないよ。彼がどれだけあの個性で僕に傷を負わせたか知っているだろ？」



るでしょうから、ではごきげんよう」

目の前の男にカードを手渡し、すれ違い去ろうとする緑谷

「ひとつだけ言っておく!・・・ヒーローを舐めるなよ!!」

緑谷 「なんだと!?!」

—————

決勝終了後すぐ・・・

闇の仮面 「決まったか。」

光の仮面 「ぎ・・・残念なんだな。こんなきれいな人なのに殺してしまうなんて。」

光の仮面は椅子に眠らされている轟冬美に目を向ける

闇の仮面 「仕方あるまい、緑谷様に目をつけられたが運の尽きだ」

二人が処刑を行おうとしたその時、

「させぬわあ!」

ゴウツ

突如として人質を守るように火柱が上がる

エンデヴァー「大切な家族を返してもらおうか。下郎ども！」

そこに現れたのはヒーローランキングNo. 2にして人質の父でもあるプロヒーローエンデヴァーだった。

「エンデヴァーさん下にいたチンピラ共も確保しました。」

次々とサイドキックがなだれ込んでくる。

エンデヴァー「さあ、貴様ら覚悟は出来てるだろうな！」

No. 2ヒーローとしての正義感と娘を危険な目に合わせた者への肅清を実行すべくエンデヴァーの一喝が響いた

—————

バシユ ガシツ

緑谷「ぐあっ!？」

相澤「捕らえたぞ！」

いつの間にか背後をとっていたイレイザーヘッドの捕縛布に巻き付かれた緑谷

相澤「お前の個性に俺の抹消が効くのは実証済みだ。轟冬美救出にはエンデヴァーが動いている。プロヒーロー達ももうすぐ集まってくる。なにが目的かはわからんがそれもここまでだ！」

緑谷「……………」

「少年よ。もう一度だけ言っておく」

ズオツ

骸骨男が一気に姿を変える

オールマイト「ヒーローを！舐めるな！！」



## 王者の看破

緑谷「これはこれは、参ったね。」

イレイザーヘッドに拘束され、オールマイトも眼前に立ち塞がる。

まさに絶体絶命。

その辺のチンプラヴィラン達なら即投降してしまう場面ですら、その顔から余裕が消えることはなかった。

オールマイト「ようやく、ゆっくり話ができそうだね。緑谷少年！」

ニカツと笑みを放ち緑谷と相對する

緑谷「・・・そうですね。僕もあなたと話がしたかった、もつとリラックスして話したいのでこの拘束を解いてくれると助かるんですが。」

オールマイト「H A！H A！H A！そこは我慢してくれたまえ！」

キラーンと輝きそうな歯を見せてサムズアップで答えるオールマイト

オールマイト「さて、緑谷少年よ。聞けば君は爆豪少年と幼なじみ、本来なら今日の彼等のように未来に向け学び笑い、青春を歩むべきはずだ。」

緑谷「それは一般論ですね、僕は生まれながらにその一般というものから外れてし

まった。いや、そもそもこの世界の人間という定義から外されてしまったと言った方が  
良いかもしれませんね……。」

相澤「……………」

相澤は何も言うことが出来なかった。

幾ら声を上げようともこの世界の八割の人間が個性という超常能力を持ち社会は  
益々その個性の基に制度を作り直し、新たな価値観、システムを産み出していくだろう  
しかし……

緑谷「でも僕だって一緒に生きていく権利があるはずだ！彼らと同じように歳を取  
り、彼等の言葉を理解し、感情を共有できる。」

なのに、無個性というだけで弾かれてしまう。」

オールマイト「緑谷少年……。」

幾ら平和の象徴と言えども万能ではない、いま世間に根付いている無個性への差別的  
感情を消すことなど到底無理なことだった。

ましてやこれから無個性というのはどんどん減っていきこれから先いなくなつてし  
まう可能性が高い、いずれ無個性というのは非常に稀な難病のような扱いになつてし  
まっても不思議ではない

緑谷「オールマイト、貴方は確かに素晴らしい英雄だ。」

緑谷の纏う雰囲気が変わる

闇緑谷『だが英雄止まりではこの世界の闇は照らせない！この世界の深淵に光を灯し、救えるのは神に選ばれた王のみだ！』

高らかに告げるもう一人の緑谷出久

相澤「っ!!」

オールマイト「・・・確かに私とて人間だ。どれだけ手を伸ばそうと救えない人がいることなど承知している、

だか！

私が歩みを止めてしまえば今より多くの悲しみが生まれ、希望の灯火が消えてしまう！

私の光が世界を覆えなくても私の光を追い数多の光が灯れば君の言う深淵すらも超えて行ける！

その為に私は平和の象徴であり続ける！

何があろうとこう叫んでみせる！

『私が来た！』となー！

オールマイトは拳に力を入れ、自戒の念を込めて宣誓する。

緑谷「さすがです、オールマイト。かつて僕が憧れた人……」

「オールマイト！イレイザーヘッド！」

声が聞こえたと思えばシンリンカムイを始めMt.レディやデステゴロ等のプロヒーローが応援に駆けつけてやって来た。

緑谷「ふうー、もっと話したかったです、残念、時間切れだ。」

オールマイト「緑谷少年よ。君の生い立ちには同情する。

しかし、罪は罪で償わねばならん。

もう一度考え直し。償いが済んだのなら再び世界を見てくれ。世界の闇をも照らす希望の灯火の束を。」

こうしてプロヒーロー達と警察に緑谷出久は連行されていった。

オールマイト「やれやれ、一先ずはつてとこかね。」

騒動が去った人目のない廊下でオールマイトはガリガリの骸骨男に戻っていた。

相澤「どうですかね。エンデヴァー達から救出成功の連絡後、詳細な報告が上がってきていませんし、まだ雇い主である敵連合の全貌も掴めていない。」

オールマイト「それならば戦い続けるまでだ。先程の宣誓を早速破る訳には行かないからね。」

## 1—A控え室

決勝終了後、閉会式の準備が始まり完了まで控え室で待機を言い渡された1—A一同  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

控え室の中はどんよりとした空気で満ちていた。

結果はどうあれ二人は全力でぶつかり、答えを出した。

あの場にすら立てていない自分達が出すことではない。

しかし、このやるせなさを解決する術をまだ若い彼らは持ち合わせてはいなかった。

自分がどちらか片方の立場だったら？

想像するだけで言い様の無い気持ちに苛まれる。

そんな中、

ガラガラ。

爆豪「「「「」」」」」

轟「「「」」」」

激戦を終えた二人が帰ってきた。

麗日「爆豪君「「」」」」

八百万「轟さん「「」」」」

周囲の目線をよそに二人は無言で席に着いた。

轟「これが結果だ。」

爆豪「……………」

誰に言うわけでもなく轟が話し出す。

轟「ヒーローになれば、難しい決断を迫られることがあると聞く。」

命を天秤で計らねばならないような、それがどれだけ愚かなことだとしても……

轟「今回俺は気づかされた、俺という人間の小ささに、弱さに……」ポタツ

誰も何も言うことができない

轟「これじゃ、なにも救えない、決断する以前の問題だ。だから……」ポタツポタツ

轟は気丈に語るがその目には必死に堪えた涙が溜まっていた。

他のメンバー達も涙が浮かぶなか、その雰囲気を取り裂くように

ガラツ

相澤「……………全員いるな？」

飯田「相澤先生……………」

相澤は全員がいることを確認して部屋に入り扉を閉めた。

相澤「まず始めに体育祭ご苦労さん、爆豪……ほらよ」

爆豪は相澤から手渡されたカードを受けとる

魔法除去 通常魔法

フィールド上の魔法カード一枚を選択して破壊する。選択したカードがセットされている場合、そのカードを確認し、魔法カードなら破壊する。罠カードの場合はもとに戻す。

受けとるやカードら毒々しい紫色に妖しい輝きを放つ宝石が埋め込まれた錠と鍵が現れた。

爆豪「……………」カチャカチャ、カチン

錠穴に乱暴に鍵を突っ込み、躊躇いなく回す。

すると、

ズクンツ

爆豪「ツ!？」

あのアザ辺りに違和感を感じた。そして、

ズサアアアア

その錠も塵となり宙に舞い消えてなくなった。

爆豪はすぐに上着を捲りアザがあった場所を確認するとそこにあったアザは消えていた。

切島「大丈夫か？バクゴー？」

爆豪「ああ。」

その言葉に皆に安堵の表情が浮かんだ

轟「良かったな、爆豪。」

爆豪「・・・好きなだけ恨んでもらって構わねえ、それでも俺には成し遂げなきやいけないことがあるからな。」

爆豪は強い決意で言い放つ

轟「恨みつこ無しと言ったのはお前だろ？俺もそれに乗った上での結果だ。寧ろ・・・俺の方が、俺の方が姉さんに恨まれるべきだ。」

控え室の中にまた沈痛な空気が流れるも、

相澤「・・・お前らは全力で体育祭に挑んだ、奴の企みに付き合わされたとはいえ、各々が未来の為に出し惜しみすることなくやりきってくれた。」

担任の言葉に全員が顔を向ける。

相澤「それに全力で応えるのが大人ってやつだ。」

ポンと轟の肩に手を置く

相澤「轟冬美救出に動いていたエンデヴァーから連絡が来た。

轟冬美、お前の姉さんの救出に成功したってな。」



轟は驚き目を見開く

芦戸「先生、じゃあ、じゃあ轟のお姉さん無事なの？」

相澤「ああ。」

「「「やったー！」」」

先程迄の空気が嘘のような歓喜の声が弾けとんだ。

峰田「スゲー、流石はエンデヴァーだな。」

瀬呂「あいつの悔しがる顔が浮かぶな！」

切島「よかったな！バクゴー！」

爆豪「ハッ、カンケーねーよ、だからひつつくな鬱陶しい！」

笑顔が咲き誇るなか

爆豪「おい・・・デクはどうしたんだ？救出成功なら交戦して退けたってことだろ？」

ピタリ

空気が止まる

相澤「はあ、お前は変なところで冷静だな。」

—————

緑谷「オールマイト、貴方と話せてよかった。やはり僕の進む道は間違っていないかつ

た・・・」ブツブツ

連行中のパトカーに乗せられ、周りを警戒のためにプロヒーローを乗せたパトカーが護衛するなか緑谷出久の瞳は益々その狂気を増していた

—————

相澤「……つてのがさつきあつた話だ。」

観念した相澤は先程の顛末を話した。

尾白「捕まったって……」

上鳴「へへーん、散々俺らに威張りまくつてたクセにすぐに捕まるとかダセエな！」

耳郎「バカ！少しは頭を使え。おかしいと思わないの？」

八百万「今回といい、前回の襲撃といい、彼等の作戦は詰めは甘いですが決して無計画ではありませんでした。」

それなのに今回の体育祭観戦は些かりスクが高すぎるような……。」

蛙水「ええ……あっさりなにもせずに連れていかれたというのは逆に不気味ね。」

障子「なにか狙いがあるの？」

常闇「未知なる恐怖……」

相澤「まあここで悩んでもしょうがない、現に奴は今、他のプロヒーロー数名で警察に連行中だ。すぐにどうすることもできまい。」

相澤は話に区切りをつける

相澤「今は・・・一人の教師としてお前らが無事に体育祭を終えられる事を嬉しく思う。」

さあ閉会式だ。最後までビシツとしてけよ。」

「「「「「ハイッ！」「」「」」

「「「「「ハイッ！」「」「」」

オールマイト「轟少年、おめでとう！」

轟「ありがとうございます。」

閉会式のメダル授与にてオールマイトの手で銀のメダルをかけられながら話す轟

オールマイト「君の家庭のことは深くは聞かない。しかし一つだけ言えるのは、良い顔になった。君はもつともつと強くなれる。」

轟は静かに頭を下げた

オールマイト「爆豪少年、有言実行とは流石だな。」

爆豪「ケツ、あいつに焚き付けられてとつたみたいでムカつくぜ。もともと俺が一番になるのは確定事項だったわ！」

金のメダルをかけられながらも不遜に言い放つ爆豪

オールマイト「君は自らの手で自らの運命を掴んだんだ。これはもつと誇って良いこ

とだよ！」

オールマイトは笑顔で返す

オールマイト「さあ、皆さん！今日は彼らだった。しかし、皆がここに立つ可能性を秘めているのは明白だろう！」

次代の芽は確実に育ってきている！そんな彼らに称賛と今日一日の労いを込めてこの言葉で締めたいと思います！ご唱和ください、セーの、」

「Plus U「お疲れ様でした!!」

盛大にずっこけた締め挨拶だった。

しかし終わった時皆の顔に浮かんだのは笑顔だった。

そして誰も気が付かなかったオールマイトの大声に紛れて遠くで何かが発した音を……

生贄の抱く爆弾

通常罨

相手フィールド上にアドバンス召喚されたモンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールド上の表側表示のモンスターをすべて破壊し相手ライフに1000ダメージを与える。

—————

翌日

体育祭の振替で休日となった校舎に集まった教師一同は愕然とした

〔轟冬美救出作戦報告書〕

対象の救出：成功

負傷者：数名

行方不明者：1名

行方不明者名：エンデヴアー

戦いはまだ何も終わっていないかった・・・

## グランドクロス

「こちらは爆発のあった現場付近です。

ヴィランを乗せたパトカーが爆発し炎上、連行をサポートしていたプロヒーロー達や警察官が大怪我を負った模様です。

現在も現場では火災が起きておりヒーロー、消防等が消火作業中の模様です。」

—————

??? 「おーおー、派手にやったな。」「くそ地味だな。」

緑谷 「協力ありがとうね。トウワイスさん。」

突然の出来事に喧騒とざわめきが集まる中、それを高みの見物とばかりにビルの上から眺める者達があった

トウワイス 「まさか増やした片割れに爆弾仕込むなんて、ブツ飛んでるな今時のガキは・・・」「まだまだ甘いな！」

緑谷 「いやー、それほどでも。」

トウワイス 「褒めてないからな!？」

ハハハと笑いながら緑谷は片耳に入れていたワイヤレスイヤホンを抜き地面に落とし踏みつけた

緑谷「オールマイト、貴方のやり方では遅すぎる。それまでにいくつの無念が増えていくか貴方はわかっていない。」

トウワイス「……………」

暗いしかし強い決意を秘めた言葉にしばしの沈黙が流れる

緑谷「さて、感傷的になるのはここまでにしますかね。」

トウワイス「そうだな。」「もつとやれよ。」

緑谷「さて今回の報酬の支払いは……僕もいろいろな裏の人達に仕事を頼んだりしてきましたけどギャンブルの代打ち報酬にしてくるのあなただけですよ。」

トウワイス「いいじゃねえか。下手に金もらって自分で負けてパーにするよかお前に預けたほうが俺も楽しいし、金も入るしウハウハだろ?」「大損だぜ!」

こうして二人は姿を消した。

後日路地裏に魂を抜かれたようなチンピラが複数発見された

—————

体育祭終了直後

エンデヴァーにより処刑を阻まれさらに多数のサイドキックの出現によりピンチに

陥った二人は

光の仮面「ほ……本当に来たんだな。」

闇の仮面「くそ、プラン2に移行だ。行くぞ！光の仮面！」

すぐさま背を向け逃走を開始

エンデヴァー「ぬう、逃がすか！」

「エンデヴァーさん！」

エンデヴァー「お前とお前は俺のサポートとしてついてこい、残りは娘の保護及び下の奴等を連行してこの建物より避難しろ。相手が何をしてくようが俺が焼きつくしてくれるわ！」

サイドキック達に手早く指示をだし追跡に向かうエンデヴァー

二人を追いだどり着いた先は屋上だった。

エンデヴァー「もう逃げ場はないぞ！貴様等の用心棒達も無力化した。俺の家族を危険な目に会わせおつて、許さんぞ！覚悟しろ！」

光の仮面「に……逃げ場？何をいつているんだな、お前らの方が俺等に誘き寄せられたんだな！」

闇の仮面「やはり緑谷様は偉大だ。この事まで見越して私たちにこれを分け与えてく



れたのだ！」

闇の仮面の手には一枚のカードが握られていた。

闇の仮面「感情を支配する闇の雄よ！今こそ現世を闊歩せよ！そして我らの牙となりて敵を穿て！」

かざされたカードから現れるは巨大な怪物

三面の顔を有しそれぞれが異なった感情を表している、しかしその裏にはすべて狂気が渦巻いており鋭く尖った爪と相まって並みの人間なら恐怖で立ちすくんでしまうおぞましさだった

仮面魔獣デス・ガーディウス 星8 闇属性 悪魔族

攻撃力3300

守備力2500

「ヴオオオオオオオッ」

戦意を剥き出しにした咆哮が響く

闇の仮面「さあ、我らに仇なす者を蹴散らせ！」

光の仮面「み……皆殺しなんだな！」

ドシンツドシンツ

怪物は二人の命令を聞き急接近し、爪を振るう

エンデヴァー「避ける！」

バツ

ズガンツ バキバキバキツ

すんでのところで避けたエンデヴァー達だが怪物の力は予想以上に強くコンクリートに亀裂が走るほどだった

「ぐあっ！」

「くうっ！」

反応が少し遅れたサイドキック達は直撃こそ免れたがその衝撃の余波をくらってしまっ  
まう

そこにチャンスとばかりに怪物が追撃にでようとするとするも・・・

エンデヴァー「ぬうん！」 ビュン

エンデヴァーが炎でできた槍を投げ牽制する。

怪物は見た目の割りに機敏でありすぐに後ろに引き回避した。

「エンデヴァーさん・・・」

「申し訳ありません・・・」

エンデヴァー「お前らは一度退け！ここは俺が一人ですごうにかする！」  
闇の仮面「みすみす逃すわけないだろう！」

光の仮面「や・・・やっちまえ！」

手負いで動きが鈍くなった二人めがけ突撃してくる

エンデヴァー「早く行け！ハアッ！」

火の壁を作りながら怒鳴るエンデヴァー

「くっ！」

「すぐ援軍をつれてきます！」

これ以上は足手まといになると察した二人はすぐにビルから脱出し先に退避していたグループと合流する

ことの次第を話している途中

ボオオオオツ

突然ビルが炎上し始めた

恐らくエンデヴァーの戦闘によるものだろう、

幸い近くに他の建物はなく延焼の心配はなかったが鎮火し、燃え落ちた建物にエンデヴァーやヴィラン2人の姿はどこにも見当たらなかった・・・

—————

現場に参加したエンデヴァーのサイドキック達の証言を聞き教師一同は険しい顔つきになっていた。

「我々としてはまだエンデヴァーさんがやられてしまったとは考えておりません。

なにか正確なことがわかるまで捜査を独自で進める方針です。」

根津「我々もそう思うよ。彼ほどの男がそうやすやすとやられるとは考えにくい。微

力ながらこちらにも協力させてもらうよ。」

サイドキック達は礼を告げた。

報告会終了後

殆どのヒーロー達が出払った職員室で

根津「君の負担がますます増えてしまうね……。」

相澤「……。」

エンデヴァーが敵との戦闘で行方不明、

前回の緑谷出久寝返りと違いこの事実は隠しようがなく、社会に大きな不安感を与えてしまうのは必至であった。

それを最小限に抑えるにはやはりNo. 1ヒーロー《オールマイト》の力を世間に見せつけて不安を和らげるしかないだろう。

それ以外にも先のヴィラン連行パトカー爆発事件の影響で有名どころのヒーロー達

が何名か傷つき戦線離脱を余儀なくされてしまっている。

人々がオールマイトに寄せる信頼と期待は今のオールマイトの体を蝕んでいくだろう

オールマイト「それでもやるしかありません！ 奴との決着も緑谷少年の心を救うこともまだできていませんから。」ニカッ

ガリガリの骸骨状態で元気に笑って答えて見せた

相澤（さあ、次は何を仕掛けて来る気だ？ 敵連合、緑谷出久！）

—————

雄英体育祭の数日後

敵連合のアジトであるバーに呼び出された緑谷は

緑谷「それで・・・用事は何？」コトツ

死柄木「まあ、焦んなよ。それよりもお前なんかまた面白そうな事してるみたいじゃん？」コトツ

緑谷「別に・・・僕の野望達成に向けての下準備さ。君たちに迷惑をかけるつもりはないよ。」コトツ

死柄木「どうだか？ まあ、お願いした仕事さえしつかりやってくれてりや今のところは構わねえが、へまするなよ。」コトツ

緑谷「大丈夫だよ。はい、チェックメイト。」コトリ

死柄木「待った！」

緑谷「待ったは10回までだろ？」

死柄木は怒りながらカウンターでグラスを拭いていた黒霧にお酒のおかわりを注文した。

緑谷「それで？チェスの相手に僕を呼んだわけじゃないよね？」

そう言われて死柄木は一枚の写真を手渡す。

そこに写っていたのは、

緑谷「これは・・・ヒーロー殺し、ステイン、じゃないか!？」

死柄木「そいつを始末してほしい。」

話を聞くと緑谷が雄英体育祭でいろいろやっている頃、死柄木達は連合の強化を目的にステインに接触し加入を求めたが却下されたのだという。

緑谷「それで腹いせについてことね・・・。」

死柄木「それだけじゃないぜ。あいつの存在はこれから大きくなる予定の俺たちにとって障害になるだろうからな、先に取り除くのさ。」

死柄木なりにいろいろ考えているらしく、緑谷は少し安心する。

黒霧「それでこれが今回の報酬です。」

緑谷「!!・・・いいよ。引き受けたよ。ただし、協力はしてよね。」

死柄木「ああ、いつも通り出きる範囲の手助けはしてやるよ！主に黒霧が。」

緑谷はその言葉を聞き終えるとバーを後にした。

歯車はもう止まらない、一度狂ったリズムは戻ることなくその歪さを増しやがて破壊に至る。

そしてそれらはヒーロー殺しという点でぶつかり合う。

## 閃刀空域ーエリアゼロ

死柄木からの情報により保須市へとやって来た緑谷。

緑谷（さて、どうしたもんかね・・・。）

本来ステインは神出鬼没であり、最後に黒霧が転送したのが保須市であって彼がまだここに留まっているかの確証はない。

更に・・・

緑谷（雄英はそろそろ職場体験か・・・。）

雄英高校のヒーロー科は先の体育祭での結果を元にそれぞれがプロヒーロー事務所に職場体験に来ている。

この保須市にもいくつかヒーロー事務所があり、更に近隣地区にもそれなりに名の知れたヒーロー事務所がある。

緑谷（誰とも会わなけりやいいけどね・・・）

そろそろ自分の情報が一部のプロヒーロー達に知らされている可能性がある以上慎重な調査を強いられるだろう。



しかし次の日

【ヒーロー殺し現る!!】

闇緑谷『新聞の見出しにでかでかど載ったもんだなあ・・・。』

しかし、これでヒーロー殺しがまだこの町に潜んでいることは確定した。後はどうするか？

緑谷は深く思考を走らせる

緑谷（ん・・・？襲撃されたヒーローはインゲニウム!?!）

—————

ピッピッピッ

機械音しか聞こえない病室のベットにプロヒーロー・インゲニウムはいた

飯田「兄さん・・・。」

職場体験で兄の事務所に来て、顔馴染みのサイドック達に引率されパトロール中に入ってきた一報

あんなに憧れた兄が凶刃の前に倒れた。

なんとか一命は取り留めたが・・・

「残念ですが・・・下半身に麻痺が残ってしまうでしょう。」

医師から告げられた残酷な宣告

飯田（ヒーロー・インゲニウムは速さが信条なのに・・・その足が動かないなんて！）  
飯田は拳を握りしめた

飯田（許さない！許さないぞ！ヒーロー殺し！）

その瞳にはどす黒いエネルギーが満ち溢れていた。

—————

ヒーロー・インゲニウムが倒された事により危機感の高まりを感じたプロヒーロー達は先の雄英高校を襲撃した敵連合との関係も視野に入れ合同で捜索を決行すべく保須市に集まっていた。

そしてその中には飯田の姿があった。

本来まだ仮免すら取得していない学生を参加させるなどあり得ない話だが、彼の熱意と被害者が彼の兄という事で心情を察したヒーロー達が大人から絶対離れない事を条件に参加が認められたのだ。

「君の心中を我々が知ることはできない、しかし君もヒーローを目指すなら邪な思いを捨てて参加してほしい。君の私利私欲を満たすために参加させたわけではないのだからね。」

飯田「はい・・・。」

ヒーロー達が釘を刺すが飯田の心から復讐の火が消えることはなかった。

緑谷（ヒーロー達が集まっているな。）

闇緑谷「ははっ、丁度良いな。これだけ役立たずが集まったんだ。盛大なパーティーを催さなくちゃ損つてもんだぜ。」

緑谷は携帯を取り出す。

闇緑谷「もしもし黒霧、ちよつと協力してほしいんだが……。」

とある山奥

轟「ハアツ……ハアツ……。」

グラントリノ「よく頑張ったな、小僧。」

既に引退したヒーロー・グラントリノ

彼の元に職場体験に来ていた彼は初日から超スパルタ特訓を受け今ようやくその過程を終了したところだった。

轟「まだだ！俺は……俺はもつと強くならなくちゃいけないんだ！」

グラントリノ「ふん、そんなへ口へ口で何が出る？そんな焦らんでも明日から次のステツプへ連れていってやるわい。」

職場体験らしく・・・敵退治にな！」

緑谷に借りを返さんと息巻く轟を制し告げるグラントリノ

しかし、そこには新たな戦いの足音が迫っていた。

—————

搜索作戦決行当日

保須市は今、大混乱に陥っていた

「大変です！町を正体不明の怪物が暴れまわってます。その数三体！」

この一報により作戦は頓挫、そして

飯田「あれは・・・脳無！」

プロヒーロー達はオールマイトと互角に渡り合った敵連合の生物兵器「脳無」との戦闘を余儀なくされた。

飯田「なぜ奴がここに？やはりヒーロー殺しと敵連合は繋がっているのか!？」

ヒーロー達と共に一般市民を避難させていた飯田だかこの混乱によりはぐれて一人になってしまった。

そしてそこで出会ってしまった。

圧倒的な死の匂いを振り撒く存在に、

己の兄の未来を切り刻んだ元凶に、

飯田「ヒーロー殺し!!」

ステイン「ハアツ・・・全く今日は騒がしいな。」

その目は再び復讐という思念に囚われた。

—————

緑谷「始まったね。」

闇緑谷『ああ、これで倒してくれば恩の字だし少しでもダメージ与えてくれればもうけもんだ。』

ビルの上で飯田とステインの戦いを見つめる緑谷

プロヒーロー達では逮捕されてしまい始末することができない。

そこで復讐に狂った飯田に目を付けた緑谷は黒霧に脳無を要請

プロヒーロー達と脳無を戦わせ敵連合との関係を見せつけ、また混乱に乗じて飯田とステインを鉢合わせにさせたのだ。

飯田が勢い余って始末すればそれでよし、ダメでも飯田に止めを刺した後の一息ついたところを不意打ちすれば良い。



互角のように錯覚してしまう攻防、しかし

飯田「ぐあっ！」

ステイン「ハアツ・・・少し時間が掛かったが、所詮はガキだ。」

錯覚してしまったからこそ、深追いして無闇に攻め急ぎ過ぎた飯田、対して海千山千のステインは自身の体の違和感を感じるや攻めかたをカウンター狙いに変更

まんまと術中にはまり切りつけられてしまった飯田

飯田「グウウ、まだまだ、この程度の傷で俺は止まらんぞ！」

ステイン「いや終わりだ。」ペロツ

ガクンツ

飯田「なっ！」

ドサツ

どういふわけか飯田の体は完全に麻痺して動かなくなってしまった。

ステイン「ハアツ・・・お前のようなガキまでもが汚れた正義に毒されている。由々しき事態だ。」

飯田「なん・・・だと・・・！」

ステイン「この前の奴もそうだ。効率？チームプレイ？ヒーローが弱者を助けることに全神経を使わずしてどうする？弱者が群れた所で救えるものなどない！」

飯田「黙れ！インゲニウムを・・・兄さんを侮辱するな!!」

ステインの言葉に激高した飯田は必死にもがくも・・・

ステイン「ハアツ・・・そうか、お前はあの偽物の弟か。しかし今のお前はその兄の下だ、只の復讐に囚われた獣だ。せめてもの慈悲だ、一思いに救済を授けよう。」

ステインは刃を取り出し止めを刺さんと歩み寄る。

飯田（くそ、動け！このままにも成さずに死ぬわけには・・・。兄さんの仇をとるまでは！）

—————

ドガンッ！ バゴン！

街中で暴れまわる脳無を確保する為にやって来たプロヒーロー達だか、オールマイトが苦戦しただけあり数の力でもギリギリの攻防を強いられていた。

「グハッ!？」

そんな中一人、また一人と傷つき倒れていくヒーロー達なんとか戦いながら回収出来て死者こそいないがそれも時間の問題のように思われた。

「うわああああ!？」

そして今まさに傷つき倒れたプロヒーローに止めを刺そうと拳を振り上げた脳無



そこに

シュイイイン ドガッ!

グラントリノ「ほれ! 若いの! しっかりせんかい!」

—————

パキパキパキツ!

飯田を庇うように氷の壁が出現する

ステイン「ムッ!」

ボウッ!

そして氷の壁で出来た死角から炎撃が飛んできた

轟「やらせねえ、俺は・・・皆を守るって決めたんだ。もう迷わねえ!」

飯田「轟君!?!」

ステイン「ほう・・・。」

—————

緑谷「轟君まで来たか、これはまだまだ見届ける価値がありそうだね。」

嬉々とした表情の緑谷

戦いは加速する。

己の意志を貫き明日を手に入れるのは誰か・・・。

## ヒーローアライブ

ステイン「ハアツ・・・今日は来客が多いな。」

轟「飯田、大丈夫か？」

一旦距離をとるステイン、そしてその隙にクラスメイトを守るように前に立つ轟、しかし・・・

飯田「轟君・・・邪魔をしないでくれ・・・！」

轟「なに？」

倒れている飯田は唸るように拒絶の意思を示す

飯田「これは僕の戦いだ！僕が・・・インゲニウムの名を守る為の戦いなんだ！君は関係ない！」

ステイン「それこそが偽物の証・・・！」

轟が顔を向けるとゆらりと構えるステインの姿があつた

轟「くっ！」

ステイン「名を守る？英雄が守るべきはまずは弱者でなくてはならん！己の保身を第一に掲げるなど愚かなり！」

ガガガガッ

轟が氷撃を放つも

ステイン「甘い！」

刃で切りつけられ破壊されていく

が・・・

ステイン（むう・・・やはりいつもより動きが鈍い。）

轟の炎と氷のコンビネーション攻撃を前に思考的には難なく避け続けてるはずがやはり謎の違和感によりギリギリになり上手く反撃に転じれずにいた

飯田「轟君！ もうやめてくれ！ 君が危険に晒される必要はない、これは僕の戦「ふざけたこというんじゃない！」ツ!？」

轟「飯田、お前はこの前迄の俺と同じだ。自分に巣食う闇に囚われ大切なもんを見落としている。」

互いに決定打を撃てずにたまらず距離をとるステイン

轟「俺もまだまだ未熟者だ、決して胸を張って人様に言えるもんでもねえ、でも俺は覚悟を決めたぞ。」

ステインが再び凶刃を手に飛びかかる

ステイン「シッ！」

轟「お前は何になりたいたいんだ！なりてえもんちゃんに見ろ！目を逸らすな！！」  
轟が氷撃を繰り出すも

轟「なに!？」

ステインはビルの壁を使い立体的動きで轟に迫る

ステイン「確かにお前の個性は強力だ・・ハアツ、だが動きが大雑把すぎる。」

どれだけ強力な一撃を放とうとも初動でどこに撃つかわかれれば脅威はない

ここに来てても戦いの経験値が立ち塞がった

轟「ッ!？」

轟も迎撃に炎を撃ち出そうとするも

ステイン（遅いッ!）

—————

ビルの上で高みの見物を決め込んでいた緑谷だが

緑谷「頑張るね。さすが最高傑作君！そんな君にボーナスチャンスだ。」

緑谷が二枚のカードをかざす

天使のサイコロ

速攻魔法

サイコロを一回振る。自分フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで出た目の数×100アップする

悪魔のサイコロ 通常罠

サイコロを一回振る。相手フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで出た目の数×100ダウンする

ボウン

エーイ ポイツ

ケケケ ポイツ

コロコロ ピタッ

かわいらしい天使と悪魔が手に持っているサイコロを振る

そして指し示した運命は

—————

ターボヒーロー・インゲニウム

僕の兄であり憧れだ。

自らの個性をフルに活用し、市民からの評判もよく、また余り陽の目を浴びない個性の人間を採用し場面に応じて最大限の効果を発揮させた。

柔軟な思考、分け隔てない態度、人望を集める人柄

オールマイトやエンデヴァー等のヒーローと比べると格下と思われるかもしれないが間違いないく僕の中でNo. 1ヒーローだった

そんな兄はこんな顔をして人を救っていただろうか？

轟君は言っていた

覚悟を決めた、と

姉を囚われ戦いを強要され、今度は父が行方不明、

それでも立ち向かっている。

ヒーローとして、

助けを求める人の為に、

ッ！

そうだ、助けを求めている人が今目の前にいるじゃないか！

こんな時憧れの人はどうしていた？

そんなことは、

とつくの昔に理解している・・・！

DRRRRRRRRR！

「……………」

ステインが壁を蹴り轟に刃を振るおうとした瞬間、  
ステイン「ぐう!？」

謎の違和感が更にまし空中姿勢が維持できなくなる。

轟「ウオオオオオオー！」

ボウツ！

炎の波がステインを襲った

ボカンツ！

勢いのままに壁に叩きつけられるステイン

ステイン「まだだ！まだ倒れる訳にはいかん！我が宿願、英雄回帰を実現するま  
で……ッ!？」

「レシプロ……バースト!!」

ドゴツ！

壁に叩きつけられて尚執念を見せるステインへ復活した飯田がフルスロットルで勢  
いのまま蹴りを見舞い駄目押しを食らわせる

ステイン「ガハッ！」



ドサツ

屋上で一部始終を観ていた緑谷

ヒヨイ ジャーナー

ヒヨイ アバヨ

足元に転がる2つの「6」を出していたサイコロを拾い天使と悪魔は消えていった  
緑谷「……………」

気付けば戦いの音は静まりを見せ始め、パトカーの近く音が聞こえてきていた。

激闘を終えた二人の元にその後すぐプロヒーロー達がやって来た

勝手な行動をしたということでグラントリノやプロヒーロー達に軽くお叱りを受ける二人だったが巷で話題の「ヒーロー殺し」が伸びているとなつて対応に追われてしまっていた

プロヒーロー達が対応に追われるなか轟と飯田は壁を背に座り込んでしまった  
轟「……………」

未だ戦いの余韻冷めやらぬ思考の中先程の戦いに思いを馳せ

飯田「轟君」

ようとしたのもつかの間、隣にいた飯田に話しかけられた

飯田「礼を言わせてくれ、僕は・・・危うく兄さんの名前を守るところか地に落とし  
てしまうところだった」

轟「・・・別にそんな大層なこととはしてねえよ。ただ俺の知ってるインゲニウムはそ  
んな顔していなかったってことをお前に気づいてほしかっただけだ。」

戦いの時に見せていた激情は鳴りを潜め、普段のクールな印象に戻った轟が話す  
「おい、小僧ども。救急車で病院いくぞ。」

グラントリノの声が聞こえ立ち上がろうとするも

轟「・・・ツ!?」フラッ

飯田「おっと、」ガシッ

生死をかけた戦いから緊張の糸が切れふらつく轟を飯田は支えた

轟「すまねえ。」

飯田「構わないさ、それに・・・困ってる人を助けるのがヒーローだろ？」

爽やかな笑顔を見せる飯田に連れて轟も笑みを浮かべた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うひいー、これがヒーロー殺しか。気絶しているとはいえおっかねえな。」  
「おい、プロヒーローがそんなんでどうすんだよ……。」

プロヒーロー二人が拘束されているステインの見張りをしているところに  
「お疲れ様です！」

警察官が現れた。

「おお、お巡りさん。」

「すぐに別のパトカーも到着しますので先行して敵の搬送にお伺いしました。」  
「ちようどよかった。気絶している今の内に運んじやつてください。」

「ハッ、おい連れていくぞ。」

現れた3人の警察官はステインをパトカーに乗せて走り去っていった。

その後ステインを乗せたパトカーは数時間行方不明となる、  
搜索後発見された。パトカーには警察官の姿はなく、白目を向き、意識不明のステイン  
が発見された。

—————

闇緑谷『睨んだ通り、素晴らしい魂だ。これも最良の贄となるだろう。』

月下で一枚のカードを眺め少年は笑みを浮かべた

緑谷「もうすぐだ、審判の時は近付いている。

ステイン、教えてあげるよ。」

闇緑谷『今、この世界に必要なのは真の英雄ではない。』

『神、だ。』

## 連成する振動

巷を騒がせていたステイン逮捕のニュースは瞬く間に世間に波及した

彼の思想、英雄回帰という現在の超常社会への警告は世間に一石投じる形となり、その言葉に秘められた熱意に感化されたヴィラン達は彼が一員だったとされる敵連合へとその足を向けた。

闇は集う、やがて噴火の時を待つ溶岩の様に・・・

—————  
ここはとある大型ショッピングモール

休日と言うこともあり、多くの人でごった返す中、エントランスのベンチに一人の少年が座っていた。

少年は帽子を深く被り、スマホを眺めていた。

数十分後・・・

ガチャン、  
ドサツ

男の横にアタッシユケースを持った別の男が間にアタッシユケースを乱暴に置き隣に座る

男は黒いパーカーを羽織りフードを目深に被っていた。

男はスマホを取り出し、耳に当てた。

「とりあえずはご苦労だったな、緑谷。」

電話に耳を当てたまま目線すら向けず隣に座る少年・緑谷出久に話かけた  
「どうも。」

目線をスマホをに向けアプリをしながら緑谷は隣に座った死柄木に返した

死柄木「けどな・・・俺としては納得していないぜ。

俺は始末しろと言ったんだがな。」

死柄木が目だけを動かし緑谷を責める

緑谷「ステインのネームバリューはまだ利用価値がある、それを最大限利用するためには今の状態がベストさ。」

現に敵連合に入りたいって言う人、来てない？」

飄々とした口調で返す緑谷

死柄木「ああ、精神破綻のクソガキと礼儀知らずの根暗そうな奴が来やがったよ。」

緑谷「ハハツ、いいんじゃない？これから世界をひっくり返そうとするんだから、それくらい振り切れた人間は必要だよ。それに・・・ある程度認めてくれたから持つてきてくれたんだろ？」

数瞬の後舌打ちが聞こえ

死柄木「ああ、先生が合格点出しちゃったからな、しぶしぶ持つてきてやったよ。：

まあ、あんなイカれた奴等と一緒にいたくないからちようどよかったよ。」

やれやれといった感じで話す死柄木

緑谷「あれ？散々なこと言っておいて結局手元におくんだ？」

死柄木「茶花してんじやねえ、この前の有象無象よりは使えるからとりあえず置いてやってるだけだ、必要ないと感じたらその場で塵にしてゴミ箱行きだ。」

緑谷が半笑いで話せば語気を強めて死柄木が返す。

緑谷「でもこれで本物の敵達は気づくはずさ、この平凡な日常を崩すことは容易いと



いうことを、たった一手を打つだけで盤面がすべてひっくり返えつてしまう危うさが潜んでいることを。」

緑谷の言葉に死柄木は行き交う人々に目線を向けた

誰も彼もが幸せそうな顔をして歩いている。

その幸せの下に犠牲にされた者の声から目をそらし、其処に蓋をしている英雄様を無責任に讃え、当たり前前の様に平和を貪る笑顔達が堪らなく醜く見えた

死柄木「・・・暫くしたらまたドでかい事を起こすから、また参加してもらおう。決まり次第連絡するから遊ぶのは構わねえが仕事も疎かにするなよ。」

緑谷「もちろん。」

死柄木は携帯をしまうとアタツシケースを置いたまま去っていった。

緑谷「さてと、」

緑谷もスマホをしまうとアタツシケースを持ちベンチから立ち上がり歩きだした。

ドンツ

緑谷「おっと、」

—————

葉隠「ねえ尾白君。次はあつちのほう見に行こうよ！」

尾白「ちよっと、あまりはしゃぐと転んじやうよ葉隠さん。」

この日、雄英高校Ⅰ—Aは轟と爆豪を除き全員で来る夏休みの林間合宿に向けての買出しにシヨツピングモールに訪れていた。

それぞれ目的がバラバラのため時間を決めての自由行動となり、買物に向かうとしていた尾白を半強制的に葉隠が連れ出し、現在は二人でシヨツピングとなっていた。

尾白が連れ出される所を目撃した峰田が羨望の余り血涙を流していた

こうして葉隠に連れ回される形でシヨツピングモールを歩き回る二人、すると

ドンッ

「おっと」

二人の目の前で人混みで接触し後ろに倒れる少年の姿が映った

「おう、ボウズ。すまねえな。」

「いえ、こちらこそ申し訳ありません。」

幸い喧嘩等のトラブルに発展する気配はなかったがなにより目を引いたのはその風貌

ぶつかつた拍子に落ちた帽子の下から現れたのはみどりのボサボサ頭

一瞬、二人は息を飲んだ

まさか、

尾白「葉隠さん、今の・・・。」

葉隠「うん、私も思った。」

二人の脳裏によぎったのはU S Jで自分達を裏切り、体育祭で悪魔のようなゲームを主催した同世代のヴィランだった。

尾白「葉隠さん。ここはひとまずみんなに連絡してプロヒーローを「尾白くん。」えっ？」

葉隠「尾行しよう！」

—————

とある病院

轟は休日一人ある人物のお見舞いに来ていた

それは

轟「母さん。」

自分の左目に消えることのない傷をつけた張本人にして自分という命を産んでくれた唯一無二の存在

体育祭以降

轟は週末になると暇を見つけては母のお見舞いに訪れる様になっていた。

十年という空白を埋める為に、己の原点をもう二度と曇らせないように、そして……  
父が行方不明という言い様のない不安を紛らすために

「焦凍……。今日も来てくれたのね。」

まだ慣れぬ柔らかな笑みで迎えられて轟は気恥ずかしい顔で病室に入った

初めてお見舞いに行ったあの日、己の胸の丈をぶつけた

苦しかったこと

悲しかったこと

体育祭で浮かんだ言葉のこと

……父が行方不明になったこと

余りに酷な事をしてしまったと思う

でも、

そうしなければいつまでもこの鎖は断ち切れない

更に前に進めない気がした

姉と三人で話し、泣き、感情をぶつけ合い気付いた

結局、家族なんだと

母はどれだけ離れていようとも母だし

俺も姉さんも結局はこの人の子なんだ

わかりあえて、でもどっか違う、時々素直になれなかったりする  
そして改めて気付いた。

今のちっぽけな俺の手で精一杯守らなくてはならないものが

## 急転直下

病室で息子と話す一時ひととき

「焦凍、テストはどうだった？」

轟「合格した。これで補習なしで林間合宿に臨めるよ。」

他愛のない会話が続いていく。

「昨年、エジプトから発掘された石盤達がついに日本上陸、スゴロクコーポレーション  
プレゼンツ「古代エジプト探訪く古代の儀式と精霊く」は〇〇美術館で・・・」

テレビから流れるコマーシャル

何気ない時間だが失われた時間を取り戻す二人にとってはなによりも尊い時間であつた。

—————

あの日・・・

息子の口から出た贖罪の言葉

それは本来私が言わなければならない言葉

そして・・・

覚悟はしているつもりだった・・・

華々しくもてはやされるヒーローだがその中身は別に不死身でも何でもない  
傷つくし、病にもかかる。

いくら強個性のあの人とはいえ

必ずしも命の危険に晒されないわけではないことを・・・

目の前で懺悔の様を声を絞り出しながら話す息子と堪えきれず涙を流す娘

私の覚悟は決まった

今更なんて思われてもかまわない

どの口がと非難されてもかまわない

でも・・・でも・・・

私は、この子達の母として

プロヒーローのあの人の妻として、

この子達の、この家族の

平穏を取り戻さなくちゃいけない。

あの人がいつ帰ってきてても、おかえりって言える様に

それが自己満足だと蔑まれようとも

罪滅ぼしだと信じて・・・

—————

緑谷「……………」

葉隠「今のところ怪しい動きはないね。」

尾白「ねえ、葉隠さん。やっぱりプロヒーローに連絡したほうが……………」

シヨツピングモールにて絶賛尾行中の二人

尾白は渋っているが

葉隠「尾白くん！まだあの子が敵と確定して緑谷出久いない以上無駄に騒ぎを起こすのは良く

ないよ。」



葉隠の言っている事もあながち間違いではなくヒーローはあくまで個性を使用し犯罪を犯す敵が出現して始めて出動要請がかかる。

むやみに 個性を使用し疑わしきを罰していけばそれこそ敵と変わらない。

だからこそ抑止力として位置付け、何かあっても鎮圧迄で逮捕や取調は警察の権限に委ねて差別化を計っているのだ

だから凶悪な敵がいるかもしれないという理由だけではもしかしたら出動を見送られる可能性がある

葉隠「だからこそ私達ヒーロー科の学生の出番だよ！戦闘行為をするわけじゃないし何かあったらすぐプロヒーロー呼んで避難誘導の手伝いするだけだから大丈夫だよ。」

グツとサムズアツプ・・・したような気がする葉隠

それを聞いてため息をついた尾白

尾白「わかったよ。でも俺がやばいつて感じたらすぐ無理矢理でも連れて逃げるからね。」

葉隠「うん！頼りにしてるぜ、尾白くん！」

こうして緑谷と思わしき人物の尾行続いていく二人

しかし、二人の懸念は杞憂に思われるほど特に動きはなく、少年はアタツシユケース片手にウインドウショッピングに勤しむ。

尾白「・・・特になにもしないね。」

葉隠「ムムム、やっぱり人違いだったのかな。」

二人はひとまず物陰に退き、作戦会議を行っていた

尾白「まあ、なにもないことはいいいことだけだね・・・てかさろそろ戻らないと集合時間間に合わなくなっちゃうよ。」

葉隠「ええっ!?もうそんな時間?」

買物物は概ね終了しているので実行していた尾行だったがこれ以上はクラスメイトに迷惑になってしまう。

葉隠「じゃあ、戻る前にお花摘んでくるからちよつと待ってて尾白くん。」

そう言つて葉隠は御手洗いの方へ歩いていった。

尾白「・・・元気だな、葉隠さん。」

「まあ、そこが彼女の良さでもあるんだけどね。」

尾白「ツ!」

突然自分の独り言に入ってきた声

聞こえきた方へ振り向くと

尾白「緑谷・・・出久・・・。」

緑谷「フフツ、元クラスメイトなんだからフルネームで呼ばなくてもいいよ。」

先程思い過ぎだったと切り捨てた疑問が自ら最悪の答えを突きつけにやって来た

葉隠「ふう、お待たせ尾白くん。それじゃ皆の所に・・・あれ？尾白くん？」

—————

飯田「さて、みんな集合時間になったわけだが全員いるかい？」

邪魔にならぬようエントランスフロアの端に集まり点呼をとる——A組一同  
すると

障子「尾白と葉隠がいないな。」

瀬呂「ありや、珍しくね？」

峰田「なんだって—————!!」

飯田「フム、羽を伸ばすのは大切だが時間を守れなくてわ・・・」

腕を組みやれやれといった感じのため息をつく飯田すると、

峰田「あ・・・あいつらめ、まさか公衆の面前でイチャつくだけに飽きたらず、時間

を忘れるくらい甘い時間を過ごしてるとのか!? 許せん! 今ごろ尾白の前のしつぽグハツ!」

葉隠が尾白を連れ出す所を一部始終目撃していた峰田が暴走しかけたが蛙水の強力な舌ビンタにより鎮圧された

そこに

「ごめん、みんなー」

葉隠が足早に現れた

飯田「葉隠さん。たまの休日を楽しむことも重要だがもつと雄英生としての自覚を持つてだね・・・」

葉隠「わーっごめん、ごめん!」

飯田の長そうな説教が始まりそうなのを察し喰い気味に謝り倒す葉隠だったが

麗日「あれ、そういうえば尾白くんは?

一緒におらんかったっけ?」

そこで他も尾白がない事に気付く

葉隠「そうだ、尾白くん先にこつちに来てない? 御手洗い行って帰ってきたら居なく

なっていたんだよね。」

砂糖「いやこつちにもまだ来ていないが」

青山「彼がレディーを置いていくなんて美しくない事するとは思えないけどね☆  
もちろん僕もレディーを大切に「くっ」

突然携帯の着メロが鳴り響く

上鳴「おっと、俺だ。」

つて噂をすれば・・・つと、もしもし尾白？なにしてんだよ。葉隠もうこつちにいるしあとお前だけ・・・はあ!?ちよっ・・・ちよつと待て、おい。」

耳郎「どうしたんだ？」

八百万「なにかあったのでしょうか？様子がおかしいですわ・・・」

上鳴「おい、おいつてば！

・・・チクシヨウ！」

瀬呂「なんだ？どうかしたのか？」

上鳴は忌々しげに通話状態のスマホのスピーカーボタンを押してみんなに向けた  
『ヤッホー、みんな元気にしてるかな。』

「「「!!」」」

スピーカー越しに聞こえてきたのは悪魔の第二楽章

『緑谷出久です。体育祭以来だね、みんな寂しくなかったかな？』  
その旋律は卵達を飲み込まんと口を開けて襲いかかる

## 悪夢再び

上鳴のスマートフォンから聞こえてくる声、それはできることなら二度と聞きたくなかった声

しかし薄々は感じていた

近い未来、彼が敵として再び避けては通れない壁として立ち塞がるであろうと

しかしそれは余りにも早すぎる再戦

たまの休日、きたる林間合宿にむけてクラスメイトと和気あいあいと買い物に来ていた中で最悪の衝突

しかも既にクラスメイトの一人は敵の魔の手に墜ちている

飯田「答えろ！ 緑谷出久！ 尾白君はどうしたんだ！」

八百万「そうですね。尾白さんを返しなさい！」

緑谷「まあまあ、そう焦らないで。」

僕としても今日は一仕事終えて楽しい午後の余暇を楽しむつもりだったんだけど。

まさかそつちから僕に近づいてくれるなんて思わなかったよ。」

葉隠 「ッ!?」ビクッ

切島 「さつきから聞いてりや好き勝手言いやがって、やい!どこにいる!尾白を早く返せ!」

上鳴 「ちよつ、おい!スマホ壊れるって・・・」

業を煮やした切島が上鳴の持つてるスマホを強奪し激昂する

緑谷 「ハイハイ、教えてあげるから。」

場所は〇〇棟の屋上、警備や鍵はこつちでクリアにしといたから  
そのかわりすぐ来てよね。

あまり遅いと尾白君に二度と会えなくなるかもよ。

あとプロヒーロー呼ばれたりしたら焦ってなにするかわかんないかもね。」

飯田 「ぐうっ・・・尾白君の、尾白君の声を聞かせろ。まだ無事なんだろうな!?!」

電話越しに聞いたですとため息の後に声が聞こえた。

尾白 「・・・みんな。」



瀬呂「尾白！ダイジョブか!？」

上鳴「待ってる。すぐにそこに行つて緑谷ケチヨンケチヨンにしてお前を助け出すかな！」

尾白「みんな、ありがとう。」

でもダメだ、みんな来ちやいけな。

これは罠だ。俺のせいでみんなを危険な目に合わせられない。

だから「ハイハイ、そこまでね」

緑谷「さすが、雄英高校の生徒、

こんな状況なのに自分より仲間の事を気にかけるなんて素晴らしいね！

反吐が出そうだよ……。

まあ、尾白くんはこう言ってるけど君たちがどんな決断を下すか楽しみにしてるよ。

それじゃお待ちしてまーす。」

プツツ　　ツーツー

空気が重くなる

事情を知る由もない周りの喧騒が逆にこの沈黙を耐え難いものに変える

葉隠「……ッ！」ダッ

飯田「あ、待ちたまえ！葉隠さん！」

突如駆け出した葉隠、それを止めようと飯田は手を伸ばすが

葉隠「あっ!？」

「アセルノヨクナイ。」

常闇のダークシャドウが体に巻き付き阻止した

常闇「心を乱せばそれこそ最悪の結末しか待っていない、一人で先走るな。」

蛙水「そうよ。葉隠ちゃん」

焦燥に駆られる葉隠をなだめる二人

すると

葉隠「……私のせいなの。」

蛙水「え？」

葉隠「私が……ひぐつ、おじろぐんに、あんなごとく言わなければ……えぐつ……」

葉隠泣きながら先程の出来事を話し始めた

蛙水は泣きぐずる葉隠の背中を優しく擦る

八百万「……過去を悔やんでも始まりませんわ。

大事なのは、これから何を為すか。

この事態をいかに乗り越えるか。」

切島「そうだぜ！ みんなであいつの所に乗り込んでぶっ飛ばして尾白を取り返して、それで終わりだ！」

飯田「待ちたまえ！」

葉隠の励ましと共に尾白救出に逸る気持ちをさせるメンバー達を飯田が制す

瀬呂「なんだよ！」

上鳴「早くいこうぜ！」

飯田「……今回の件は、体育祭の時とは違う。

先生やプロヒーローが裏で僕らを守ろうと動いてくれるわけではない。」

体育祭の様に頼れる大人すら知らない完全に自分達しか頼ることのできない戦い

飯田「今までの僕なら・・・ここでみんなを説得してでもプロヒーローに連絡するこ  
とを選択するだろう。」

切島「まさか飯田、」

飯田は手で切島の言葉を遮ると

飯田「相澤先生がいつもいつてるだろ。」

話は最後まで聞くものだ。今までならと言っただろ？

緑谷出久は僕たちをご指名だ。

仲間の命もかかっている。

だから・・・行かない理由はない！」

切島「おお！」

上鳴「よっしゃ、それじゃ乗り込もうぜ!!」

飯田「その前に！」

皆の買った荷物を貸しロッカーに入れて身軽になってから行こう。」

ズルツ

瀬呂「し・・・締まらねえ・・・。」

—————

切島「ここかあ！」  
バアアン

切島を先頭に屋上に乗り込んだI—A

緑谷「待つてたよ。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そこに待ち受けていたのは黒のローブを羽織った三人の

緑谷の後ろに控える二人はフードを被っているので顔はわからない

飯田「ああ、来てやったぞ！尾白君はどこだっ!？」

緑谷が顎で指し示す。

その先には

葉隠「尾白君!!」

そこには屋上のフェンスの向こう側に両手を拘束された尾白が立っていた

尾白「・・・・・・・・」

尾白の眼には生気がなく反応がない

緑谷「尾白君には特殊な催眠をかけさせてもらったよ。」

上鳴「また闇のゲームとか言うのすんだろ！さっさとやろうぜ！」

芦戸「さっさとクリアしてやるんだから！」

闘志を見せるメンバー

「麗しき友情だな。」

「あ……あんなキラキラした目をして、

む……ムカつくんだな！」

緑谷「じゃあさっそくルール説明だ、と言いたいところだけど今回はこの二人からやらせてもらうよ。」

障子「お前はなにもしないのか。」

緑谷「今回はゲームマスターとして見守らせてもらうよ。」

あとは頼んだよ。光の仮面、闇の仮面。」

闇の仮面「ハッ必ずや期待に答えて見せましょう。」

光の仮面「ま……任せろなんだな！」

切島「来い！」

飯田「どんなのが来ようと関係ない！

大切な仲間を返してもらおうぞ！」

麗日「葉隠ちゃんを泣かせた罪を、償ってもらおうで！」

耳郎「女の涙は、安くないんだよ！」

八百万「その通りですわ！」

反骨の火を灯した若き血潮

その火は闇を払えるのか。

## 勇気の旗印

闇の仮面「では、ゲームの説明を始めさせて頂く！」

光の仮面「お・・・お前らを絶望させてやるんだな！」

緑谷「フッフッフ。」

上鳴「なんでもいいから早いところかかってきやがれ！」

耳郎「バカ！下手なことといって不利な条件出されたらどうすんの！」

闇の仮面「案ずるな。今回のゲームは緑谷様の戯れに過ぎない、平等なもとの戦いを求めておられる。」

峰田「た・・・戯れだと？」

麗日「ふざけないで！そんなんで人の命をおもちやみたいに扱うなんて・・・」

光の仮面「お・・・お前たちだってそうなんだな！」

麗日の怒りを上回る激昂を返す光の仮面

光の仮面「お前らだって、無個性に生まれたものを見下し、優越感を得る道具としてしか見てないくせに！」



わなわなと怒りに震える光の仮面

闇の仮面「・・・光の仮面。」

光の仮面「ハッ！も・・・申し訳ありません、緑谷様、取り乱してしまっただな。」  
緑谷「構わないよ。今回の催しは君たちのその気持ちを晴らすためでもあるんだから。」

闇の仮面「少々乱れてしまったな。

では改めてルールを説明しよう

これから俺と光の仮面がそれぞれ一問ずつ試練を課すその試練に乗り越えたなら最後の試練を受けてもらう！

ただし・・・あれを見てもらおう！」

尾白とフェンスの金網の間にロープが走り金網に引つ掛かる様に五つの木の人形とロープが結ばれていた

闇の仮面「あの木の人形は選ばれた者の心を映す。

お前たちの恐怖や絶望に反応してあの人形は一つずつ碎けていく。

そして、全て碎けたとき・・・」



ピッピッピッピッピッピッピッ

ルーレットが開始される。

ピッ                  ピッ                  ピッ                  ピッ

闇の仮面「これで五人出揃ったな。」

八百万

口田

瀬呂

蛙吹

砂糖

闇の仮面「では、選ばれたものは前に出てきてもらおうか。」

切島「頼むぞ！みんな！」

飯田「相手は何をしてくるかわからない、油断は大敵だ。」

八百万「心得ていますわ。」

砂糖「おっし、任せとけ！」

選ばれたメンバーは前に出て、闇の仮面と対峙する。

闇の仮面「では、私の試練は・・・智勇！

文字通り、貴様らの知恵と勇気を試させてもらう。」

上鳴「へへっ、こりや勝ったも同然だな！

学力クラストップのヤオモモがいるし、俺や芦戸が選ばれていないし。」

芦戸「ウンウン！」

耳郎「あんたら、自分で言ってる悲しくないの？」

緑谷「さて、始めるにあたり外野が手出し出来ないようにしよう。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

切島「なんだ!？」

峰田「ガラスの様な透明の壁が！」

—————

切島「……!？」

峰田「……!？」

八百万「こ、これは？」

闇の仮面「安心しろ。あちらの声を一方的に遮らせてもらった。

これで貴様ら五人以外の邪魔は入らない。」

そう言うのと、切島達も落ち着きを取り戻し、先程の言葉が事実であると証明された。

八百万達は壁の向こうが落ち着きを取り戻したことに安堵し闇の仮面に向き直る。



口田 「くくく!!」

蛙水 「ケロツッ!」

砂糖 「はっ!!」

瀬呂 「へっ?」

突如あたりを覆う闇から絞首刑用の縄が下りてきて五人の首に巻き付いた

そして・・・

ドン!

先程まで地面だった筈の下が白い飛び込み台の様に変わりその下は深い闇が待ち構えていた。

—————

切島 「みんな!」

峰田 「お、おい!板が・・・板がどんどん短くなってきてねえか!」

闇の仮面 「制限時間はその板が無くなる迄だ!

では、最初の問いは・・・

朝は4本足、昼は2本足、夜は3本足・・・これはなんぞや?」

芦戸 「なにそれ!?そんなのいるわけないじゃん!」

上鳴「なんかとりあえず適当に答えて当てていけ！」

耳郎「バカ！解答は一回しか出来ないんだよ！」

緑谷（そう、このゲームの肝はそこにある。

命の危機に瀕した状況下で脳をフル回転するのはもちろん、解答には自分以外の命も背負うことになる。それが間違えだったら・・・とよぎれば焦り、不安が襲う。

疑心暗鬼になる心を押し通す勇氣。

まさに智勇だね。

さらに・・・)

ピシピシッ

障子「人形が！」

葉隠「尾白君！」

飯田「みんな、落ち着くんだ！あの人形は僕らの心の弱さに反応する！だから落ち着くんだ！」ガクガク

—————

ピシピシッ

八百万（っ!?人形が！

いえ、落ち着くのです。

恐怖に飲まれては敵の思うつぼですわ。

でも……答えてがわかりませんわ！)

八百万は他の顔色を伺うがあまり芳しくない。

口田「……」ガクガクブルブル

口田に至つては恐怖に打ち勝つことに囚われてしまつている。

八百万(くつ、しつかりしなさい！八百万百！考えろ！決して諦めないで、でも時間で足が変わる生き物なんて……それともそれが引っかけ?)

考え続ける間も板は短くなり更に、

バキヤ 人形残り4体

砂糖「あっ！」

瀬呂「げげ！」

人形がついに一つ壊れてしまった

闇の仮面「フフフ、さあ絶望しろ。

もつとその顔を歪めて「人間。」っ!？」

全員の顔が一ヶ所に向く

蛙水「朝昼夜、これは人間の一生を表してるわ、生まれたときは四つん這い、そして



二本足で歩き、晩年は杖をつくから三本足……どうかしら。」  
闇の仮面「……チツ、正解だ！」

すると縄は消え地面ももとの状態に戻った。

上鳴「おおおおお、梅雨ちや〜ん〜ん！」

麗日「さすが梅雨ちゃん！」

瀬呂「た……助かったあ。」

八百万「申し訳ありません、蛙水さん。助かりましたわ。」

蛙吹「梅雨ちゃんと呼んで。」

それに、まだ一問目よ。気を抜いてはいけないわ。」

闇の仮面「ふむ、少しはやるようだな。」

では、第二の問いだ。」

ヒタ

口田「……？」

口田は足に違和感を感じ下を見たすると

口田「っ!?!」サー

足にゾンビ達が張り付いていた

瀬呂「ぎやくやく！今度はなんだ!？」

八百万「またこれが制限時間ですの？」

闇の仮面「その通り、貴様らがそいつらの仲間入りするまでだ。

それでは・・・地を這って壁にすぎる者とはなにか？」

芦戸「またなぞなぞ!？」

障子「しかもまた一筋縄ではいかなそうだな・・・。」

「オオオ・・・」

「ウアア・・・」

亡者達は足にしがみついたと思つたら、そこからどんどん上に登ってきていた。

飯田「まずいこのままでは一番小柄な梅雨ちゃん君から先に覆われてしまう!」

蛙吹「ケロツ、あまりよろしくないわね。」

ピシッ!

上鳴「やべえ!二つ目にヒビ入ったぞ!」

八百万「・・・影。」

闇の仮面「つ!？」

八百万「答えは『影』ではありませんか？」

闇の仮面「くそっ！正解だ！」

上鳴・切島「ヤオモモオオオオオ！」

シユウウウウ

峰田「ゾンビ達が消えてくぞ！」

八百万「私たちのクラスメイトをお仲間にはお伝えになっ  
ていませんか、緑谷出久？」

高みの見物を決め込む緑谷に鋭い視線を向ける八百万

障子「わかっていたのか？」

常闇「ああ、」

「トウゼンダロ！」

砂糖「さあ、ラストだ！」

闇の仮面「ウググググ」闇の仮面。「ツハ！」

緑谷「まだ一問残ってるでしょ。僕をもっと楽しませてよ。」

あくまで余裕の笑みを崩さない緑谷

その態度にI—A一同は憤りを隠せなかった。



芦戸「もう我慢ならない！そんなの絶対わかるわけないじゃん！」

芦戸が透明の壁を叩き抗議する

闇の仮面「黙れ、小娘が！」

私は慈悲深い性格だからな。緑谷様に刃向かう患者達にもゲームの公平さを保つためのヒントをお教えしよう。ヒントは・・・石板は魔物を写す鏡なり。」

皮肉げに話す闇の仮面

そうする間にも怪物はみるみる五人の頭を覆っていく。

闇の仮面「フ、所詮ここまでよ。魔物の餌となり果てるがよい！」

飯田「みんな！」

—————

優しいだけではダメだ・・・

ここに入り嫌と言うほど味わった。

自分の目指す理想像など無視して問答無用で自分を、他人を傷付けに行く悪意達

守りたいものがあつたからヒーローになつた筈なのに・・・

なにもできていない、守られている自分がいた。

気付いたら皆の背中がすごく遠くに見えた

個性のせい？

ちがう。

それならば自分にはここにはいない。

自分の心の弱さのせいだ。

口は悪いがいつも先頭を切って困難に挑む爆豪君、それについていく切島君や上鳴君。

己の信条を貫く飯田君、周囲の目を気にせずあるがままに高みを目指す轟君。自分の弱さと向き合い見果てぬ答えを探し鍛える常闇君、皆僕と同じ年なのに、彼らの背中には子供の時見たヒーローの心強さが確かに備わっていた。

僕は……？

僕には……なにもないの？

今も、僕より小柄な蛙吹さんが必死に勇気を絞りだし、皆の希望の火を灯したのに

僕は……僕には……

「てめえもヒーローになりてえんだろ！」

!!

胸に鳴り響くあの悪態

自分に言われた訳ではない言葉が何故か今になって胸に響く

そして

耳郎「みんな・・・。」

先の期末テストで自分に勇気をくれた戦友

どれだけ自分が傷ついても励ましの言葉を送る彼女に何を見た？

今度は僕の番だ!!

—————

蛙吹「ケロツ!？」

砂糖「ここまでかよ!？」

闇の仮面「さあ答えられぬ愚か者が餌に成り下がる瞬間だ！」

口田「・・・く、口!!」

闇の仮面「なんだとお!？」

口田「後のものは二つに分けられるでも・・・この大きな口は一つでしか成り立つこ

とはない！」

ガラガラガラ・・・

バンツ!!

九枚の石板が表となり中心に描かれたのは牙の生えた口の絵だった

闇の仮面「そんな・・・そんな、バカなああああああああ!!？」

最初の試練 突破

人形残り4体



## 戦乙女の契約書

シユウウウウ

ドサツ

闇の仮面「グウウウウ・・・」

膝から崩れ落ちる闇の仮面

それと同時に透明の壁も消える

上鳴「やったぜ！」

飯田「みんな無事で良かった！」

ひとまずの歓喜に浸る一同

瀬呂「まあ、俺らにも役にたたなかったけどね。」

瀬呂と砂糖は苦笑するも、

蛙水「いいえ、二人も最後の最後まで諦めないで考え続けてくれたから人形の被害を

あそこで食い止めることができたのよ。」

蛙水の言葉に照れ臭くなり顔を背けた二人

耳郎「最後、めっちゃよかったよ！」

やるじゃん！口田！」

八百万「ええ、助かりましたわ。お礼を言わせてください。ありがとうございますわ。口田さん。」

口田「／／／／／／／／／／／／!?」

女子二人に挟まれ褒められて顔から発火しそうなほど赤くなり照れる口田

飯田「口田くん。素晴らしかったぞ。」

切島「そうだけ口田！お前の勇氣、感動しちまったぜ！」

と仲間の健闘を称えあっているなか、

ザッ

「！！！！ッ!?」！！！！

闇緑谷『なんだよ、思ったよりあっさりだな。闇の仮面よお！』

闇の仮面「ヒイ!!も・・・申し訳ありません！緑谷様！」

無様に這いつくばり許しを請う闇の仮面

闇緑谷『まったく、困ったもんだ。』

・・・光の仮面。』

光の仮面「はっ!?!」

闇緑谷『闇の仮面があまりにも不甲斐ないからさ・・・次のゲームは“毒の反乱”やつ

てよ。』

光の仮面「なあつ?! いや、緑谷様・・・あれだけは、あれだけは勘弁を！」

怯え狼狽えながらも明確な拒否反応を示す光の仮面

闇緑谷『・・・光の仮面、嫌なら君にもう用はない。今すぐにも、”あの”日々に戻してあげるよ。』

光の仮面「そんなつ!？」

緑谷の言葉に晒されている側の顔がみるみる青くなる光の仮面

ゴンツ

「アイテツ!？」

そんな雰囲気壊す急な音に一同は驚くも・・・

闇緑谷『まったく、油断も隙もないね。僕らの内輪揉めに乗じて尾白くんを救おうとかさ。でも、いい判断だったと思うよ常闇くくん。』

常闇「クツ・・・!？」

常闇が個性ダークシャドーを使い尾白を救出しようと試みるも先程の様な透明な壁に阻まれ失敗に終わってしまった。

闇緑谷『さて、話が逸れたね。光の仮面、どうする？』

光の仮面「・・・や、やらせていただきます。緑谷様。」

深々と敬意を示す光の仮面

光の仮面「やつ・・・やってやる！もう、もうあんな日々は耐えられないんだな!!」

決意と怯えを瞳に携え対峙する光の仮面

飯田「なんて奴だ・・・仲間をまるでゲームの駒としか見ていない。」

脅して無理矢理にでも危険なゲームに参加させ己は高みの見物を決め込み楽しむ

その悪魔の様な所業に改めて戦う相手が底無し悪だと気づかさせられる一同

蛙水「・・・あくまでも自分の手は汚したくないのね、とことん卑怯者だわ、あなた。」

闇緑谷『敵に卑怯は誉め言葉だぜえ・・・ありがとう、梅雨ちゃん。』

蛙水「やめて！その呼び方で読んでいいのは友達だけよ。もうあなたには呼んで欲しくないわ！」

毅然と拒絶の意志を示す蛙水

闇緑谷『つれないねえ・・・』

その態度にやれやれと肩をすくめる緑谷

そこに

ドン

先程の様にルーレットが現れるが・・・

上鳴「・・・なんか少なくてねえ？」

闇緑谷『もつと皆に参加してほしいからね、さっきのメンバーは免除してあげるよ。

それと・・・景品を勝手に盗もうとした悪い子はペナルティだあ!!』

ガシイイイン

常闇「なっ！」

万力魔人バイサー・デス 星4 闇属性 悪魔族

攻撃力500

守備力1200

効果

①このカードの召喚に成功した場合相手のフィールドのモンスター1体を対象として発動する。発動後、3回目の自分スタンバイフェイズに対象のモンスターを破壊する。

②このカードの①の効果の対象のモンスターがフィールドに存在している限りこの



次のゲームの参加人数は1人だあ、光の仮面とサシでやってもらうぜ、ルーレットスタートだ!」

再び回るルーレット

次第に回転が弱まり・・・

ピピピピピピピピピピ・・・ピッ、ピッ、ピッ、ポーン

「!!!!っ!?!」

「峰田 実」

ヘナツ

自身の名が選ばれた瞬間へたりこむ峰田

峰田「ヒイイイ!?!マジかよお!?!死にたくねえよ!」

既に涙を流してしまっている峰田

闇緑谷『やるんなら早いほうがいいぜ、あまり遅いとそいつ、痛みで狂っちゃまうかもな、ギャハハハハハハッ!』

常闇「グウウウウ・・・」

常闇をいたぶり高笑いする緑谷の姿を見て更に戦意喪失してしまった峰田

峰田「あばばばば……」

ピシッ

バキヤン 人形残り3体

その姿に反応した人形が一つ木っ端微塵に砕け散る

闇緑谷『ホラホラ、時間もなくなっちゃうぜ』

必死に峰田を説得しようとする一同を挑発し煽る緑谷

飯田「くつ、峰田くん。覚悟を決めるんだ、これ以上常闇君に負担をかけるわけには  
いかない！」

切島「そうだけ、お前も男なら戦えよ！さっきの口田の勇氣見ただろ!？」

峰田「おいらには無理だつて〜！そんなに言うならお前らのどつちか代わりにいつて  
くれよう!!」

泣き叫び懇願する峰田

闇緑谷『交代は可能だぜ』

峰田「ほんとに！」

希望の光が峰田の頭を掠めた瞬間



ヒュン カッ

峰田の眼前をサバイバルナイフが落ちてきた

闇緑谷『流星に死人をゲームには参加させれないからね・・・それで自分の首をカッ切れば？』

もしくはあのロープを切ればこのゲームの意味もなくなるからそれでもいいよ。』

「「「なッ!?!」」」

更なる絶望に目の前が真っ暗になるような錯覚に陥る峰田

峰田はおもむろにナイフを手にとり

飯田「峰田君!! よすんだ!!」

峰田「ごめんみんな、これ以上は迷惑かけちゃうから・・・短い時間だったけどみんなと過ごさせて・・・おいら幸せだった・・・。」

蛙水「峰田ちゃん!!」

首にナイフを当てようとしたそのとき

バシッ

葉隠「・・・峰田君」

その手を叩き止めたのは葉隠だった。

そして突然の制止に呆然となる峰田の手をとり……

峰田「?!?!?!」

自分の胸に当てさせた

峰田の手に柔らかな感触と、

葉隠「私のせいで……尾白くんを危険な目にあわせて……みんなの命まで危険に晒させて……更に誰か死んじやうなんて耐えられない。」

ポタッ　ポタポタッ

冷たい滴が落ちてきた

再びの涙を流す葉隠

葉隠「峰田くん……お願い、生きて帰れたら……どんなお願いでも聞くから……尾白くんを助けて……お願い……!」

グズリながら蚊の鳴く様な声で話す葉隠

切島・瀬呂「峰田!!」

上鳴「峰田!男になってこいよ!」

八百万「峰田さん！」

飯田「峰田くん！」

銘々に檄を飛ばされ・・・峰田は・・・

峰田「その約束・・・絶対守ってくれよ。」

葉隠「!!・・・うん!!」

立ち上がり闇の根源へ決意の瞳を向ける。

峰田「おいらは・・・確かにスケベで・・・いろいろやらかしたりしてるけど・・・女の子を泣かすような・・・そんな最低な奴にはなりたくねえ！」

その瞳は闘志を湛え、戦いへ歩を進める

峰田「やってやる！お前らの壁を越えて、その先にいる勝利の女神の胸にダイブしてやる!!」

光の仮面「おとなしく自ら命を絶っておけば苦しまずにすんだものを・・・」  
向き合う両者

小さな体に秘められた英雄の芽吹きは乙女の涙を経て咲き誇れるか

## チキンレース

光の仮面「やってやる・・・やってやるんだな・・・」

うわ言のように繰り返す光の仮面

闇緑谷『では、始めようか。』

ブオン

再び透明の壁が現れ闘う二人以外は干渉出来ぬようにされる

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

峰田「うわっ！」

突然峰田と光の仮面の間に円卓型のテーブルが現れる

その高さに合わせ峰田の下の地面がせり上がる

闇緑谷『では、ルール説明を・・・ルールは簡単、今からこのスニーカーにコインを入れる。』

どこからともなく現れたのは赤いスニーカー

そこにコインが無造作に入れられていく

闇緑谷『それと・・・こいつだあ！』

仰々しく取り出した小さな箱

透明なアクリルで出来たそれは容易に中で蠢くそれを認識できた

峰田「さ・・・蠍さそり!?!」

ザワツ

見守るメンバー達にも緊張が走る

闇緑谷『かわいいだろ? こいつをスニーカーに入れてと・・・』

カサカサカサ

スニーカーに入れられた蠍は暗がりを好むのか奥へと身を隠していった

闇緑谷『じゃあ、とつても簡単なルール説明だ。』

これから交互にこのスニーカーの中に有るコインを取ってもらう。

蠍に刺されたらおしまい。それだけさ。』

—————

飯田「蠍だ?!」

切島「くそ、俺なら蠍の針くらいわけないのに・・・!」

口田「サー

砂糖「口田?! しっかりしろ!」

先程の勇ましく立ち向かった様はどこへやら、蠍を見て顔を青くしてしまった口田

瀬呂「無事に帰ってこいよ。」

上鳴「こんなところで馬鹿話出来る仲間を減らすなんてごめんだからな！」

例え聞こえないとしても声援を送り続けるクラスメイト達

—————

テーブルを挟み向かい合う両者

光の仮面「ヒヒヒッ、あの眼鏡とか赤毛の男とかが相手じゃなくてよかつたんだな。」

明らかに峰田を見下している光の仮面

光の仮面「よ……弱いものいじめはカッコ悪いからな、お前に先行を譲ってやるんだな。」

峰田「……………」

光の仮面の挑発にも終始峰田は無言を貫いた

光の仮面「お……俺よりもチビで俺よりも冴えなそうな奴初めて見たんだな！ハハッ  
緑谷様からこのゲームを提案された時はどうなるかと思っただけ……お前みたいな奴  
が相手なんて、俺はついてるんだな!!」

段々興奮してきたのか愉快そうに声高らかに侮辱を吐き捨てる光の仮面

峰田「・・・・・・・・・・言いたいことはそれだけかよ。」

スツ

光の仮面「へ？」

バツ

峰田「ほらよ、次はお前の番だ。」

スニーカーに躊躇無く手を入れ取り出した手のひらにはコインが確かに一つ握られていた。

光の仮面「なっ・・・・・・・・ツ!？」

峰田「あんまり、たらたらしたくねえんだよ、早くやっつくんない？」

光の仮面「な・・・舐めやがってこのチビが!!」

素っ気なくいい放った峰田の言葉に激昂する光の仮面

光の仮面「ふーっ、ふーっ・・・・・・・・はあ！」

光の仮面もスニーカーから恐る恐るコインを一枚取り出した

峰田「・・・・・・・・次はおいらだな。」

またしても躊躇うこと無く手を差し込みコインを取り出す峰田

その姿に緑谷も驚きを隠せない、そして何より驚いたのが・・・

闇緑谷（に・・・人形がまったく反応していないだとおお!!）

選ばれた時は泣きわめき負の感情を撒き散らしていた男が今、目前の命を賭けた戦いで驚異的な集中力を発揮していた。

—————

瀬呂「あ・・・あいつすげえ！」

上鳴「いつけ—————!!」

飯田「すごいぞ峰田くん、完全に恐怖を克服したのだな！」

蛙水「かつこいいいわよ、峰田ちゃん。」

先程までの態度と打って変わって堂々と立ち向かう峰田の姿に感動し勢いづくメンバー達

—————

しかし・・・

峰田（ハアハア・・・葉隠になんでも願回事OK・・・あんなことも・・・こんなことも・・・ウツヒョー!!）

当の本人の頭の中は煩惱で溢れかえっていた

しかし、その欲望へのストレートな情念が皮肉にも心に恐怖が入り込む隙間を消し飛



ばしていた

もともと己の欲望にまつすぐな性格の峰田にとって今回のチャンスは破格であり千載一遇、すべての運をここで使っても構わないと言わんばかりの集中力だった

光の仮面「なんで……！」

ギリツ

峰田「……？」

光の仮面は小さく震えだし、拳に力を入れる。

光の仮面「なんでお前は！ なんでお前はあんなに人に思われる！ なんで……、なんでお前みたいな奴を心配して、励ましてくれる奴がいる!?!」

『こつち来んな!』

『お前の個性マジで役立たずだな!』

『なに、あいつ? チョクキモイんだけど?』

『チビが夢語ってんなよ。』

光の仮面「なんでお前の為に、そこまでしてくれる奴がいる!」

『あいつ? ないない、お金くれるって言われたって拒否するわ!』

『気持ち悪い……』

『ゴミが！邪魔だから引っ込んでろ』

『いやマジあり得ないんだけど、マジなんで生きてんの？』

光の仮面「お前みたいなヘタレで、対して強くもない個性の奴に！なんで人が集う！」  
仮面をしていない方からは涙が見え、仮面のペイントが笑顔だけにその悲しみがより引き立たせられていた。

峰田「・・・ははーん、さてはお前、学生の時イケてない奴だったな！」

「！！！！！！！！！！」

敵の地雷と思われるところを土足で踏み抜く峰田に驚きの表情を浮かべる一同

光の仮面「なんだとお・・・！」

峰田「おいらはなあ・・・女の子にモテるためならなあ、どんな努力も惜しまねえ！  
いつか、いつかこの世の全ての女を好きに出来るようにあの手この手を日々磨いてんだ  
！抗ってんだ！！」

シーーーーーーン

いきなりの宣言に緑谷すらも呆気にとられてしまう

峰田「今回は葉隠だけだな・・・いずれは八百万のヤオヨロツパイ！芦戸の腰つき！  
麗日のうららかボデイ！蛙水の意外おっぱい！まだ見ぬB組女子！こんな果实達、味

わあずに死ねるかっつんだ！」

光の仮面「そ．．．そんなの無理に決まっつて「そこだよ！」っ!？」

峰田「今回だっつておいらの夢の実現に向けて命かけて必死に戦つてんだ！命をかけるべき時なんだ！お前みたいに全部回りのせいにして逃げてる奴に、少しでも見えた光に命かけて手を伸ばそうともしない奴に！」

三度目になるや、即手をスニーカーにいれ

峰田「おいらは負けない!!」

コインを取り出しテールに叩きつけた

—————

突然の話に応援していたメンバーも少し呆然としていた

しかし、

上鳴「いいぞー！峰田ー！」

瀬呂「そういうお前のぶれないとこ、大好きだぜ〜！」

八百万「．．．なぜでしょう？命をかけて緊迫した場面の筈なのに頭痛が、」

耳郎「気にしない方がいいよ、ヤオモモ。」

蛙水「相変わらずだね、峰田ちゃん。言つてゐることは最低だけど．．．その姿勢は最高

だわ。」

「……………」

光の仮面「黙れ……黙れ、黙れ、黙れ！」グウウ  
己より格下と見下していた奴からの指摘に怒り狂い

光の仮面「黙れえええ！」バツ！

峰田「いつ!?!」

席から峰田に殴りかかろうとする光の仮面

しかし……

ビタッ

光の仮面「ッ?!?!」

闇緑谷『光の仮面。』

抑揚のない冷たい言葉が放たれる

闇緑谷『ゲームのルールは守らなくちゃダメだろお、なに勝手にルール破ってんだよ、

興奮めじゃないか……』

光の仮面「いやっ、緑谷様、これはっ、そのお……」

一転して血の気が引いて青い顔になっていく光の仮面

闇緑谷『はあ、光の仮面。

残念だけれールを破ったものはペナルティを与えなくてはならない。』スウツ

緑谷は杖を手に取り光の仮面仮面に向ける

グググ・・・

光の仮面「緑谷様!?!なにを・・・!?!」

光の仮面の意思と関係なく体が動き始める

そしてその手はスニーカーの中へ押し込まれた

闇緑谷『言っただろ? ペナルティだよ、これから二十秒間コインをとれてもスニ-

カーの中に手を入れたままで居てもらおう』

光の仮面「ひいつ、緑谷様!! お許しく下さい!!」

カサ・・・カサカサカサ

光の仮面「ヒイヒイヒイヒイヒイ!」

闇緑谷『光の仮面、ルールを感情に任せて破るような奴は組織に必要ないんだよ。』

冷めたく非情な表情で諭すように話す緑谷

カサカサカサカサカサカサ



屋上に悲痛な絶叫が響き渡った

# ヒーロー・シグナル

決着の時と同時に

シューウウウウウウ・・・

常闇の頭を潰そうとしていたモンスターは黒い塵となり消え去った

常闇「うぐあ！」ドサツ

障子「常闇!？」

八百万「大丈夫ですか!？」

苦痛から解放され脱力し崩れる常闇

常闇「ああ、問題ない・・・。」

悪魔のような所業を凌ぎきり不安にさせまいと強がる

飯田「君も立派だったぞ！常闇君！」

その姿に頼もしさと尊敬の念を送る飯田

—————

光の仮面「アガガガガ・・・」



蠍の毒に侵されもがく光の仮面

闇の仮面「ひ……光の仮面!!」

先程まで敗北の余韻により呆けていた闇の仮面が一目散に駆け寄り介抱する

闇緑谷『さてさて、2つ目のゲームもクリアだね。おめでとう峰田くん。』

峰田「お……おう。」

そんな二人をまるで歯牙にもかけず峰田に賞賛の言葉を送る緑谷の姿に絶句してしまおう一同

壁が消え駆け寄ったものなのにも発する事が出来なかった。

それほどまでに衝撃だった

同い年でここまで非情な態度をとれる姿に改めて敵の恐ろしさを痛感していた。

闇の仮面「緑谷様!早く解毒剤を……」

このままでは手遅れになってしまいます!」

必死に懇願する闇の仮面

近くには息も絶え絶えになった光の仮面が転がっていた

闇緑谷『解毒剤?』

ないよ、そんなもの。』

「「「「ツ!!」」」」

その一言に闇の仮面のみならず――Aメンバー達も息を飲んだ

闇緑谷『当たり前だろ。真剣勝負なんだから・・・』

解毒剤があつたら面白味に欠けるよ。』

蛙吹「・・・それは、あなたが何もリスクを負わないからでしょ。」

普段、冷静で物静かな彼女は普段と余り表情を変えず、しかし耐え難い怒りの視線を緑谷にぶつけていた

他のメンバーもその狂気に飲まれぬよう強い意思を秘めた目で睨みつける

そんなものに一切臆せず緑谷は続ける

闇緑谷『それに、このゲームはまだ終わっていない、まだ第3の試練が残っているだろ。』

飯田「な・・・人の命がかかっているのに、そんな事を言ってる場合じゃないだろ！」

飯田も説得に加わる

闇緑谷『へえー、さつきまで命を奪おうとしていた相手を助けるんだ？流石はヒーローなんてものを目指してるだけあつて上辺だけの優しさが上手いなく。』

切島「ヒーローとかじゃなくて、人として当たり前前の事だろうが！」

熱血漢の切島が怒鳴った

闇緑谷『人として、ね。ガキの頃の”あいつ”に聞かせてやりたいよ。』

一瞬見せた憂い気な瞳、遠い過去に思いを馳せすぐに纏う空気が変わる

闇緑谷『でも一度始めたゲームはやりきらなくてはならない。それが出来なければどのみち僕の部下としては必要ない！我が野望達成に向けて足手まといはここで朽ちてもらう！』

非情な宣告を下す緑谷

切島「なっ・・・てめえ!!」

飯田「自分がなにを言っているかわかっているのか!？」

二人の説得に耳を貸さず緑谷はカードを取り出し二人にかざす

そこに

瀬呂「これ以上好きにさせねっての！」ビュオツ

パシツ シュルシュルシュルシュル

闇緑谷『なっ!?!』

瀬呂がそのカードを個性で奪い発動を阻止した

八百万「もう遊びはおしまいです！大人しく尾白さんを返しなさい！」

八百万は自身の個性で想像した棍棒を緑谷に向けて通告する。

回りも臨戦態勢になる

逆転のカードを奪われ、二枚目を使う余裕も与えられそうにない窮地であって

闇緑谷『・・・クククッ』

八百万「な・・・何がおかしいんですの！」

不適な笑みを浮かべた緑谷

闇緑谷『最高だぜ〜！敵が罠にはまる瞬間ってのはよ！』

瀬呂「うわあああああああああああ!?!」

全員の意識が瀬呂に向く、

見ると瀬呂の肘から先が無惨な変貌を遂げていた

口田「!!」クラッ

その見た目に思わず目眩がしてしまった口田

寄生虫パラサイド

星2

地属性

昆虫族

効果・リバース

このカードを相手のデッキに表向きで入れてシャッフルする。

相手がこのカードをドロートしたときこのカードは相手フィールド上に表側守備表示で特殊召喚され、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。その後、このカードがフィールド上表側表示で存在する限り、相手フィールド上表側表示で存在するモンスターは全て昆虫族になる

闇緑谷『本命はこっちだあ!!』

ブオオオン

闇の仮面「み・・・緑谷様!？」

なにを・・・!？」

緑谷様!!

あああああ・・・!!」

光の仮面「アガガ・・・」

その隙を見逃さず新たなカードをかざす緑谷

闇の仮面と光の仮面が黒い霧に飲み込まれていく

！  
闇緑谷『黒白の贄を食らい、世界を混沌に塗りつぶさんとする純なる狂気！制圧せよ！』

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー』

二人の嘆きを呑み込み一つとなった黒い霧から現れた

四つ足の半人半獣型モンスター

ヘルレイザー「ウヴヴツ・・・ヴォオオオオオオオオオ!!」

苦しげに呻いた後に発せられた咆哮

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー

星8

闇属性

悪魔族

攻撃力 3200

守備力 1800

『仮面魔獣の儀式』により降臨

「ヴオツ、ヴオオツ．．．オオ！ツ」

周囲を見渡して標的として卵達を捉える

上鳴「嘘だろ!?!なんだよ．．．これ．．．!?!」

U S Jとは比べ物にならないぜ!?!  
あの時

ビキツ

麗日「人形がっ!?!」

闇緑谷『第3の試練は単純明快！そいつを倒してみなあ！もちろん人形も継続だあ

!!』

ブオン

ヘルレイザーの手にある得物が空気を切り裂きながら横薙ぎに襲ってくる

八百万「っ!!」

障子「貸せ!!」

ガキイイイン！

迫る凶刃を前に八百万から棍棒を奪い――A組屈指のヒイジカルを持つ障子が迎え

撃つ

障子「ヌグウツ・・・グアアア!!」

八百万「障子さん!」

砂糖「ホアターーー!!」

飯田「レシプロバーストーー!!」

空しく競り負けた障子だがその後生まれ変わった隙に砂糖と飯田が個性により解放されたパワーを纏った拳と超加速からの蹴りをお見舞いするも・・・

ヘルレイザー「ウヴツ・・・オオオオオツ!!」

飯田／砂糖「ぐあああああああああああ!?!」

一瞬ぐらつく程度で容易く振り払われてしまった

峰田「ヒイイイイ!」ポイツポイツポイツ

峰田が個性でもぎもぎを投げまくるも

ヘルレイザー「ヴァオウ!!」



再び得物を振られ風圧で吹き飛ばされてしまった  
切島「チキショー!!」

上鳴「この人数で抑え込めないのかよ・・・!」

—————

葉隠「瀬呂くん、大丈夫!」

カードの力で寄生されてしまった瀬呂を安全な端に連れてきた葉隠と口田  
瀬呂「ああ、痛みとかはないけど・・・こんなじゃ個性が使えねえ・・・  
くそッ!これじゃ足手まといじゃねえか!」

葉隠「瀬呂くん・・・」

—————

闇緑谷『ホゥラ、がんばれがんばれ

仲間が助けを求めているぞ。』

それを助けるのがヒーローだろう?』

耳郎「このっ!?こいつ倒したら次はあんたひっぱたいてやるよ!!」

モンスターの後ろで朗々と語る緑谷に怒る耳郎だが緑谷の饒舌は止まらない

闇緑谷『ハハツ！楽しみにしてるよ耳郎ちゃん！』

それまでに何人犠牲になるかな？』

麗日「私達は誰もやれたりはせん!!」

蛙吹「そうよ！尾白くんを救ってあなたを目論みなんて全部潰して見せる！」

闇緑谷『へえー、楽しみだけど、その幻想に囚われて希望を捨ててないって表情…』

イライラするな、あの二人から血祭りにあげてやれ！ヘルレイザー!!』

麗日／蛙吹「っ!!」

飯田「まずい！」

主の命に従い標的を絞ったヘルレイザーが二人に襲いかからんとしたその時

バンツ！

闇緑谷『なにイ!？』

突如開くはずのない扉が開き

「死ねや！」

糞キモカイブツが!!」

BOOOOM!!

爆発がヘルレイザーを襲った

切島「来てくれたか！」

八百万「間に合っていましたのね・・・よかったですわ。」

闇緑谷『これはこれは、まさか僕がサプライズにかけられるとはね。びつくりだよ。』

その笑みは狂気を湛え歪んでいた

爆豪「クソデクがア！ここで決着をつけてやるよ!!」

卵達の逆転の切り札が炸裂した。

正義の一太刀はいまここにその白刃を映し出した。

## 我が身を盾に

屋上へ向かう前

切島「なあ……。」

切島が話かけた相手は……

八百万「どうされましたか、切島さん？」

これから決戦に向かわんとする中で切島は話を切り出した

切島「八百万つてヘリとかチャーターできたりするか？」

八百万「それは、出来なくもありませんが……。」

上鳴／芦戸「マジで!？」

飯田「切島くん、一体なにを……。」

あまりにそぐわない質問に飯田が問いたです

切島「闇緑谷あゐと闘うのに、今俺らが切れる唯一つのJOKERを切るんだよ。」

—————

闇緑谷『アハハハ、なるほど……確かにプロヒーローじゃないし、君なら確実にその誘いに乗るよね。』

なんせ、僕がいるんだから。』

爆豪「よお、クソデク。」

楽しそうなことしてんじやねえか！

俺も混ぜろや！」

顔に張りついた表情は両者共に笑顔

しかしその裏にはそれぞれ色の異なる激情がうずまいていた。

切島「来てくれたか、バクゴー！」

飯田「すまない爆豪くん、状況の子細をあまり伝えていなかったが今の状況は……」

爆豪「黙ってる、クソメガネ。」

爆豪は緑谷から視線を逸らさず一蹴した

爆豪「ようはあのデカブツぶつ殺せばいいんだろ？」

掌から小爆発を連続で起こし戦意を露にする爆豪

ヘルレイザー「ウヴヴ!?」

爆豪の不意打ちに怯んでいたヘルレイザーが体勢を立て直す

爆豪「俺がクソデクもろとも速攻でぶつ殺して来るからそこで指啞えて見てろや、雑

魚ども！」

そこへ追撃とばかりに駆ける爆豪

飯田「一人じゃ無理だ！」

飯田が協力を促すも・・・

爆豪「なめんな！」

BOOM!

一人で攻撃を加える爆豪

しかし、

爆豪「なっ!?!」

爆炎を切り裂き勢いを落とさず攻撃を仕掛けるヘルレイザー

闇緑谷『いいねえ、そうだよ。僕に歯向かうものは刺し違えても葬り去る。

僕の下僕のあるべき姿だよ!』

凶刃が爆豪を襲うも

蛙吹「させないわ！」

爆豪の腰に蛙水の舌が巻き付き引き下げた

爆豪「ぐあッ！」

ヘルレイザー「グオッ!?!」

対象が不意に消えたことにより動揺が走る

その隙を逃さず

芦戸「てえーい！」

青山「くらえ☆」

強酸とレーザーを浴びせる

流石に避けきれずダメージを受ける

爆豪「テメえら邪魔すんじやねえ!!」

自分一人で決着をつけるべきと息巻く爆豪だが突然の援護に逆に苛立ってしまった  
そこに

麗日「テイッ！」 ビシッ

麗日の手刀が炸裂する

爆豪「つてえ！何しやがる丸顔!!」

麗日「いつまで一人で戦う気なん!？」

怒る爆豪を上回る熱量で、捲し立てる麗日

飯田「爆豪くん、君とあのヴィランの間に浅からぬ因縁があるのは承知している、しかし僕たちもまた彼に既に因縁ができてしまっている。時間の差はあれど目指すものが被っているなら協力したほうが合理的だと思わないかね？」

闇緑谷『敵の眼前でおしやべりとは余裕だね。』

ヘルレイザーがその集まりに突撃するが

常闇「行け、ダークシャドー！」

先程の借りを返してやれ!!」

「マカセロツ!!」

常闇の個性ダークシャドーが迎撃する

爆豪「テメえら、」

切島「委員長、相澤先生みたいになってんぞ。」

切島は爆豪の肩に手を置いた

切島「ようは俺らもあいつを止めたいんだ、だからバクゴー、協力してほしいんだ。お前ならそれくらい大丈夫だよな。」

上鳴「そうそう、いくらお前がどぶを煮込んだような性格でもその才能ならできらるろ?」

あれ!?もしかして才能マン爆豪の唯一つできないことなのか?」

爆豪「黙れアホ面!出来るに決まってんだろ!協力し殺してやるわ!」

常闇「そろそろもたないぞ!」

「ツカレテクタ・・・」



話がまとまったところでダークシャドーとつばぜり合いを退けたヘルレイザーが突進してきた

飯田「避ける!!」

その言葉を合図に散らばる一同

爆豪「チツ、意外と素早いな!

おい、ブドウ頭! あいつをお前の個性で動き止めれねえのかよ!!」

峰田「おいら一人じゃ無理だよ! 第一投げたところで武器振り回されて風圧でやられちまうよ!」

「なら、俺も協力するよ。」

上鳴「せ・・・瀬呂!?

だ、大丈夫なのかよ!!」

瀬呂「なんとかね。」

—————

葉隠「爆豪くんも来てくれたんだ!」

爆豪の登場により希望を見いだした葉隠達だったが

葉隠「そ・・・そんな・・・。」

爆豪をもってしても決定機を見出だせないという現状に心に影が落ちる

すると

バキバキ

それに反応する人形

瀬呂「くそ、俺も参加できれば・・・

爆豪の一発叩き込む隙くらいなら作れるかも知れないのに・・・」

己の腕を憎たらしく思い嘆く瀬呂

それを見ていた葉隠は

葉隠「瀬呂くん、いたいかもしれないけど我慢してね」

そう告げるや

ガシッ

葉隠「ふんンンンン〜」

瀬呂「お、おい、葉隠何を・・・!？」

葉隠「テエイ!!」

バツ

瀬呂の体に貼りついてたカードを無理矢理に引き剥がした

瀬呂「うおっ!？」

その瞬間スパークのような発光が起き三人の目が眩む

瀬呂「うくん……」

閃光に眩まされた視界が取り戻されていくなかで瀬呂はある変化に気づく

瀬呂「な……治ってる！

すげえぞ葉隠一体どうやって……」

そこまで言つて瀬呂は葉隠に目を向け絶句した。

そこには先程まで浮いているようにしか見えなかった服に誰かが袖を通して  
姿があつた

葉隠「……よかつた。

あ……ごめんね、こんな醜い姿で」

カードの効果により個性を上書きされた葉隠の姿は虫に侵食され醜悪な容姿へと変  
貌させられていた

瀬呂は言葉をグツと飲み込み自身の着ていた上着を葉隠に被せる

瀬呂「俺ので良ければ使ってくれ、すぐに戻してやるから。」

普段は見えないが恐らく元は美人な筈の葉隠の初のお目見えがこれでは余りにも惨  
いと気を効かせる瀬呂

瀬呂「口田！俺たちはなにも見ていない、いいな!!」

口田は力強く頷いた

それを見た瀬呂は 口田に葉隠の守りを託し戦線へ駆け出した

—————

闇緑谷『誰が来ようが関係ない！全員仕止めてしまえ！』

緑谷の声に反応し攻勢に出るヘルレイザー

しかし、

瀬呂「俺だつてやりや出来る奴なんだよ!!」

個性のテープを武器に巻き付け攻めを封じにかかる

瀬呂「ぐううう!!」

しかしヘルレイザーの力は強く振りきれそうになるが

飯田「加勢するぞ！瀬呂くん！」

障子「俺もだ！」

砂糖「フンツ!!」

1—Aを代表するフィジカルメンバー達の加勢により武器攻撃が止まる

瀬呂「峰田、いまだ！」

峰田「おうよ、食らえ！」

グレイプラッシュ!!」

無数のもぎもぎが引つ付きヘルレイザーの機動力を奪っていく

そこへ、

ジュアツ

ビュン

ドガガガガガ

ヘルレイザー「グアアアアア！」

強酸、レーザー、マシンガンと立て続けに当てられ苦悶の声をあげるヘルレイザー

切島「あと一息だ！」

爆豪「今だ！俺を浮かせ丸顔！」

麗日「エイツ！」

こちらの勢いに怯んだ隙を逃さず止めの一撃を加えるべく麗日の個性で浮かび上がる爆豪

しかし、

ヘルレイザー「ツ！」

上から攻撃されるとわかったヘルレイザーは武器から片手を離し爆豪に振りかざす

が

上鳴「上ばかり見てちゃ危ないぜ！」

バリバリバリバリ

いつの間にか足元に忍び寄っていた上鳴がヘルレイザーに触れ個性を発動

強力な電気がヘルレイザーの身を焼く

ヘルレイザー「グオオ・・・」

耳郎「今だ！」

蛙吹「爆豪ちゃん！」

個性の使用により頭がショートしてしまった上鳴をヘルレイザーから引き離しながら二人が叫んだ

そして皆の思いも重なった千載一遇のチャンス

爆豪は

「くたばれ！榴弾砲ハウザー・インパクト着弾ー!!」

自身の現段階の最高火力の技を叩き込んだ

すると辺りに爆風が発生

瀬呂「うわっ！」

飯田「爆豪くんはどうなったんだ!?!」

切島「バクゴー!!」

すると、

BOOM

爆豪「うるせえ、生きとるわクソが！」

煙の中から飛び出してきた爆豪の姿に安堵の息が漏れる

爆豪「それよりも・・・まだ終わってねえだろ！」

煙の晴れた先には

ザアアアアアアア・・・

光の仮面「・・・・・・・・」

闇の仮面「・・・・・・・・」

先程まで暴れていた怪物は砂となり消え、元いたところには二人の男が倒れているだけとなった

そしてその奥、

闇緑谷『やるじゃないガッ・・・』ゴポッ

胸をおさえ血を吐く緑谷の姿があった

尾白「うゝん・・・ハッ、ここは・・・？」

切島「尾白!!」

常闇「今度こそ大丈夫だろう、行けダークシャドウ。」

拘束され柵の向こうに立たされていた尾白を安全地帯連れ戻す

そして……

葉隠「ううっ!？」

口田「葉隠さん!？」

寄生されていた姿が徐々に透明へと変わる葉隠

葉隠「……治ったみたい、ありがとう口田くん。行こ、みんなの所へ!」

闇緑谷『ハアツ……ハアツ……!!』

肩で息をし苦悶の声を漏らす緑谷の前に

爆豪「偽物のでめえに用はねえ!あいつを出しやがれニセデク!!」

かつての幼なじみが対峙した

闇緑谷『……フフフ、相変わらず気に入くない奴ただ!』

緑谷「そんな君が、大っ嫌いだったよ……。」

緑谷の纏う雰囲気が変わる

しかしその目に浮かぶ憎しみの色は褪せることなく鈍く光っていた

爆豪「そうかい、だったらよ……俺だけに喧嘩売ってこいや!」

緑谷は目を細めた



緑谷「は？君は、何を・・・？」

爆豪「ツ！てめえが敵そっちに居んのもこいつら狙うのも・・・全部俺が発端だろ！

：俺だつてなあ、あのときの事を許してくれなんて言わねえよ！でもなあ！テメエの落とし前はテメエでつけてやる！

俺だけを狙つてこい！俺の命を賭けててめえを止めてやる！」

爆豪の悲痛なる決意

しかし・・・

緑谷「プツ・・・ククツツ・・・アツハハハハハハハ！」

爆豪「ツ!？」

堪えきれなかったかのように声をあげ笑う緑谷

切島「テメエ！」

爆豪の思いを無下にするような態度に切島が怒りを露にするも・・・

緑谷「君がそこまで自惚れているとはね、余りにも滑稽だよ。

君の命？そんなものだけでこの霧は晴れないよ。

僕の大なる野望、その道にたまたま躓きそうな小石が転がってたから、どかそうと  
したままでのことさ。」



USJを越える何かが近いうちにまた自分達の身の回りに降り注ぐと・・・

とあるバー

キイ バタン

黒霧「おかえりなさい、死柄木弔、大丈夫でしたか？」

死柄木「は？」

黒霧がテレビを指さす

そこに映っていたのは

つい先程まで仕事で赴いていたショッピングモールで身元不明の凶悪なヴィランが出現したとの報道が流れていた

死柄木「あいつめ・・・また勝手に面白そうなことやりやがって。」

その目は嬉々と輝いていた

「死柄木、」

モニター越しに声がかかる

死柄木「先生！見てくれよ、あいつまた面白そうなことしてるぜ！次は俺の番だ！もつともつとすごいことをやってやるぜ！」

その姿を見たA F Oは内心少し焦りを覚えてた

自身の凶悪なる意思を継ぐ後継者として育成を続けていた死柄木だがここに来て成長の度合いが芳しくないと思っていた

AFO（あと一皮か二皮ぐらいは剥けてほしいものだけど・・・

難しいところだからね、焦って手を誤ってしまうことが一番良くない）  
しかし悠長にしてはられないのもまた事実

AFO「死柄木弔、君に一つ話しておくことがある・・・」  
打つべき手は全部打っておく

AFOもまた己が思い浮かべる未来に向けて歩を進めていた

—————

パンドラ「ご無事で何よりです、緑谷様。」

緑谷もまた自らの隠れ家に到着していた

緑谷「光の仮面と闇の仮面やられちゃったよ。」

やれやれといった感じで首を振った緑谷

パンドラ「まあ彼らはもう十分仕事をしました。ここらが切り捨て時だったので  
？」

緑谷「そうだね、これを手に入れたのは彼らの尽力あってこそだし。」

エンデヴァー「……………」

## 遺言の仮面

## 通常魔法

- ①このカードをデッキに戻しシャッフルする
- ②このカードが「仮面魔獣デス・ガーディウス」の効果で装備されている場合そのモンスターのコントロールを得る

## 仮面魔獣デス・ガーディウス

## 効果

このモンスターがフィールドから墓地に送られた場合、相手フィールド上の表側表示モンスター1体を対象に発動できる。デッキから「遺言の仮面」1枚を装備カードとして対象のモンスターに装備する

緑谷は隠れ家の自室に戻り死柄木から受け取ったアタッシュケースを開けた

緑谷「また一つ、」

闇緑谷（ああ、進んだな。）

中には眼の模様があしらわれた金の首飾りと天秤が入っていた

悪の糸は知らず知らずと張り巡らされ平和に見える日常の中に確実にその模様を編み上げていた

## Hーヒートハート

降り注ぐ灼熱

真夏の太陽がギラギラと大地を焼く中

シヨツピングモールでの激闘をを乗り越えた雄英高校の卵達は今・・・

「ぬああああ!!」

「ヒイイイイイ!!」

「ウウウウウウ!!」

「クソがアアア!!」

阿鼻叫喚の中にいた。

夏休みを利用しての強化林間合宿

来るや否や森の中に放り出され獣の姿をした土人形達に追いかけるながら駆けずり回り

次の日は日の出と共に一日中個性の上限を伸ばす訓練

更に補習組はそこから睡眠時刻ギリギリまで補習というハードスケジュールが組ま

れていた

王道なき成長への唯一の近道を全力疾走中の1—A一同  
それを見て

鉄哲「気合い入ってんなあ！A組の奴ら！」

拳藤「うちらも負けてられないな！だから・・・いつまでも睨んでんじやないよ！物  
間！」

その姿に自分達も奮起しようとする1—B組メンバーの中に嫉妬の眼差しで睨んで  
いた物間

物間「フンツ、わかっているよ！すぐに追い抜いてやるからな、待ってろA組め！」

そんな物間の恨み節などまるで聞こえないほどに

A組は追い込まれていた

散々悲鳴や怒号が飛び交うなか

爆豪（次こそが決着の時だ！待ってやがれクソデクがあ！）

轟（もつと強くなるんだ！もう二度大切なものを傷つけないためにも！）

麗日（こんなところで負けてられへん！）

尾白（自分の失態は自分で取り返す！）

常闇（更なる高みへ！）



八百万（いついかなるときにも対応できてこそ一流ですわ！）  
瀬呂（情けないとこぼつか見せて終われねえよ！）

ヒーローになるそして緑谷出久との因縁に早々に区切りをつけるべく全員の頭のなかには貪欲な向上心が燃え盛っていた

相澤「……………」

「気合い入ってるわね、今年の一年達は。」

それを見守る相澤に今回の合宿の協力者である山岳救助をメインに活動しているヒーローチーム、ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツのリーダー・マンダレイが声をかけた

虎「うむ、例年がない信念の様なものを感じる、鍛えがいがある！」

ピクシーボブ「若いつてのはいいわね。」

ラグドール「ははは、ピクシーボブ目が遠いところ向いてるよ。」

相澤「これくらい乗り越えてもらわなければ困る、それほどこいつらは厄介な奴との戦いに巻き込まれてしまっている。」

その言葉に暗い沈黙が流れる

敵連合の情報はもちろん、緑谷出久のことも四人は聞かされていた。

相澤「こんな状況下で今回の合宿に協力してくれて感謝している。雄英高校を代表し

て礼を言わせてくれ。」

マンダレイ「よしてよ、水くさいわね。」

虎「うむ、若人達の夢に手を貸すのは先を歩む者の務めよ。」

その言葉に再度感謝の念を送り相澤は林間合宿の前の事を思い返していた

—————

轟を除くI—A組が緑谷出久を退けた次の日

雄英高校は緊急会議が設けられていた

塚内「えー、では今回の事件で捕らえた2名の身元についてですが・・・」

今回の騒動は報道こそされたが緑谷出久については公にはされていないかった

というよりはそもそも緑谷出久というヴィランの存在が公表されていないためしよ  
うがないというのが現状だった

雄英高校側としては世間の注目が集まっていけない内に緑谷出久及び彼が率いている  
というグループ”グループズ”との決着を着け雄英高校の信用失墜の火種を消し、敵を  
敵連合一本に絞っておきたかった

その為にも今回捕らえた緑谷出久の部下と思われる男たちの調書は必要だと判断さ  
れ、また今後の予定等の変動もかねて今回の会議は開催された

塚内「現在、蠅に刺された一名は治療中でなんとか命を取り留めましたが経過の観察が必要なため話をすることができませんでしたがもう片方からは話を聞き出すことができました。」

塚内は報告を始めた

塚内「闇の仮面と名乗っていた男は都内で2年位前から行方不明になっていた20代後半の男で個性は触れた紙を黒くしてしまうというもので学生時代は周囲から嘲笑の対象として孤立、会社に入っても似たような境遇から抜け出せていなかった模様です。」  
オールマイト「その心に生まれた隙間を緑谷出久は利用したと……。」

塚内「はい、彼に従っていたときの具体的な内容までは覚えてないようでしたが深い幸福感、優越感を常に感じていたと語っています。」

根津「想像以上にまずい状態だね。」

どの世界も平等を唱えながらも人も所詮は動物、弱肉強食のカーストが存在しているしかしそんなカーストをひっくり返してしまう術を緑谷出久は手にしている。  
それはつまり……

根津「彼の戦力は我々より多く、そして調達も容易……これからの戦いは厳しくなりそうだ。」

今の自分達を羨望の目で見てくるもの達が力を授かり復讐者として向かってくる

ゴクリと唾を飲む教師一同

塚内「そして、オールマイトも耳にしたことがあると思いますが、緑谷出久が度々口にしていた神という言葉ですが、」

オールマイトは眉間にシワを寄せた

塚内「詳しいことはわかりませんが、緑谷出久が目指す世界の原点オリジンとなる力だと語っていたと、そこだけは鮮明に覚えていたそうです。」

その他の報告を一通り終了したあと会議室はこれからの戦いに向けて張り詰めた空気が流れた

根津「見えないものに怯えてもしょうがない、さて次は見えている控えている問題を解決していこう。」

相澤「はい、では控えている林間合宿ですが・・・」

ヒーロー科恒例の強化林間合宿

しかし、

ミッドナイト「この状況下では中止も検討しなくてはならないわよね・・・」

USJの二の舞は避けなくてはならない、だが

プレゼント・マイク「だからって、なにもさせないのはマジイと思うぜ。」

根津「そうだね。彼らを危険から遠ざけることだけが彼らの為になるとは限らない。」

結局話し合いの末、林間合宿は行われることが決定した。

ただし

一、場所は例年の場所から変更、変更先は外部及び生徒にすら非公開その他の情報も非公開の徹底

一、襲撃等の緊急時対策のヒーローを確保及び、待機場所などの体制整備

一、担任教師2名には最終手段として生徒の個性使用の許可を出すことの権限を付与

「校長！ちよつと待つてください!!」

会議終了後オールマイトは根津に問い詰めた

オールマイト「なぜ私は林間合宿に不参加なのですか!!」

相澤「落ち着いてください、オールマイト。」

そう、今回の林間合宿はオールマイトは帯同せず、さらには緊急時に動員するヒーローのリストからも除外されていた。

根津「それについては先程の会議で話したはずだよ。」

敵の狙いの一つにオールマイトがいる。

ならばオールマイトがいること自体が生徒達を危険に巻き込む可能性が高い

オールマイト「しかし、A組の子供達は既に私の息のかかったもの達と見られています。なればこそ、私も帯同し危険から守らなくては！」

それもまた懸念事項の一つだった。

今回の緑谷出久の襲撃のように1-A単体が狙われることも十分に考えられる

根津「それでもオールマイト、君のその誠意は嬉しく思うが君はこの高校の教師である前に平和の象徴なのだよ。そんな君を今の世間の状態で連れていくことはできない。」

敵連合の報道や名前こそ公にされていないが緑谷出久という悪の存在やNo.2ヒーロー、エンデヴァアの行方不明など世間を揺るがすニュースが立て続けに起きて尚、平穏な日常を保っているのは他のヒーロー達の頑張りもあれどやはりオールマイトという存在が大きい

根津「現に君も感じていると思うが犯罪率は微弱ながら上昇傾向にある。ここで君が平和の象徴という役目を放棄すればどうなってしまうか、君もわからない訳ではないだろうか？」

オールマイト「……わかり……ました。」ギリツ

相澤「……」。

こうして林間合宿のオールマイトの不参加が決まった

薄暗い路地を一人の少年

やがて目的地に着きその扉を開ける

緑谷「まったく、急に呼び出して今度はなにを・・・。」

トウワイス「よお。」

扉を開けると中には見知った顔があり、その後ろから

「君が緑谷君ですか!?! かつこいいですね、早速切らせてください。」

物騒な事をいい放ちナイフを出す女子高生と

「あら、確かに良さげな子じゃない、これでまだ伸び代がありそうだわ。おネエさん羨ましわ。」

ゴリゴリのオネエがいた

黒霧「お待ちしておりました。緑谷出久。」

死柄木「オセーよ。」

「.....。」

カウンターに目を移すと黒霧と死柄木そしてつぎはぎに目がいく男がいた。

トウワイス「俺も次の襲撃に参加するからよろしくな。」「仲良くする気ねえから。」

呆けている緑谷の肩を組み声をかけるトゥワイス

死柄木「いったら？近い内にでかいことをするってな、まだ何人か来てないが今度は質で勝負だぜ。」

黒霧「それであなたにも参加を要請したく思いました」

緑谷「なにをするの？」

死柄木が口を開き告げる

死柄木「・・・でその作戦をお前に立てて欲しい。もちろん、こいつらも好きに使ってもらって構わない。

どうだ・・・ってそんな顔じゃ聞くまでもねえな。」

「笑った顔もすごい素敵ですー」

—————

都内のとある病院

「今日はいいい天気だな。」

かつてプロヒーロー・インゲニウムと名乗っていた男、飯田天晴は現在車イスでの生活を余儀なくされており今日は快晴のため中庭にくり出していた

(雄英は今頃林間合宿か・・・。)

今もプロヒーローを目指し奮闘する自分のヒーロー名を継いだ弟の姿を思い描く。



(俺もできることなら、二人で共に・・・。)

自分の足を恨めしく見る

(つと、いかななこれでは、せつかく気分転換に外に出たと言うのに・・・。)

自分の絶ち切れぬ未練をこまかそうと頭を振る

そこへ

「失礼、元プロヒーローのインゲニウム様でしょうか？」

一人の男が声をかけてきた

「っ!？」

・・・はいそうですが、あなたは？」

「そうですね、私のことはパンドラでもお呼びください。あなたに希望を与えるためにお伺いいたしました。」

## E—エマージェンシーコール

### 合宿3日目

この日の夜はレクリエーションとしてA組B組別れての驚かせあいの肝試しきつくつらい訓練への労いと明日以降の活力の為にと企画されたのだが・・・

相澤「ただし、補習組は今から俺と補習な。」

歓喜のあとに涌き出た悲鳴が森の中に消えていった

相澤の捕縛布で捕らえられ歩かされる切島、競呂、砂糖、芦戸、上鳴

上鳴「こんなのってねえよ・・・。」

芦戸「私も肝を試したーい！」

相澤「ほれ、時間は有限だ、キリキリ歩け。」

途中でB組唯一の補習、物間と担任のブラドキングも合流し宿舎に着こうかというところ

ガツシャアアアアン

上空から鉄檻が現れた

相澤「これは・・・っ!!」

そして宿舎の近くで佇む人影に気付く  
ボウツ!!

ブラドキング「イレイザー!!」

相澤「チツ！」

その人影が放った火炎攻撃に生徒を守りながら回避する

茶毘「……………」

尚も不気味に敵意を向けてくる相手、更に……

『緊急事態発生！森より緑谷出久を含む複数のヴィラン出現!!繰り返す……』

マンダレイより緊迫した声のテレパスが届く

相澤「……お前ら、今すぐここから離れてクラスの奴等と合流しろ！そして伝えろ、  
プロヒーロー・イレイザーヘッドの許可のもと自衛の為の個性の使用を許可するとな  
！」

切島「先生!!」

ブラドキング「物間お前もだ、早く行け！」

二人のプロヒーローがこちらに目もくれず怒鳴りながら促す

その余裕なき態度はいかに今が危険な状態かを如実に物語っていた

相澤「山の麓には緊急時のプロヒーロー達が待機している！それが救援に来るまでお前だけの力で乗り切れ、だからここは任せて速く行け!!」

ダッ

その空気を察した6人は来た道を全速力で引き返す

茶毘「おーおー、思ったよりも先生してるんだな、プロヒーローども。」

相対して初めて声を発する茶毘

茶毘「おっと、自己紹介がまだだったな、俺の名は茶毘。ステインの意思に感化された者だ。」

相澤「生徒を逃がすまで待つてくれたり、自己紹介したりと随分余裕だな。」

臨戦態勢体制のまま少しでも情報を引き出そうと挑発を試みる相澤

茶毘「ああ、俺の役目はすぐ終わるからな。それにしてもイレイザーヘッド、お前思ってたよりも情に厚い奴なんだな。噂聞く限りだと血も涙もねえ薄情な奴だと思つてたけど、」

いまだに動きを見せず口だけが回る茶毘に対し油断も隙もなく注視する相澤だが

茶毘「しかし・・・今回ばかりはそれが仇となったな。」

ガツンッ

相澤「ぐあぁっ・・・!？」

突然後方より固いなかで殴られ視界が黒く染まっていく相澤

ブラドキング「イレイザー！」

茶毘「おいおい、敵目の前にしてよそ見かよ。」

ゴオオオオオオッ

—————

爆豪「つたく！なんでてめえとなんだよ、半分野郎」

轟「くじ引きで決まったんだからしようがねえだろ。」

補習組の悲鳴が闇に溶けていった後B組と見守り役のラグドール・ピクシーボブは啖  
呵を切り森の中へ消えていき肝試しスタートとなった

そしてなんの因果か一組目のペアとなったのが爆豪・轟だった

もともと乗り気ではない上に二人は体育祭で不本意とは言えの自分の命と姉の命を  
奪い合う戦いをしたのだ。

更に生来プライドの高い爆豪は轟を一方的にライバル視しており今の今まで二人き  
りで行動するなどと言うのはあり得ないことだった

特に言葉を交わすこともなく歩く二人

轟「……………爆豪。」

爆豪「……………んだよ？」

その気まづい沈黙を破ったのは轟だった

轟「爆豪、俺はお前に感謝している。」

爆豪「はあ!？」

思わず声が大きくなる

それほどまでに突然の告白だったからだ

轟「体育祭で緑谷<sup>アイツ</sup>の策略とはいえ俺は姉の命をお前は自分の命をかけて戦った、いや

俺に関しては戦っているつもりだった。」

爆豪「……………」

轟「だが本当は自分の過去に固執し自分の為だけに戦っていた、大切な姉さんの命が

危険だと言うのに……………」

「守るものの為に力を使えや！」

「テメえもヒーローになりてえんだろ!!」

轟「あの言葉がなければ俺は今ここにいない、もしあのまま戦っていたら確実に俺は負けていたし、結果として姉さんが無事でも己の無力さを受け止め切れずに自壊していただろう。」

少し前を歩く爆豪の背中に語り続ける轟

爆豪「・・・感謝すんのは勝手だかまだなにも終わつちやいねえだろ、お前の親父も見つかってないしくソデクもまだなにか企んでやがる。」

エンデヴァーの失踪に緑谷出久が関わっていることは間違いない  
だからこそ

轟「ああ、わかってる。」

だから爆豪、ひとつだけ言っておく

緑谷は俺が決着をつける！」

爆豪と緑谷の因縁、爆豪の固執、すべてを把握した上で轟は己の覚悟を口にした

爆豪「フンッ、勝手にしやがれ。」

てめえがなにしようが最後は俺の手でけりをつける！いや、つけなきやならねえんだ  
!!」

爆豪もまた己の決意を轟にぶつけた

轟「ああ、じゃあ勝手にやらせてもらおうよ。」

爆豪「……ケツ！」

互いの胸の内を晒しあつた二人は闇の森を歩き続ける  
しかし……

轟「爆豪……。」

爆豪「ああ、」

二人は強烈な違和感に気付く

爆豪「驚かすにしては静かすぎるぜえ、おい!？」

「なんか勘づいたっぽいな。」「まだ気付いてないぜ。」

「あの二人が今回のターゲットですね、早速刺しにいきましょうか!」

「コラコラ、今回はターゲットの生け捕りが任務だろう?それに幕が上がってから  
ショーは始まるもんさ。」

—————

ガッシャアアアン



## 悪夢の鉄檻 通常魔法

すべてのモンスターは（相手ターンで数えて）2ターン攻撃出来ない。2ターン後このカードを破壊する。

一組目が森に入り二組目が森に入ろうかと言うその時、

木々の向こうの夜のトバリを鉄格子が覆う

あまりに突然の出来事

しかし、勘のいいものはすぐに気がついた

こんな悪趣味な物を発現できるものはあの敵しかない・・・

飯田「なっ!？」

麗日「これって!？」

峰田「嘘だろ・・・なんで、なんでヴィランがいるんだよ!？」

闇を切り裂く悲痛なる叫びの後

「やあ、みんな。

楽しそうなことしてるね。

僕も混ぜてよ。」

その言い方は完全なる前回の意趣返し

その声が聞こえた瞬間身構えるA組

プロヒーローも子供たちに手は出させまいと立ち塞がる

マンダレイ「みんな、固まって！ここは私達が対処するからみんなは宿舎に走って逃げて！！」

緊迫した声が響く

緑谷「それはやめといた方がいいですよ。だって・・・」

ボゴウツ

「！！！！！！」

宿舎が有る方角から轟音が響き紅い火柱が上がる

緑谷「あつちにも僕らの仲間が一人もう向かってますからそれよりも僕と遊びましょう？！」

ズズズ・・・

闇緑谷『さあ、楽しい楽しい夜の時間の始まりだぜ！』

虎「させぬわ！」

ブンツ！

緑谷の個性と残虐かつじわりじわりと追い詰めていく性格的傾向を知らされていた

虎は先手必勝と殴りかかるも

闇緑谷『フフツ』スツ

それを横に避ける緑谷

しかしそれは想定済みと虎は追撃を仕掛けにかかるが

虎「ツ・・・グオオオオ!?!」ギユオン

不可思議な力に勢いを塞ぎ止められ森に吹き飛ばされる虎

マンダレイ「虎!?!」あなたもあつち。」ツあああ!?!」

虎の後を追うように吹き飛ばされるマンダレイ

闇緑谷「助かったよ、マグ姉。スピナーも後は任せたよ。」

マグネ「お構い無く、それじゃこっちは任せて後は若い人たちが楽しんでやってね。」

スピナー「贖物ども、粛清の時間だ!!」

緑谷の後ろから現れた二人はそのまま吹き飛ばされた二人の元へ更なる足止めへと

向かう

ザツ

闇緑谷『やあ、みんなこの間は僕に素敵なサブライズをどうもありがとう。』

再び向かい合い固まる卵達に一步足を踏み出す緑谷

飯田「クツ・・・!?」

ザツ

緑谷「この前は急な開催だったから大したもてなしができなかったけど今回はゆっくり君たちをもてなせそうだよ。」

木の影に月光を遮られ表情はわからぬが穏やかに語り距離を詰めてくる緑谷  
ガサガサツ

上鳴「みんな!!」

そこに上鳴達三人が合流する

ザツ

再び距離を詰めて月光の下に晒される緑谷

闇緑谷『役者は揃った!! さあ闇のゲーム第二章の開幕だあ!!』

ズオオオオオオオオオオ

屋上の時と同じ、いやそれ以上に濃度の高い闇が辺りを覆う

飯田「ぐっ、またこれか・・・!!」

上鳴「相澤先生からの個性の使用許可は出てるぜ!」

合流した上鳴が相澤の言伝を伝える。

常闇「ならば先に仕掛けるのみ!



八百万「きゃあ!？」

突然の出来事に全員の視線がそこに集まる

八百万「じ……耳郎さん？」

いきなりなに……を……!？」

耳郎「ぐううううう、」

その手が狙ったのは八百万だったがそれにいち早く気づいた耳郎はそこに割り込んだ

その結果その手に首を捕まれ宙に浮かされていた

蛙吹「耳郎ちゃん!!」

ギユオン!

皆が助けようと動き始める瞬間手は耳郎を穴に引きずり込み消えていき

ギユオン!

次に現れたのは主の近く両手で耳郎の首を絞め拘束し本体を伴って姿を見せた

ヘルポエマー「♪」

効果

このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた場合効果が発動する。

このカードが墓地に存在する限り、相手バトルフェイズ終了時に相手は手札からカ-

ドを一枚ランダムに捨てる。

このカードは墓地から特殊召喚できない

上鳴「なっ、アイツは!?!」

八百万「そんなッ! USJで倒したはずです!!」

驚愕する二人を見て笑顔になる緑谷

闇緑谷『本来なら倒した奴をこいつの嫉妬の力で連れて来るはずだったがこれでもいいや。』

耳郎「ぐっ、は・・・なせ・・・!!」

上鳴「耳郎を返しやがれ!!」

両手から解放されようと苦しむ耳郎を見て上鳴が怒鳴る

闇緑谷『ああ、返してやるよ、楽しいオマケをつけてなあ!!』

ズズズズズズズズズズ・・・

黒い霧がヘルポエマーと耳郎を飲み込んでいく

耳郎「っ!?!」

八百万「耳郎さん!!」

闇緑谷「灼熱の生ける牢獄よ、咎人を抱きその罪の贖罪を断行しろ！そして、それを救いに来る愚者に絶望を与えろ!!」

現れたまえ、溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム!!」

ガシヤアアアアン!

闇に覆われた耳郎の視線が晴れたとき目に飛び込んできたのは檻の柵の向こうにいるクラスメイトだった。

耳郎「は？なにこれ、なんでみんなが檻に入れられてるの・・・って熱!?!」

背中に感じる高温に堪らず振り返る耳郎

そして気付く檻に入れられたのは自分で、その檻はただの檻じゃない!

溶岩で体が構成された化け物の腹にある檻だ!!

耳郎「イツ・・・イヤアアアアアアアアアアア!!」

上鳴「じ・・・耳郎おおおおおおお!!」

闇緑谷『ヒヤハハハハハハハハハハ!!』

森に二つの悲鳴と狂った笑い声が木霊した

溶岩魔神ラヴァゴーレム 星8 炎属性 悪魔族

攻撃力3000



守備力2500

このカードは通常召喚できない。相手フィールド上のモンスター二体をリリースし、手札から相手フィールド上に特殊召喚できる。

自分のスタンバイフェイズ毎に、自分は1000ポイントダメージを受ける。このカードを特殊召喚するターン、自分は通常召喚できない。

狂気は、加速する

## Rーライトジャスティス

## 敵連合襲撃直後

「ぐああああア・・・」

「しつかりしツ!?ガハア・・・」

「パニックになるな！落ち着いて戦況を把握しろ!!」

「助けてくれー！ー！ー!!」

マンダレイの放ったテレパスを聞きつけ山の麓には集まったプロヒーロー達が救援に向かう最中、敵の奇襲により辺りは悲鳴と怒号が鳴り響いていた

「歯ごたえねえなあ!!殺し足りねえぞプロヒーローども!!」

「断面をおおおお、見せろおおおおお。」

「こんな簡単にやられてプロヒーロー?ふざけるなよ、選ばれた奴等なんだろう?人々の期待なんだろう?それがこの程度?こんな劣等な奴等に頼らなきやいけない平和なんてごめんだね。」

膨張した筋肉の圧倒的暴力と無慈悲な凶刃、更に脇に逃れるのを阻止するかのよう  
にガスが辺りを覆う

「負傷したものはすぐに後ろへ下がれ!!」

「数ではこちらの方が上だ! 怯むな!!」

しかし、オールマイト程でなくとも大なり小なりの経験を積んでいるプロヒーロー達も次第に落ち着きを取り戻し反撃に出るが・・・

「はっはっは、ただ暴れまわれればいいなんてあの参謀は最高だぜ!」

「断面、いっぱい! うれしいなああああ!!」

苛烈な攻勢に出る二人の後ろから

「さっきの森の生徒といい、この大人たちといい本気でなにかを守る気があるのかな? 自分の力を見せつけたいだけなら、僕より存在する価値ないよね!」

ガスを発生させながら発砲してくる敵の連携によりプロヒーロー達は多大な足止めを余儀なくされていた

—————

相澤もといイレイザー・ヘッドの指示でクラスメートの所へ駆ける補習組は

切島「おい、物間! お前は B組の様子を見に言つてくれ!」

物間「ふん、A組に言われなくてもそのつもりさ!!」

切島の提案により物間は集団を離脱し単独で森に隠れに入ったB組メンバーの確認

に向かった

瀬呂「よし、俺らも速くいこうぜ!!」

残りの5人は再び駆けるも、少しして・・・

芦戸「あ、あれ?切島がない!?!」

その言葉に全員が足を止める

走り出す時に自ら殿を務めた切島が目的地手前でいなくなっていた

砂糖「どつかでこけたのか!?!」

芦戸「あたし、探して来る!!」

瀬呂「おい、危ないぞ!?!」

探しにいこうとする芦戸を他のメンバーが引き留めるようとするが

芦戸「大丈夫!速めに切り上げてすぐ合流するから安心して!!」

そう行つて来た道を引き返して行つた芦戸

砂糖「イヤ、待てて!」

上鳴「・・・しゃーない、ここは芦戸を信じて俺らは先に行こう!」

瀬呂「イヤ、見捨てんのかよ!?!」

上鳴「あいつ、結構運動神経いいし肝も座ってるから大丈夫だろ!それに他のメン

バーに速く伝えないとみんなが危ない!」

期末試験で芦戸と組んで挑んだ上鳴の説得力ある言葉に二人は苦い顔をするも納得して残った3人はクラスメートの元に向かった

――――

ヒュッ

爆豪「ツ!!」バツ

カッ

トガ「あーん、惜しかったです。」

闇を切り裂き投てきされたナイフを爆豪は持ち前の反射神経で避ける  
トウワイス「おい、さつき生け捕りって話をしたろ?」「ぶっ殺せ!」

現れた敵は三人

爆豪「ちっ、誰かって聞く必要はねえなあ!

何しに来やがったクソヴィランども!!」

臨戦態勢に構える爆豪

轟「おい、爆豪個性の使用許可は・・・」

爆豪「んな事いってる場合か!! やられたきやてめえ一人でやられてやがれ!!」

トウワイス「あまり抵抗しないでくれると助かるんだよな、獲物の活きがよすぎると緑谷の依頼通り生け捕りつてのが難しくなる。」「楽勝だぜ！」

その言葉に二人の眉間にシワが寄る

爆豪「獲物だあ？誰に向かって言ってるやがる！なめてんじやねえぞ!!」

轟「緑谷と言ったな！貴様らに聞きたいことが山ほどできた！」

コンプレス「あくあ、やる気にさせちやったよ。」スチャ

トガ「いいですね、いいですねその顔！」

傷だらけになればもつとよくなりますよ!!」スチャ

トガとコンプレスは両手に複数本のナイフを構え投げつけた

パキパキパキツ

ガガガガガキンツ

轟が作った氷壁がその威力を相殺し崩れ落ちるその攻防の空白を縫って

爆豪「くらえや！」

爆豪が距離を詰め個性を発動しようとするも

ビュオ!

爆豪「ツ!?」BOOM!!

ビチャビチャビチャ

突然眼前を覆うように何かが現れ盾となり爆破を防いだ

コンプレス「ふう、半信半疑だったがすごいなこれ。」

コンプレスの手には一枚のカードが握られていた

爆豪（あの手応え、U S Jの時と同じ・・・ッ!!）

轟「なんだと!？」

グニユグニユグニユ

二人は驚愕に目を見開く

爆豪の爆破にを受け悲惨した物体が意思を持ったかのようにまたひとつに集まりだした。

そしてそれはひとつの粘度の高い塊になりドクロのような顔が浮かび上がる

リバイバルスライム 星4 水属性 水族

攻撃力1500

守備力500

効果

このカードが戦闘によって墓地に送られた時1000ライフポイントを払うことで

次のスタンバイフェイズに表側守備表示で特殊召喚することができる

コンプレス「さて、今度はこっちの番と行こうか！」

トガ「たくさん切ってあげます！」

反撃に出る敵達に

爆豪「くっ！」

迎撃とばかりに爆破を放つも

ビュバ BOM

再びスライムが盾となる

爆豪「クソがあ!!」

なんとか回避し続けているが3対1で攻め込まれては分が悪すぎる

轟「爆豪っ！いまっ・・・ッ!？」

パキパキパキパキッ

氷敵の足を止めようと地面を滑るように氷を展開するも

ゴガガガガン

地中から現れた全身にドリルがついたモンスターに阻まれる

トウワイズ「ここまで対策しているとかやっぱすげえな!」「ぜんぜん大したことねえ

な!」



カードをかざしていたトウワイスが喝采をあげる

ドリラゴ 星4 闇属性 機械族

攻撃力1600

守備力1100

効果

相手フィールド上に攻撃力1600以上の表側表示モンスターしか存在しない場合、このモンスターは相手に直接攻撃できる

轟「ハッ！」

バゴオオオン

手を振り氷結を試みるも

キュイイイインドガガガガガ

ガキンツ

ドリルが回転し貫いてくる

轟（どうする、左を使うか!?だがそれでは・・・。）

今回のフィールドは森の中、下手に炎を撒き散らせば敵を倒せるかもしれないがそれ以上に味方や自分が危険に陥るリスクが高い

轟「くっ！」

再び氷壁を出し拘束を試みる

すると

「おやおや、よくないね。

戦う相手を見えなくしちゃうのは。」

轟「なッ!?!」

後ろから聞こえたのは今爆豪の相手をしてるはずの  
なぜ?

その疑問を轟は口に出すことはできず視界は黒に落ちていった

同時に氷壁が消える

爆豪「半分野郎!!」

コンプレス「おいおい、よそ見はよくないよ!」

異変に気付いた爆豪の意識がそちらに向いた隙をコンプレスが狙うも

爆豪「ッ、ちい!!」

ビュバ B O M

コンプレス「だから無駄だって・・・!?!」

BOOM

反対の手を使い二連撃で遂に爆豪の爆破が当たる

爆豪「いつまでも同じ手が食らうと思うなあ!!」

爆豪は何度かの攻撃でスライムの爆破されてから再生までのタイムラグを見抜いていた

爆破の霧が晴れると

コンプレス? 「グウウウ・・・」グシャアアア

仮面をつけたヴィランは二人

だが爆破を喰らったヴィランの体は崩れ落ち消えてしまった

コンプレス「偽物が壊されちゃった。」

トウワイズ「なんだよ、いろいろ測るの手間だったんだからもっと大切に扱えよな!」  
「適当でいいぜー!」

爆豪（今の崩れた奴はあのマスク野郎の個性か、そしてまだ生きてる仮面ヴィランの個性で半分野郎はやられた。）

冷静に現状から推測を始め突破口を探る爆豪

しかし、残酷にも時間は待ってくれなかった

コンプレス「しかし後方支援も絶たれこれで本当に3対1だ。そろそろ無駄な抵抗はやめておとなしく捕まってくれるかい？」

前と後ろで挟撃の状況となり姿勢を崩さず投降を促すコンプレス

トガ「えー、トガはもつとこの子と遊びたいです！」

その言葉にトガは不満を口にするが、

コンプレス「いいねえ若いってのは、おじさん達はそろそろ疲れてきたんだよ。」

トウワイス「俺もおじさん扱いなの!」「渋いだろ?」

爆豪「舐めたこといつてんじやねえぞ、クソがあ!!」

その余裕綽々な会話に苛立ちを覚え怒りを露に威嚇する爆豪

爆豪「どのみち俺はNO.1ヒーローになっててめえら全員ブタ箱に詰め込んでやる

んだ!かかってこいや!クソヴィランども!!」

衰えることのない戦意を見せつける爆豪

コンプレス「やれやれ、しようがない。」

トガ「わーい、まだ遊べるんですね!」

最悪ともいえる状況の中で爆豪は戦い抜く覚悟を決めたその時

「バクゴー!!」

虎「あれは!？」

マンダレイ「みんなが!!」

モンスターの出現に生徒達の危機を感じ救出しようとする二人だが  
マグネ「あら、よそ見なんてする余裕あるのかしら?」

スピナー「貴様らの相手は俺だ!」

二人のヴィランがそれを阻止していた

虎「くっ!どけえい!!」

—————

一方そのモンスターと対峙することとなった卵達

耳郎「くそ、出せ!このっ、このお!」

檻を蹴り脱出を試みる耳郎

すると

ラヴァゴーレム「ヴァアアア・・・」ゴポオ

ジュウウウウウウウ・・・

耳郎「あああああっ!？」

口から漏れ出た溶岩が腹の檻に落ちる

幸い中に入ってくる事はないが一気に熱せられた鉄檻は中の耳郎を蝕んでいく

上鳴「耳郎！」

仲間の危機に救出に駆け出すが

ポオウウウウウ

口から吐かれる業火によって阻まれるそれにより、

蛙吹「ケロオ・・・」

麗日「梅雨ちゃん！」

もともと熱に弱い蛙吹や

尾白「大丈夫か!？」

常闇「すまない・・・」

溶岩で構成された体より煌々と闇夜を照らされ常闇など相性の悪いものたちが軒並み戦力ダウンを余儀なくされた。

幸い現在戦っているところは拓けているため森に火が移る心配はないが・・・

瀬呂「ぐうつ、テープ張り付けようにも体が溶岩だから溶けちゃう！」

峰田「俺のモギモギもだ!？」

巨体の為動きは緩慢であるがその体故に誰もが決定打を打てないでいた  
だが時間をかけてはいられない

ラヴァゴーレム「ヴァアアア・・・！」ゴポオ

ジュアアアアアアア・・・

耳郎「ぐううううう!!このお!!」

再び口からこぼれ落ちた溶岩が耳郎の身を焼く

上鳴「くそ！轟か爆豪がいてくれれば・・・」

緑谷「ふーん、やっぱりそうなんだね・・・。」

モンスターの後ろで控えていた緑谷は呟く

緑谷「君たちの信ずる正義なんてのは所詮そんなものさ、圧倒的な力が決めた指針、それに賛同する者の数の暴力・・・そんなので人を救う？平和を守る？

幻滅だね、やはり今の”英雄”では世界に光は未来永劫灯らない。」

上鳴「っ!？」

闇緑谷『ラヴァゴーレム！ここは任せる、この憐れな愚者どもを焼き殺してしまえ!』

そう言う時緑谷は身を翻し森の中へ消えていった

八百万「待ちなさい！耳郎さんを解放しなっああ!？」

飯田「危ない！」

去る緑谷を追おうとした八百万を火炎が襲うが飯田が走り間一髪で救出する

飯田「気持ちちはわかるが今はあの怪物をどうにかしなくては！」

「僕たちだけの手で」

—————

自分の力を過信していた訳じゃない

でも、どうにかなると思っていた

自分一人では無理でも頼れる仲間に巡り会えた

まだ短い付き合いだが少なくない試練も皆で乗り越えここまで来れた

だからこいつらに着いていけば俺もヒーローになれると思っていた。

でも俺は一つ勘違いをしていた

皆で協力する、けどそれは各々が自分で困難の乗り越え方を考え最適解を導きだして

来たからだ

あのバカ話仲間の峰田でさえ緑谷出久の罫を一人で乗りきり成長を見せつけた

俺は、俺は・・・



「命を懸ける時なんだ！」

っ!!

・・・ああ、そうだよな。

身近でよく一緒にバカやつてる仲間が教えてくれた

理由や動機がどうであれ、あいつはそれを体現して見せた

今度は俺の番だ！

考えろ、足りない俺の頭をフルに使え！

—————

八百万「くっっ！」

八百万は焦っていた

八百万（私を庇い耳郎さんはあのようなことに・・・。

早く助けねば！）

しかし一人でどうにかなるような相手ではない相手の体は溶岩下手な武器はすべて溶かされてしまう

ましてや遠距離系の武器を使うには中心に囚われている耳郎への誤爆が危険すぎる

そこへ

上鳴「ヤオモモ！」

上鳴が障子、を引き連れ現れた

上鳴「力を貸してくれ！」

自らが集めたメンバー達に作戦を手短に伝える上鳴

しかし・・・

八百万「そんなつ、いくらなんでも危険すぎます！」

上鳴「今はこれしか思いつかねえんだよ！」

そりや、爆豪や轟がいればもつといろいろできるかも知れねえが・・・時間がねえ、頼む。

力を貸してくれ！」バツ

頭を下げ意思を示す上鳴

障子「・・・この作戦で最終的に一番危険になるのはお前だ、それをわかっているのか？」

上鳴「ああ、峰田が前に言ってたよな、俺は此処なんだ。命を懸けてでも耳郎を助けなきやいけないんだ！」

八百万「上鳴さん・・・。」

障子「……わかった。」

障子が静かに賛同の意思を示す

障子「仲間として、同じ男として、その決意を無下にはできない。お前の作戦に乗らせてもらう。」

上鳴「……サンキューな、障子。」

八百万「……私も微力ながら協力させていただきます。」

八百万もまた己の決心を伝えた

ラヴァアゴーレム「オオオ……。」

耳郎「はあ、はあ……。」

抵抗虚しく体力を消耗し檻の中でへたりこんでしまう耳郎

蛙吹「耳郎ちゃん!!」

飯田「ぐつ、早く助けねば! 耳郎さんの体も限界に近い!」  
ダッ

そこへラヴァアゴーレムに向かい走る大柄な影が現れた

八百万「いくら防火服といっても、そこまで万能ではありませんわ。障子さん油断し

ないでください！」

上鳴「すまねえ障子、頼むぜ！」

障子「・・・任せろ！」

上鳴と八百万を背にのせた障子がモンスターに突っ込む

ラヴァゴーレム「ヴウ!？」

近寄らせまいと口から火を吹こうとする口を

ビュン!

ラヴァゴーレム「グヴオ！」

レーザーが阻止する

障子「ウオオオオオオ!!」バツ

その怯んだ隙にとラヴァゴーレムへ一氣に間合いを詰め

ガシャアン

耳郎の囚われてる檻に自らの触手を巻き付かせた

ジウウウウウ

障子「グッ、俺の複製腕の事は気にせず早くやれ！」

八百万「障子さん、ありがとうございますわ！」

自らの個性でチェーンソーを作り出し

ギユイイイイイイン

ガシヤアン

檻を切断した

上鳴「耳郎!!」

八百万「耳郎さん!!」

檻の中に入り耳郎に駆け寄る二人

耳郎「ヤ・・・ヤオモモ、上鳴、あ・・・ありがとう。し、信じてた・・・よ。」

弱々しいながらも笑顔で感謝した後気を失う耳郎

八百万「ツ・・・耳郎さん、遅くなって申し訳ありません!」

耳郎の体を起こし涙を湛え謝罪する八百万

上鳴「ヤオモモ!すぐに耳郎を!」

障子「不味いぞ!青山が押さえてくれているが溶岩がこぼれ落ちる頻度が上がってきている!」

再び障子の背に耳郎を背負い駆け込む八百万

そして振り返り

八百万「上鳴さん……。」

上鳴「障子、女子二人頼むな。」

いつものようなちよつと軽い印象を残す笑顔で見送る上鳴

障子「ああ、任せろ。」

・・・死ぬなよ、上鳴！」バツ

青山「ぐう、もう抑えきれない！」

顔色が真っ青になりながらも影で奮闘していた青山の切迫した声が響く

ラヴァゴーレム「ヴァアア！」ドロツ

ジュウウウ

上鳴「がああああ！」

一人檻の中に残った上鳴の身が焼かれる

上鳴（あつちイイイ！なんだこりや！！耳郎、お前やつぱすげえわ！こんな所で一人で皆信じて待っててくれるなんて……。）

障子「はあ、はあ・・・この辺で、」

八百万「障子さん、ありがとうございます。」

女子二人を背負い軽い火傷を負いながらなんとかモンスターから離れたところに来た障子

そこにクラスの仲間も近寄る

飯田「大丈夫か、皆!？」

障子「俺は、大丈夫だ。それよりも耳郎を・・・。」

八百万「耳郎さんは脱水状態みたいですよ!」

麗日「ならこれ!」

麗日を筆頭に今手持ちであるペットボトルの飲料を渡していく

八百万「ありがとうございます、耳郎さん!大丈夫ですか!」

耳郎「うっ・・・うう、や、ヤオモモ!？」

意識を取り戻した耳郎

八百万「ああ!よかった!今はとりあえずこれを・・・。」

耳郎にペットボトルの飲料を与える八百万

次第に顔に生気を取り戻していきなんとか最低限の回復を果たした耳郎はそこであ

ることに気づく

耳郎「あ……あれ？　そういえば、  
か……上鳴は？」

その言葉に回りの人間もハツとなり見渡す

瀬呂「そういえばあいつは!？」

峰田「なあ障子、ヤオモモ？　どうしたんだよ!？」

八百万は唇を噛みしめ視線を逸らす

障子は目を瞑り深く呼吸をする

常闇「ッ!?!まさか!？」

常闇がなにかに気づいたように再び視線をモンスターの方に向ける

その行動から他のメンバー達も勘のいいものから視線を移していく

障子「すまない、同じ男として、あの決意の目をしたものを止めることはできなかつた……!？」

上鳴（今から俺が仇を討つから無事に帰れたらまたあの笑顔、見せてくれよ!）

上鳴は決意を決めると防火服を脱ぎ檻を自ら掴むと



上鳴「化物め！俺のクラスの女子にひどいことしやがって!!」

ユルさねえからな！女子の為に戦うときの俺は・・・チヨ―強ええ!!」

バリバリバリバリバリバリバリ

ラヴァゴーレム「ヴオオオオオオオオオオ!?」

飯田「か、怪物が!?!」

麗日「苦しんどる!?!」

上鳴が立てた推測は檻が溶岩の中にある核と繋がっているのではというものだったならば檻から衝撃を伝えていけばいい

上鳴の己の命をかけた決死の作戦は当たっていた

しかし、

ラヴァゴーレム「ヴオウ！ヴオオオオオオウ！」グワングワン

もがき苦しみながらも上鳴を振り落とそうと暴れるラヴァゴーレム

更に

峰田「げっ！出力が・・・！」

尾白「お、落ちてきてる！」

葉隠「そんなんっ!?あと少しそうなのに！」

耳郎「上鳴イイイイイイイイ！」

上鳴「なめんな！合宿の成果、見せてやる！

ウエエエエエエエエエエイ!!」

視界も朧気になり、脳や体が危険と信号を発してくる、それら一切を気持ちでねじ伏せダメ押しとばかりに放電を続ける上鳴

その結果

ラヴァゴーレム「オオオオオオオオオオ!?」

ラヴァゴーレムは悲鳴のような絶叫を森にとどろかせ灰のように変わり風に吹かれて消えていってしまった

## O—オーバースウル

3対1と窮地に立たされた爆豪に現れた援軍、それは・・・

切島「大丈夫かつ!?」

補習組で離脱していた筈の切島だった

爆豪「ぼか野郎! 何しに来やがった!」

トガ「よそ見しちやダメですよ。」

爆豪の意識が切島に向いた瞬間、トガがナイフを構え爆豪に襲いかかるも

切島「させねえ!」ガキンツ

トガ「きやあ!?! 君固いですねえ、ナイフが折れちゃいましたよ。」

硬化した切島が盾となった

切島「こつちの二人は任せるバクゴ—!

お前は轟をつ!」ガキンツ

トガ「む、惜しかったです。」

トウワイス「もうちよいだったな!」『どこ狙ってるんだよ!』

切島が爆豪に背を預け視線を少し逸らした瞬間にトガが再びナイフを投擲してくる

問答をする時間の猶予がないことを悟った爆豪は

爆豪「・・・ツくそ髪！ハマすんじやねえぞ！したら後でぶっ殺す!!」

切島「ツ！ああ、任せとけ!!」

その会話を最後に完全に意識をヴィランに向ける

爆豪「さあ、これでサシだ！半分野郎を返しやがれくそ仮面ヴィランが！」

手のひらを小爆発させ威圧する爆豪

コンプレス「おやおや、困ったな。」

おどけた感じで肩をすくめてジエスチャーをするコンプレス

爆豪「この俺を獲物扱いたあなめた真似してくれるじやねえか！半分野郎の分とまと

めてぶっ殺してやるよ!!」

これまで強いられた苦戦のストレスを発散するかのように今にも飛びかかるとする

爆豪

しかし一方で・・・

爆豪（あの半分野郎が後ろを取られたからといってすんなりやられすぎだ。生け捕り

とか抜かしてたから死んじやいねえだろうが・・・）

頭の中は冷静に現状の整理、相手の分析と動いていた

コンプレス「・・・やれやれ、これでまだ16歳か。」

獣のような威勢を見せたかと思えばその頭の中は冷静沈着……まるで燃え盛る青い炎のようだ。

誇つていいよ、それはプロでも簡単には習得できるものではないからね。」

諭す様に優しく語りかけるコンプレス

爆豪「はっ、そりやどうも。

ヴィランに褒められても嬉しくないが、そこまで評価してくれたお礼に速攻で叩き潰してやるよ！」

我慢の限界か勝てる見込みができたのか攻勢に出た爆豪

コンプレス「だが……。」

ガンツ

爆豪「ガアッ！」

突然の後頭部への衝撃に驚愕の表情を浮かべる

コンプレス「話に聞いていた過去の君よりも今の君はずっと期待はずれだったよ。

緑谷<sup>かれ</sup>の話では君はもつと気高く孤独にも耐える心を持ち他を蹴落とそうが脇目も振らず高みを目指す……そんな男だったと語っていたけどね、環境が人を変えてしまったのかな。」

コンプレスの言葉も耳に入らず薄れいく意識を懸命に手繰り衝撃の正体を探る。

爆豪「て……てめえ、なん……してん……だ……!」

切島「……………」

そこに映ったのは生気のない目をした赤髪の少年

自身が背中を託した筈の切島だった

コンプレス「確かに緑谷くんが失望するわけだ。君は人に頼る事を覚えてしまった。だからこんなあつさり引つ掛かってしまう、まあ楽に越したことはないから別にいいけどね。」

コンプレスは個性を使い爆豪を回収した

コンプレス「これでよし。」

トガ「こっちはどうしますか？切りますか？切っていいですよね!」

感情を高ぶらせながらナイフを取り出すトガ

「今回は勘弁してくれないかな。」

トウワイス「オツ!」

緑谷「彼にはまだ利用価値があるからね。それに、もつと大舞台上で暴れた方が楽しいよ。」

茶毘「……………」

柔らかな笑みで諭す緑谷とその後ろで無言で佇む茶毘が闇より姿を表した

トガ「ムー、イズクくんがそう言うならやめときます。」

渋々納得してナイフをしまうトガ

コンプレス「それにしてもいつから見えていたんだい？出来れば入って頂ければもつと楽に済んだと思うんだけど……。」

緑谷「いやー、トガさんの演技に心を奪われて足が止まっちゃいましたね。」

トガ「そうですね！私の名演技あつてこそその成功ですもんね！」

トウワイス「ヨツ、名女優！」「この三文役者が！」

茶毘「……終わつたなら早く移動しようや。」

これ以上付き合つていられないと態度に表す茶毘

緑谷「ごめんごめん、じゃあ移動しますか。」

茶毘さん合図よろしく。」

ゴオアアアア

夜空に切り裂くような火柱が上がる

コンプレス「祝砲つてところかな。」

トガ「結局この子はどうしますか？」

切島「……。」

緑谷「このまま連れていこう。あまりコンプレックスさんの持ち物増やしたくないしね。」  
トウワイズ「しかし、ここまで仕込みがいいと楽でいいぜ。」「疲れたぜ!」

暗い森の中へ意気揚々と引き上げていく緑谷達  
その背中を

「……………」

闇に紛れ見つめる者がいた

—————

ボオアアアア

虎「ムツ!」

マンダレイ「今度はなにっ!？」

モンスターが消えたかと思えば今度は別方向から火柱が上がる

マグネ「あら、意外と早かったわね。そろそお暇の時間よ。」

スピナー「粛清が完遂できなかったのは残念だかやむを得ん。」

先ほどまでと一転して後退の姿勢となる二人

虎「ここまで好きに荒らされてただで逃がすと思うか!」



そうはさせまいと追撃に走る虎だったが、

スピナー「ふんっ、頭に血が昇った偽物め……。」

スピナーが一枚のカードをかざす

「……………」

虎「つ邪魔だ！」バツ

虎の動線を遮るように異形のモンスターが現れるが虎はお構いなしに腕を一閃するすると……

ボガアアアン

マンダレイ「虎!!」

虎「グウウウ……。」

なんとモンスターは腕に弾かれた瞬間に自爆のようにその場で弾けとんだのだ

ニユードリア 星4 闇属性 悪魔族

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られたとき、フィールド上に存在するモンスターを1体破壊する。

マンダレイ「しっかりして！」

虎に急いで駆け寄るマンダレイ

かくしてヴィランの追跡は断念を余儀なくされる二人だった

—————

マグネ「この辺よね。」

藪をかき分け予定していた集合場所へとたどり着いた二人

辺りを見渡すが誰もいない。

すると……

「ちよつとだけそつちが早かったね。」

マグネ「あら、ほぼ同じ位だったわね。そつちの首尾はどう、リーダー？」

緑谷「上出来さ。」

切島「……。」

マグネとスピナーの目が切島に行く

スピナー「こいつは？」

緑谷「切島君。僕の元クラスメイトで今回の作戦の功労者さ。」

トウワイス「しかし洗脳つてのは便利でいいな。」「使いづらいぜ！」

コンプレス「後はあのモンスター達も凄かったな。」

いや、それもあるが流れを読みの確にそれを使用できる君の勝負勘の良さ、おじさん感服しちゃうよ。」

トガ「すごいですね！まるで魔法使いみたいでしたよ！」

ズズズ・・・

黒霧「お時間なので迎えに上がりましたが、どうやら首尾よく済んだようですね。なにも無い空間から黒霧が現れる

トウワイス「大成功さ。」「ダメだったぜ！」

緑谷「それじゃあ、皆さん帰りましょうか。」

緑谷の一声で黒霧の個性を潜ろうとしたとき

「ま、待て!!」

呼び止める声が聞こえてきた

芦戸「切島を元に戻して！あと、どこ行ったかわからないけど轟と爆豪も返せ！」

黒霧「おやおや、かわいらしいお客様ですね。」

乱入者の正体を知るや見るからに肩の力が抜けた敵達の態度に

芦戸「ぼつ、バカにしないでね！」

あたしだってヒーロー目指してるんだから！」

精一杯の勇気を振り絞り戦意を見せる芦戸

茶毘「・・・誰か相手してやれよ。」

コンプレス「おじさんはもう疲れたから今日は手仕舞で。」

緑谷「じゃあ、せつかくだしもう一仕事してもらおうかな

切島君。」

芦戸「ツ!!」

虚ろな目をした切島が前に出る

闇緑谷『ただでさえ情に厚い彼が仲間を裏切り、更には中学からの同級生を手にかけてとなれば・・・洗脳を解いたときどうなっちゃうのかなあ?』ニタア

愉快的声色で歪んだ笑顔を見せる緑谷

茶毘「いい趣味してるぜ。」

呆れた顔で野次る茶毘

闇緑谷『黒霧、ここは俺が残るから後の皆は帰しとけ。』

黒霧「かしこまりました。」

その言葉に他のメンバー達も従う

トガ「私も残りたいです！」「ダクメ。」えー、なんでですか？」  
マグネ「夜更かしは乙女の大敵よ。」ガシッ

トガも残留の意思を示すもマグネに掴まれ連行されていった

黒霧「では改めて迎えに来ますがくれぐれも油断なさらぬよう……。」  
ズズズ……

こうして緑谷以外を飲み込み黒霧は姿を消した

闇緑谷『待たせたね、じゃあ始めようか！』

キイイイン

緑谷と切島の額にヴジヤドの眼が浮かび上がる

芦戸「っ!？」

闇緑谷『さあ切島くん……』

殺れ。』

ビキビキビキツ

ダッ

緑谷の言葉に反応し個性を発動し芦戸に飛びかかる切島

ブンッ

芦戸「きゃあ！」

持ち前の運動神経でなんとか回避する芦戸

芦戸「ちよつと切島！」

なに敵に操られてんのよ！しっかりして！！

必死に呼び掛けるも、

切島「殺す・・・殺す！」

血走った目を見開き有りもしない殺意を植え込まれ暴走する切島

芦戸「切島・・・。」

自分の訴えがまるで届いていない事へ悲痛な思いが胸を覆う

その隙が命取りだった

切島「ウガアアアアア！」ガッ

芦戸「エッ・・・きゃあ！」ドサッ

飛びかかって来た切島体当たりをモロに喰い転倒してしまった  
切島「ガアッ！」ガシッ

芦戸「ウグッ！」

そこを好機とばかりにのし掛かり上から芦戸を押さえ込む切島

切島「殺す．．．殺す．．．」

トドメを刺すべく硬化した拳を振り上げる切島

芦戸「お願い、戻って．．．」

助けて．．．切島．．．」ツウー

—————

．．．ここはどこだろうか？

暗い、でも窮屈さを感じない。

むしろ体が軽い。

んっ？

??? 「．．．．．」

誰かいる。

黒髪の・・・気弱そうな・・・学ランの・・・俺。

嗚呼、そうだ。

地味な個性で、助けを求める人に向けて一步も踏み出せない

惨めな・・・俺。

漢気なんて無い、本来の俺はヒーローになんて到底向かない奴だったんだ。

俺はとんだ勘違いのバカヤロウだ。

暗い景色に体が同化していくような錯覚に見舞われる

どンドン闇が濃くなっていく気がする。

自分が飲み込まれていく。

それでも構わない・・・。

だって俺の本質は・・・。

「あの時のこと、辛かったんだねエ」

ッ!?

「そんな暗い顔してちや決別にならないよ!」

嗚呼・・・。

「いつか切島の中でちゃんと乗り越えられたら、そんな時は教えてね!」

本当に俺は馬鹿野郎だ。







闇緑谷『ハアツ、ハアーツ、まったく忌々しい!』  
胸を押さえながら二人へ距離を詰める緑谷

闇緑谷『我が洗脳を破るとはたいしたものだ、こうなれば俺 自ら二人とも始末してやる!』スチャ

千年ロッドの仕込み刀を取り出し更には詰めより振りかぶる緑谷

芦戸「クウツ・・・!」

切島の洗脳は解けたものの未だ状況は絶体絶命  
緑谷の凶刃が二人の命を刈り取ろうとしたとき

DRRRRRRRツ!

ヒユツ

「させない!」

ドゴンツ!

緑谷『ウゴオ!?!』

何者かに横から体を浴びせられ吹き飛ばす緑谷

ドカツ

緑谷『グツフオ!』

その勢いのまま木に衝突し倒れこんでしまった

飯田「委員長としてこれ以上クラスの皆に危害が及ぶのを許す訳にはいかない！」

闇緑谷『クソツ、どいつもこいつも邪魔ばかりしやがって！』

「緑谷出久。」

ズズズ・・・

黒霧「こちらの目的はもう達成されています。

ここは頭を冷やし引きましょう。」

他のメンバーを送り届けた現れた黒霧の忠告に

闇緑谷『・・・チツ！覚えておけ！貴様らがどれだけ足掻こうとも新たなる世の創生

は止めることはできない！新たなる神の前に跪くがいい！』

そう捨て台詞を残し黒い霧の中へ入っていく緑谷

こうして林間合宿は生徒の命は無事だったものの二名誘拐されヒーロー側の完全敗北としてひとまずの終結となった。

————運命の日は近い！

## 反撃準備

林間合宿という一大イベントは悪夢に塗りつぶされた

敵の襲撃により戦場と化した林間合宿を生還した卵達は今、合宿所近くの病院に収容されていた。

参加したA組、B組共に命を落とした者はいなかったが、誰も生き残れた喜びを噛み締めてる者はいなかった。

爆豪と轟  
生徒2名とプロヒーローラッグ1名が行方不明

引率教師2名とプロヒーロー虎が負傷、更に応援に駆けつける筈のプロヒーロー達も敵の妨害により負傷者多数に対して

ヒーロー側は足止めを行っていた敵三名を逮捕するので精一杯という結果だった

—————

拉致された爆豪と轟、そして事情聴取の為に別室にいる切島と芦戸を除くメンバーは一つの病室に集まっていた。

耳郎「……………」

八百万「耳郎さん……………」

八百万の言葉に耳郎は反応せずただ言葉がむなしく消えていく

その耳郎の視線の先には

上鳴「……………」

目を瞑り横たわる上鳴がいた

モンスターを決死の覚悟で葬った上鳴だったが容量を無理矢理オーバーしてまで個

性を使用し続けた反動で意識が戻らずにいた

峰田「上鳴イ、起きてくれよ……………」

お前が起きてくれなかつたらおいらの話し相手がいなくなっちゃうだろオ……………」

涙声で意識のない上鳴に話かける峰田

常闇「……………」

障子「……………」

やるせない気持ちを押し殺すかのように目を背け誰もなにも言えないでいた

耳郎「なんでだろうね？」

誰にも言うわけでもなく耳郎が語り出す

耳郎「なんで、自分が誰かの為に命をかけることはすんなりできても、誰かが自分の

為に傷つくと心がこんなに痛くなるんだらうね……」

言い終わる前から感情が決壊したかのように涙が止めどなく溢れる耳郎

八百万「……。スッ

それを見て無言で自らの個性で創造したハンカチを差し出す八百万

耳郎「ごめんつ、ごめんね。ヤオモモ。」

八百万「今は好きだけお泣きください。それを嘲笑する人はここにはいませんから。」

耳郎の涙を受け一部のメンバーからもすすり泣く音が聞こえていた

病室に重い空気が満ちていく

「な……なに泣いてん……だよ……耳郎……。」

耳郎「ツ!？」

峰田「上鳴!？」

上鳴「お前は……笑ってる方がきれいなんだから……そんな顔するなよ、耳郎。」  
意識を取り戻した上鳴に一時の歓喜が広がる

そしてすぐに駆けつけた看護婦、医師による確認が行われた。

八百万「上鳴さん、ご無事でなによりでしたわ!」

上鳴「ごめんな、ヤオモモ。」

つてありや？　そういや何人かいなくね？」

飯田「上鳴くん、落ち着いて聞いてくれ……。」

飯田は上鳴に現状を包み隠さず伝えた

上鳴「マジかよ……。」

絶句する上鳴

そこに……。

ガラガラガラ

芦戸「あつ上鳴！　よかった。

目覚ましたんだね！」

切島「……みんな。」

そこに事情聴取を受けていた二人が帰ってきた  
ガンツ！

切島は病室に入るや膝を下に着け頭を下げた

飯田「き、切島くん！　なにを……。」

切島「すまねえ！

俺のせいでみんなに迷惑をかけちゃった！



こんなんでも許されるとは思わないけど……今の俺にはこうする以外思い付かねえんだ!!」

ポタツ　ポタツ

土下座をして伏せた顔の下に滴が落ちる

麗日「そんな! 切島くんが悪いんじゃないやん!」

蛙吹「そうよ。悪いのはあなたに洗脳をかけた緑谷出久よ。」

切島「でも、でも……俺がもつと勘が良ければ俺の心がもつと強ければ!

こんなことには……。」

飯田「……君の気持ちは痛いくらい伝わっている。

君が自分を許せない性分も理解している。

だから顔をあげて前を見てほしい。

だって僕らはまだ生き延びたんだから。」

峰田「そうだぜ! それに今ごろプロヒーロー達が二人の搜索をしてるだろうし、オルマイトが二人を連れて帰ってきてくれるさ!!」

口々に切島へ言葉をかけるクラスメイト達

切島「すまねえ……すまねえ……!」ポタツポタツ

先程と同じように溢れた涙と謝罪

しかしそこに含まれる感情は真逆になっていた

—————  
ヒーローの信用失墜を目論む敵連合

その第一段の作戦としては上々の滑り出しとなり

帰還した彼らは息抜きを行い次の作戦へ英気を養うことになった

緑谷「チエックメイト。」コトツ

コンプレクス「あらら、そうされちゃうとおじさん参っちゃうんだけどな。」

トウワイス「おいおいマジかよミスター！俺あんたの勝ちに賭けてんだから頑張ってくれよ！」「ほどほどになー」

トガ「キヤア、かつこいいですう！キズがあればもつとカツコよくなりますよ、だから……」

マグネ「ハイハイ、男の真剣勝負に口をはさまいようにね。」

茶毘「もう一杯同じのをくれ。」

黒霧「かしこまりました。」

死柄木「おいお前ら、たるみすぎだろ……」

自由気ままに過ごす彼らに連合リーダー、死柄木は呆れ返っていた

「……ハッ、ここは?」

「……アアツ!? なんだこれ!?」ガシヤガシヤ

トガ「アツ、起きたみたいですね。」

先の襲撃の際に拉致した爆豪と轟

二人は現在手を後ろに回され背中合わせで拘束されていた。

爆豪「おいてめえら! 今すぐこれはずせ!!」

コンプレス「おっと、無闇に個性を使用しない方がいいよ、後ろの友達が大変な事になっちゃうからね。」

両手は今、二人の背中の中にある、個性の都合上発動しようとするればもう片方にダメージを与えてしまう、それを見越しての拘束だったが

死柄木「それでもやるってんなら大歓迎だぜ、まったく窮屈だな、ヒーローってのはよ。」

爆豪「クソがッ!」

轟「……ッ!」

二人は悔しげに睨み付ける

緑谷「ねっ、やっぱりやらないでしょ。だから僕は言ったんですよ、無駄だつて……。」  
死柄木の後ろからバカにしたように話す緑谷

爆豪「クソデクウ……！」

轟「緑谷……出久ッ！」

その姿が瞳に映るや二人の眉間のシワがより深まる。

マグネ「あらあら、熱烈なアピールね。」

コンプレス「人気者だねえ。」

死柄木「あくあ、当てが外れたな。あの映像とか見てたとき二人共絶対こつち側の素質があると思ってたんだけどなく！」

「残念だったね、弔。」

だけどめげてはいけないよ、こういうのは経験だからね。」

隅のモニターから声が聞こえる

瞬間

爆豪／轟「ッ!？」ゾクッ

空気が一変する

この空間の酸素が一気に薄まったかのような錯覚に陥る

呼吸が自然と浅くなる

「人心を掌握するにはもつと経験が必要だからね。急を要するなら私の力で洗脳してしまおうけど。」

軽い感じで重大な宣告を行う声の持ち主に

死柄木「いや、それには及ばねえよ、先生。

次のステツプへ進むだけだからな。

なあ、緑谷！」

緑谷「ふふふ、始めからこっちの案にすればよかったのに・・・。」

トガ「ウフフフフフ！」

死柄木が首を向けた先にいたのはヴィラン連合のブレーション緑谷出久

彼が肩を竦めて眩くとそれを聞いたトガの顔が綻び始める

死柄木「よかったなためえら、歴史に名前残してやるよ！」

向き直った赤い目に狂気が帯びる

闇緑谷『さあ、ゲームスタンバイだあ！』

トガ「ンフフフフフフフ、アハハハハハハハ!!」

爆豪「ンだとオ・・・!?!」

轟「俺らになにをやる気だ！」

死柄木「体育祭での決勝二人、知名度全国区になったお前らが敵になれば・・・、つ

て思ったけどよ。

お前らにその気がないようだからな。」

爆豪「たりめえだ!!」

轟「貴様らの思い通りになぞなるかッ！」

死柄木「なら話はややこしくしない方がいい、てめえら有望な卵を踏み潰して世間に知らしめてやるよ！」

この平和が！その憧れが！どれだけ脆く、偽りのものかというのをな！」

—————  
雄英高校では緊急会議が設けられた

会議に参加するも、教え子を危険に晒し、誘拐されてしまったことに自らの無力感に苛まれるオールマイトだったが

でーんーわーがー来た！

一本の電話が彼の闘志を呼び覚ました！

オールマイト「塚内くん、今すぐそちらに向かう！

彼らに会ってこう言わなければならぬね。

私が、反撃に来た！ってね。」

そこには己の無力に打ちひしがれる教師の卵はいなかった  
己の使命を全うし悪と戦う平和の象徴が立っていた

## 現世と冥界の逆転

雄英高校にて行われた緊急記者会見

詰め掛けたメディアの質疑に答えるのまだ痛々しい包帯のとれていない担任プロヒーロー達だった

死柄木「……………ハハッ。」

その生中継をアジトから視聴する死柄木

死柄木「まったくザマアないなあ！天下の雄英様もお前らのお陰で信用失墜だな、ハハハッ」

轟「クツ……。」

爆豪「チクシヨウがあ！」

愉快に目を細めて振り替える死柄木

拘束された2人は歯がゆく悪態をつくしか出来なかつた

死柄木「さて、記者会見も始まった事だしこつちも準備出来次第始めるぞ。」



そう言つて後ろのメンバーに声をかける死柄木

緑谷「ああつ、スピナーさん。

照明もつとこつち向けて。」

スピナー「こ、こうか？」

コンプレス「カメラの調子はつと……。」

トウワイス「衣装ケース持ってきたぜ！」

茶毘「……もう一杯同じのをくれ。」

黒霧「始まる前に出来上がつてしまいますよ？」

せつせとこれから始まる宴の準備に勤しむ中

マグネ「ほら、おめかしする前に挨拶しときましょ。」

トガ「ソフフ、今日の貴方達の処刑係をするトガヒミコです、よろしく願ひします

！

処刑する前にたくさん切り刻カッコよくしてんでから処刑してあげますね！」

興奮を必死に押し殺して丁寧カッコよくしてに挨拶をするトガヒミコ

その後も刻々と準備が進み、記者会見も佳境に入ったところで

緑谷「そろそろ準備完了かな。」

死柄木「じゃあ、始めようか。俺らの新たななる時代の幕開けを示す歴史的撮影を！」

轟「むぐぐぐ!!」

爆豪「ぐうー!!」

猿ぐつわを噛まされ言葉を発することの出来ない二人を尻目に死柄木より始まりが告げられる

しかしそれに水を差す声が響く

「ドーも、ピザーラ神野店でーす。」

茶毘「・・・ピザなんて頼んだっけか？」

茶毘が気の抜けた質問を投げ掛けた次の瞬間

扉は木っ端微塵に破壊されそこから雪崩れ込んで来たのは

「先制必縛!ウルシ鎖牢!」

「逸んなよー!」

ドタドタドタ

「もう逃げられんぞ敵連合!!」

なぜって?

我々が来た!!」

死柄木「オール・・・マイトツ!!」ギリツ

まさに一瞬の出来事だった

シンリンカムイの個性で全員拘束され火を扱う個性の茶毘はグラントリノにより気を失っていた

更に・・・。

死柄木「くそつ、新たな時代を前にして終われるか！

黒霧ありつたけ持つてこい！」

黒霧「申し訳ありません死柄木弔。

所定の位置ある筈の脳無がない・・・。」

オールマイト「やはり青二才だったようだな！

貴様は舐めすぎたのだよ！

プロヒーローの力を！

警察のたゆまぬ捜査を！

我々の怒りを！」

既にプロヒーロー達は脳無の格納庫についても気づいており別動隊のプロヒーロー達を派遣し制圧及び拉致されたラグドールの救出を成功していたのだ

拘束され動けない敵連合

その間に爆豪と轟はオールマイトにより救出され、やっと自由を取り戻したオールマイト「さあ、もう大丈夫だ。

助けるのが遅れてしまい申し訳なかった！

かわいい教え子達をこんな命の危機にさらしてしまつて私は自分が許せないよ！」

オールマイトは申し訳なさそうに二人に言葉を述べるとすぐに怒りの表情になり死柄木率いる敵連合にその鋭い視線を送る

「さあ死柄木弔！

貴様のお遊びもここまでだ！

言え！貴様の裏で糸を引いている奴はどこにいる!？」

死柄木「黒き・・・!？」

黒霧の個性を使い脱出を試みるもそんな事を許すわけもなくエツジシットにより黒霧は気絶してしまつた

死柄木「くそ、くそくそくそ！

あともう少しだつてのに!!？」

てめえらはことごとく邪魔しやがつて！」

オールマイト「死柄木!!」

死柄木「お前が！」

嫌いだ!!」

「・・・うええ!!」バシヤバシヤ

死柄木の魂からの言葉を皮切りに敵連合のメンバーの口から臭気を伴ったヘドロの様なものが吐き出される

さらに・・・

爆豪「なっ!!」バシヤバシヤ

轟「うぐっ!!」バシヤバシヤ

二人の口からも同様のものが溢れだした

ヘドロは止まることなく吐き出した者達を飲み込み姿を消してしまった

それと入れ替わるように

シンリンカムイ「なっ、何が起こっている!？」

どうしてここに脳無が現れるんだ!」

オールマイト「ジーニスト! 格納庫で何が起きた! ジーニスト!」

『まったく、相変わらぬ無粋な奴だよ。お前は・・・。』

オールマイトそして近くで漏れてきた声を聞いたグラントリノに戦慄が走る

時は少し遡り格納庫制圧完了直後

そこは一瞬にして地獄と化していた

格納庫制圧に選りすぐりの精鋭達で構成された別動隊のプロヒーロー達が皆傷つき倒れ伏していた

ジーニスト「ガハッ、き・・・貴様が黒幕か!!」

仰向けに倒れながら上半身を必死にお越し地獄を作り出した元凶を睨む

???「まったく、弔は今大事な時期なんだ。

もつとデリケートに扱わなくてはならぬというのに、」

苛立ちながら足を上げそのまま倒れているジーニストの無防備な腹に踏み落とす

ジーニスト「ゴハッ!」

堪らず血をまぶして息を吐き出すジーニスト

すると

『ジーニスト!格納庫で何が起きた!ジーニスト!』

通信用に耳に入れていたのであろう端末から声が漏れてくる

巨悪はその端末を奪い取り自らの耳に入れる

「まったく、相変わらず無粋な奴だよ。お前は・・・。

ああ、そうだよ。

僕がいる、君にはこれだけ伝えておけば十分だろ？」

バキッ

自らの話したいことは全て話終えたのかおもむろに耳から端末を取り出し握り潰してしまった

ジーニスト「ま・・まさか、貴様が・・!?」

???'「おっと自己紹介がまだだったね、僕としたことが失敬、失敬。

僕の名前はオールフオーワン。

以後よろしく。」

顔はマスクで大部分が覆われている為判別できないが声色から柔和な雰囲気は漂ってくる

そんな男がこの惨状を産み出したというギャップに愕然とするジーニスト

オールフオーワン「さーてと、彼らの為に少し僕も動こうかね。」

遂に動き出した黒幕

その手が作り出すのは希望か絶望か・・・